

東京国際大学論叢

人間科学・複合領域研究

第2号

論 文

- 大学カリキュラムの将来展望についての考察 …………… 田部井 潤…… 1
 ——大学教員は何をなすべきか——
- アイデンティティ概念の理論的背景と問題点について …………… 大矢 泰士…… 17
 ——精神分析的観点による再検討のために——
- 腹筋呼吸法が動画視聴によるストレス反応におよぼす影響 …… 麓 正樹…… 39
- 「太陽に乾杯」三島由紀夫の生の「欲動」…………… 安岡 真…… 53
 ——三島事件の心的機序の研究②——

研究ノート

- 大学野球の期分けにおける一般的準備期のランニング
 トレーニングが試合期の大学生投手の実戦状況下
 パフォーマンスに与える影響 …………… 赤池 行平…… 75
- 短距離スプリントドリルが大学生野球選手の
 短距離走速度向上に与える効果 …………… 赤池 行平…… 89
- 2020年オリンピック・パラリンピック東京大会開催地
 の住民におけるスポーツ振興に関する要望と
 期待される効果に関する研究 …………… 秋吉 遼子…… 101
 上代 圭子

東京国際大学論叢

人間科学・複合領域研究

第2号

大学カリキュラムの将来展望についての考察

——大学教員は何をなすべきか——

田 部 井 潤

Thinking about the View of University Curriculum: What Should the Universe Teacher Do?

TABELI, Jun

Abstract

Japanese University faces many problems. These problems are international competition on study and education, popularization of university and reduction of public support and so on. The university has to indicate its social significant by itself in this situation.

The aim of this paper is to make a forecast of future curriculum in university. To make the present university situation clearly, both students' academic ability and faculty development are focused on. Next we will investigate various needs, namely national needs, social needs and students' needs. In addition, national university policy and the development of information and communication technology, which will affect university curriculum, are considered.

In conclusion, following four characteristics of future university curriculum become clear.

1. the distinctive curriculum with small class corresponding to various personal needs
2. the traditional curriculum which values students' face-to-face communication
3. the curriculum using university faculties (laboratory, gymnasium and library etc.)
4. the curriculum which are mixed the traditional teaching technology and information and communication technology

To actualize these curriculum, university teacher have to reflect their teaching and learn how to develop new teaching skills.

キーワード：大学カリキュラム，大学の大量化，情報通信技術，大学政策

Keywords: University Curriculum, Popularization of University, Information and Communication Technology, National University Policy

目 次

- I. 問題の所在
 - 1. 危機的状況にある現在の大学
 - 2. 現代社会における大学の存在価値
 - 3. 本論の目的と構成
- II. 学生及びFaculty Developmentの現状と教育ニーズの分析
 - 1. 学生の学力問題と学びの意欲低下
 - 2. FDの現状
 - 3. 大学カリキュラムに関するニーズ分析
 - (1) 国からのニーズ
 - (2) 社会からのニーズ
 - (3) 学生・保護者からのニーズ
- III. 大学カリキュラム改革に影響を与える動き
 - 1. ICTの発展と大学教育
 - 2. 学士課程改革の方向性
- IV. 結論
 - 1. 大学カリキュラムの将来展望について
 - 2. 大学教員は何をなすべきか

I. 問題の所在

1. 危機的状況にある現在の大学

過去10年ほどの間に、大学を取り巻く環境が激変してきた。この環境の変化は、次のような現象としてこれまでの報道や研究の中で具体的に確認できる。大学進学率の上昇と高等教育の大衆化、大衆化に伴う大学生の学力低下(堀口英則, 2013)、学士課程における教育の質保証(山田礼子, 2012)、研究・教育分野における国際競争の激化、大学への国家介入と学問の自由の侵害(広田照幸・石川健治・橋本伸也・山口二郎, 2016)、そして既存の大学における学びへの懐疑とその変革(新しい学力の育成)(溝上慎一, 2014)などである。このような大学が直面している問題の増加は、日本でのみ確認されるものではない。例えば近年、Blumenstyk (2015)は、アメリカ合衆国の高等教育が、様々な危機的現象の中にあることを指摘している。¹⁾ もちろん各国の状態により、大学が抱える問題が顕在化する程度には違いが見られるが、高等教育に多様な問題が存在していることは共通している。その中で日本のようにアメリカ合衆国の大学をグローバルスタンダードモデルとして展開してきた国々においては、問題がより深刻化しているように思われる。²⁾

ここで、日本の大学に関連して、注目された話題に焦点を絞ってみよう。日本の大学を取り巻く具体的な問題としては、2004年から独立法人となった国立大学法人への補助金の減額と競争的資金の増加、それによって生じてきた国立大学法人間での公的支出の格差拡大、公立大学に見られる高等教育の公私負担率、私立大学の増加と定員充足率の低下、高等教育費の増大と家計負担の問題、就職活動と大学の授業との関係、そしてすべての大学に対して要求されてきた、認証評価、情報公開などがあげられよう。

さらに、2015年に特に新聞紙上等で話題に上ったトピックスとしては、奨学金問題と文系学部不要論が指摘できる。年々増加する大学の授業料増加と家計の所得の減少ないしは停滞は、学生支援機構を中心とした貸与奨学金（教育ローン）の増大を招いた。そして大学卒業生の就職問題や若年労働者に対する賃金の低下は、奨学金返済が困難となる状況を引き起こしている。奨学金の返済が社会問題化している日本の状況は、Collinge（2009）が指摘したアメリカの学生ローンの問題と酷似している。この問題に関して、国連憲章を基にした高等教育費の無償化を主張する論者も存在するが、世代間の教育費負担によって生じる格差の問題、大学進学者と非進学者間の不平等解消の問題、そして高等教育を享受した結果得られる社会的利益と私的利益の問題など解決しなければならない課題は多い。奨学金を巡る問題では、このように費用負担に関する議論が多く見られる。しかし、進学率の上昇とともに大学という学歴の価値が低下し、それに伴って大学で教えられる教育内容（カリキュラム）が大学卒業後の就業活動と連動していないことにより、就業が困難になってきたことも忘れられてならない。

また、「文系学部不要論」も、カリキュラム問題を考える上でよい機会を提供している。この論争のきっかけは、2015年6月に文部科学省が出した「国立大学法人等の組織及び業務全般の見直しについて」と題した通知であるが、これは吉見俊哉（2016）が指摘しているように報道機関の誤認によった引き起こされた騒動であった。しかしこの問題は、特に現代における文系学部の在り方を改めて問い直すことをきっかけとして、大学それ自体の存在価値とその社会的役割を見直す契機となった。

2. 現代社会における大学の存在価値

危機的な状況の中にある、日本の大学をまず社会的存在の側面から見ていく。大学は社会における公的組織であり、企業同様、永続的な存続を前提とした機関である。そしてその組織形態は、形式的には非営利組織であるが、実際には企業のような私的な営利機関としての側面も備えている。また、営利機関として設置・運営されている大学もアメリカには多数存在する。このように、大学組織は、近年大幅な変化を遂げてきているのである。

永続的な組織としての大学に影響を与える変化は、大学の定員充足率や大学資産の運営といった側面から分析できる。ここ10年ほどの間に、大学の経営、特に私立大学では、定員充足率を基盤とした大学経営が疲弊してきた。結果として、日本の私立大学の経営が、授業料に大きく依存していることや寄附行為が少ないこと、そして資産運営がアメリカと比べると積極的ではないことなども明らかになってきた。

また大学の最大の顧客である18歳年齢の大学進学者が大学に期待する内容も、以前とは明らかに違ってきている。進学率の上昇とともに、非伝統的學生が増えた結果、大学教育に及ぼした影響については既に指摘されている。実際、大学教員としては誰もが、授業内容に対する学生の関心が薄れているのを実感しているのではなからうか。すなわち、大学教育の価値に関しては、現在の学生にとってはなんらの興味もなく、その結果として、単位の取得と大学卒業という学歴取得のために大学に通学する学生数が増加していると教員は感じているのである。もちろんこのような学校教育に対する無関心や形骸化は、大学だけではなく、初等、中等教育機関にもみられる。しかし今日大学が完成教育としての役割を果たしていることから、大学教育に対する社会からの期待は、他の教育機関と比べて大きいのである。

これに伴い、大学それ自身の存在価値が変化してきた。多くの大学、とりわけ社会的威信の低い大学では、研究活動を中心とした機能は後退し、教育活動にその存在価値を見いだすように

なった。その中で、学生の就職活動で実績を上げる試みを行い、教育機関として社会的評価を高めた大学も存在する。しかしながら、多くの大学は、いまだ教育活動に関して、自らの存在価値を証明するような明確なビジョンを持ち合わせているとは思われない。

日本の大学は、組織存続のためにもまた社会的存在理由を示すためにも、教育活動に関してその存在価値を示す必要に迫られているのである。この問題は、より具体的に言えば教育活動の根幹をなす、大学カリキュラムを中心とした問題を再考しなければならないことを意味している。

3. 本論の目的と構成

本論の目的は、日本の大学を対象として大学の教育活動の根幹となる大学カリキュラムの在り方について考察するものである。本論の考察対象とする大学の属性は、いわば文部科学省の「スーパーグローバル大学創生支援」に選ばれるような上位校ではなく、それ以外の大多数を占める通学制の4年制大学を対象としている。このような大学に通学する多くの学生は、ユニバーサル化によって生じた学生である。なお、ここでいうカリキュラムとは、「教育計画」であるとともに、それを実際に展開していく方法論も含むものであり、その詳細については次章以下で考察していく。

本論考の流れは、次のようなものである。まず、大学の教育活動の現状を学生並びに教員の視点から把握する。その上で、大学の社会的意義を考える上で参考となる、様々な学習ニーズを分析する。これらの過程において、大学カリキュラムを考えるための基礎的条件が確認できる。さらに、大学カリキュラムに影響を与える Information and Communication Technology (以下、ICT³⁾と記す)の進展並びに学士課程改革の基本方針を検討する。これらの影響を考えることにより、大学教育が社会的な変化の中でどのような方向に進むべきであるかについても考察する。最後に結論として、大学カリキュラム改革の方向性を確認するとともに、それを実行するための必要な諸条件も含めて考察する。すなわち、新しい大学カリキュラムの在り方を展望する試みである。同時に大学教員が、大学教育を革新する際に、何をなすべきかについても併せて考えていくものである。

II. 学生及びFaculty Development (以下、FDと記す)の現状と教育ニーズの分析

現在の日本の大学教育が崩壊状態にあるということは、マスコミや現場教員を始め多くの論者により指摘されている(平山一城, 2013)。今後の大学教育プログラムを考えるにあたり、まず問題になっている大学教育の現状、教育者側の問題であるFDを見ていく。その上で、今後の教育プログラムを考察する上で考慮しなければならない教育ニーズを分析する。

1. 学生の学力問題と学びの意欲低下

大学における学生の学力低下問題が議論されるのは、近年に特有な現象ではない。大学生が勉強をしなくなったという指摘は、恐らく学校制度の進展とともにいかなる時代においても言われ続けてきた問題であろう。この教育問題は、年配層による若い世代に対する苦言とも考えられる。すなわちこれは、教育を古い世代から若い世代への価値の伝承と捉え、学校教育の大衆化とともに、価値の伝承がうまく行われなことから生ずる学生文化の変容に対して年配層が抱く不満感の発露であり、そのひとつが大学生の学力問題となっているのではなかろうか。岡部恒治ら(1999)は、大学生の基礎的な計算能力を検証し、大学生の学力不足について論じている。そこでは、上位校といわれる大学の学生においても小学生レベルの計算で間違える実態が指摘されている。

それでは、日本の大学生の学力は、近年低下してきたのであろうか。この問いに関する明確な解答はない。しかし現実問題として、教育現場で学生に対峙している大学教員の多くは、大学生の基礎学力の低下や学習意欲の低下に悩んでいる。そして、その原因を初等・中等教育とりわけ「ゆとり教育」に求めたり、青年の無気力化といった彼らの意識変化や学生生活の貧困化といった社会状況に起因させたりしている。「ゆとり教育」に関連してみれば、国際学力調査であるPISAにおいて、日本の順位が低迷したいわゆる「PISAショック」が記憶に新しい。しかしながらその後のPISA調査結果が示すように、必ずしも日本の生徒の学力が国際的に見ても必ずしも低下してきたわけではない。⁴⁾

それではなぜ多くの教員が、学生の学力低下を指摘するのであろうか。大学生の基礎学力が低下した原因のひとつとして、大学の大衆化が考えられる。すなわちこれは、より正確に表現するならば、全体的な学力の低下というよりは大学生の学力格差が拡大してきた現象であろう。大学の大衆化とは事実としてみれば、大学進学者増大であり、統計学的には母数である進学者数が増大すれば偏差である進学者間の学力格差はそれに応じて大きくなるのである。つまり進学者の増大が学力格差を招き、特に定員充足に苦慮している大学では学力水準の低い学生も入学させなければならない事情とも重なって、学力問題がより意識される問題となっているのではなからうか。

さらに、授業の中で確認される学力だけではなく、学習に対する意欲や動機付けに関する格差も重要な問題である。山田昌弘(2004)は、その著書で、格差社会の中で「勝ち組」と「負け組」という二極化が進行する中で、彼らの中での意識変化が生じていることを指摘している。すなわち能力による格差が強調され、それを乗り越えることができないと感じた人々は、努力することを無駄だと感じる。その結果やる気は奪われ、将来に希望を持っていない人々が増加していくという。このように、現代社会において能力による格差が絶望的な状況を生み出している点については、橘玲(2016)も類似した指摘をしている。

上述してきたように、日本の大学生は格差社会の中で、希望をなくし、学ぶことに期待を持っていない状況におかれている。その結果、大学の学習にも無気力に取り組み、学力の格差もさらに増大しているのが現実の状況と考えられる。

2. FDの現状

日本の大学において教育活動に焦点がおかれてきたのはごく最近のことである。1980年代に初めて日本に紹介されたFD活動は、その後形を変えて、大学という制度の中に組み込まれてきた。その動きは必ずしも劇的なものではないが、大学教育におけるFDの変遷プロセスをたどることにより、今日の課題が見えてくる。

公的な場において、FDが議論されたのは、1987年に大学セミナーハウスで行われた第24回大学教育懇談会であるといわれている。そこでのテーマは、「大学の魅力開発」であり、「ファカルティ・デベロップメントと大学教育評価の視点」が取り上げられた。その後のFDの変遷は、大学と関連する様々な法規の改正とともに進んでいく。1991年に行われた大学設置基準の大綱化は、大学の教養部・教養課程の解体へとつながり、さらに1999年の大学設置基準の改正により、大学においてFDを実施することが努力目標として明記された。そして、2008年の大学設置基準の改正においては、FDは義務化された。⁵⁾

そこで、FDの現状に関する分析が必要となる。FDに関する取り組みの進展は激しく、また、それに関する調査も大学が独自に行い、その効果を検証しているものも含めれば数多く見られる。ここでは、包括的かつ全体の動向を知るため、文部科学省(2015)の調査を参考に検討していく。

2013年度の大学の教育状況について行われたこの調査では、教育内容・方法の改善状況について大学の取り組みの実態を把握することができる。調査結果は、アクティブ・ラーニングのカリキュラムへの組み込みに関する検討、大学の人材育成の目的とカリキュラムの整合性、ラーニング・コモンズの整備・活用など教育内容の改善が見られると結論づけている。しかしながら今後の課題として次の2点があげられている。

第一に、大学教育の質的転換についてである。大学では、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーそしてアドミッション・ポリシーがほとんどの大学で規定されているが、これらのポリシーと実際の大学教育との整合性については問題が多いのである。すなわち、形式上の教育内容と実際に大学で行われている教育との間にはかなりの差が見られるという指摘であり、大学教員であるならば誰でも同意できると考えられる。

第二に、教職員の資質の向上についてである。教員の職能開発であるFD講習会への参加率は依然低く、大学における組織能力開発のためのStaff Development（以下、SDと記す）実施率が低いという指摘である。特に前者に関しては、第一の課題と同様に大学教員にとっては頷けると思われる。

このように、FDないしはSDが、大学関係者に紹介されてからかなりの年月がたっているが、大学教育を支える教員や職員の意識改革はまだその途上にあることがうかがわれる。

3. 大学カリキュラムに関するニーズ分析

既に述べたように、大学が社会的存在であり、社会から公的な支援を受けている組織であるならば、大学で教授される授業内容、すなわち大学のカリキュラムの形成に関しては、様々なステークホルダーの意見を集約したものでなければならない。ここでは大学に対するニーズを、国家、社会そして学生・保護者の三者から検証していく。

(1) 国からのニーズ

日本の大学は、私立大学といえども、国からある程度の財政的支援を受けている組織である。戦後の新しい学校制度の下における大学の在り方を劇的に変化させたもの、すなわち今日の大学教育の指針を法制から改革する契機になったものは、1991年の大学設置基準の大綱化であるが、それ以後国家レベルで様々な大学改革への指針が提起され、それに対して反論を含む様々な議論が生じていることは周知のとおりである。ここでは、大学カリキュラムと関連性の強い幾つかの提言について検討していく。

この一例として、G型大学、L型大学があげられる。これは、2014年に開催された文部科学省有識者会議で、経営コンサルタントの富山和彦が今後の大学教育の在り方を提言したものである。すなわち、日本の大学を、一部のトップ大学・学部のG型とその他の大多数の大学・学部からなるL型に二分するものである。G型とは、globalの頭文字をとったものであり、「グローバルで通用する極めて高度なプロフェッショナル人材の輩出」を目指すものである。他方、L型とは、Localに由来し、国内の地域経済に向けた「生産性向上に資するスキル保持者の輩出」をその目的とするものである。⁶⁾ この提案に対して、多くの論者からの批判が生じた。例えば、大前研一（2015）は大学の職業訓練としての機能は認めながらも、入学時点での学力や能力によりG型とL型に分類する危険性を批判し、学ぶことへの熱意の違いが重要であることを指摘している。さらに、G型とL型の分類手法自体が、古い経営観や産業構造を踏襲したものである点を批判している。

G型とL型という二分法ではないが、700校以上存在する日本の国公立大学を、それらが担う社会的使命の違いにより分類し、個性的で多様な個々の大学の発展を促そうとする動きは、別の

提言でも見受けられる。例えば、教育再生実行会議が2013年に発表した「これからの大学教育のあり方について」の提言があげられる。この提言は、1) グローバル化に対応した教育環境づくりを進める、2) 社会を牽引するイノベーション創出のための教育・研究環境づくりを進める、3) 学生を鍛え上げ社会に送り出す教育機能を強化する、4) 大学等における社会人の学び直し機能を強化する、5) 大学のガバナンス改革、財政基盤の確立により経営基盤を強化する、の5項目から構成されている。この提言の冒頭では、大学を「世界水準の教育研究の展開拠点」、「全国的な教育研究拠点」、「地域活性化の中核的拠点」など、それぞれの大学が持つ強みをいかしつつ、大学の多様性や地域の特性を踏まえた取り組みの必要性が説かれている。

上述の事例からも明らかなように、今日の日本の大学は、その社会的使命を明確化するためにも自らの立ち位置を明確に規定し、それに伴った大学カリキュラムを創出する役割が求められているのである。

(2) 社会からのニーズ

過去10年ほどの間に、「～力」と題する図書が数多く出版されている。具体的に「～力」というキーワードを軸として近年出版された図書を検索してみると、『聞く力』（阿川佐和子、2012）、『悩む力』（姜尚中、2008）、『断る力』（勝間勝代、2009）、『質問力』（斎藤孝、2006）、『教育力』（斎藤孝、2007）、『伝える力』（池上彰、2007）そして『決断力』（羽生善治、2005）のような著作が該当する。

この中で阿川の「聞く力」とは、900回を超える週刊誌の対談連載からインタビューの手法を体得したものである。インタビューとは「会話」であり、日常生活で誰しもが実践している活動である。そして誰しもが、自分自身の話を聞いてもらいたいという欲求を持っており、それを引き出すために様々な方法があることを述べている。また、姜尚中の「悩む力」は、彼の母、マックス・ウエーバーそして夏目漱石を参考にして、閉塞的な現代社会に生きる人々が、「人間的な悩み」を「人間的に」悩むことにこそ、生きている証しであることを説いている。さらに、勝間勝代の「断る力」では、著者のビジネス体験の中から体得したものであり、この力は、単に相手からの依頼を断るだけではなく、相手から暗黙に求められている行動も含めて関係を遮断できる力を意味している。そしてこの力を身につけることにより、会社組織における部品、勝間の言葉を借りれば、コモディティ（汎用品）から脱皮できるという。

阿川をはじめとしてこれらの著作の内容には、次のような特徴が見られる。

第一に、彼らが指摘する能力とは、彼らの実践的な日常活動から、これら「～力」の必要性が論じられ、かつ実体験を通して自ら習得されたものである。それは、学校で学習される体系化された知識とは違うことを示している。もちろん、斎藤孝の「質問力」のように、大学の授業の中で学ばせようという試みはあるが、多くの学校教育の場面では、このような抽象的な力を育成しようとする努力は行われていない。

第二に、実社会で学ばれるこれらの能力は、それらの本の売行きから見ても社会的な関心を集めているものである。ここに、今日の日本において、様々な「～力」に関する一般市民のニーズの高さがうかがわれる。すなわち日本社会、日本の国民は、社会の中で実際に必要とされる様々な能力に対する関心が強く、また、そのような能力を身につけようとする欲求が見られるのである。このように考えていくと、これらの能力は、社会的ニーズの一端と考えられよう。また、大学が広く社会人に対しても門戸を開き、社会貢献を目指すのであれば、このようなニーズを満たす努力は必要であろう。

(3) 学生・保護者からのニーズ

マーケティングの視点に立脚して大学教育を知的サービスの提供と想定するならば、その顧客である学生の学習ニーズを充足することを第一に考えなければならない。同時に、日本の大学のように教育サービスへの対価を実質的に支払っているのが、受益者本人である学生ないしは保護者である場合、学生のみならず保護者のニーズも考慮する必要がある。それでは、大学教育を実際に受ける学生やそのステークホルダーでもある保護者は、大学教育に対して具体的にどのような学習ニーズを持っているのであろうか。この問題に関しては、残念ながら有効な資料は見つからない。大学に期待すること、例えば卒業後の就職・進学状況に関する関心や学生が大学生生活を安心・安全に過ごすことへの関心はあっても、具体的にどのようなカリキュラムをどのような方法で学び、その結果どのような学びが期待されるのかといった具体的な学習ニーズを確認した研究も見つからなかった。この学生のニーズが明白でない点にこそ、大学カリキュラムを考察する上で大きな課題が存在しているものと推測される。

Ⅲ. 大学カリキュラム改革に影響を与える動き

これまで論じてきたように、現在の大学教育は、必ずしも意図した通りに機能しているとは言えない状況にある。様々なニーズは確認されるが、それに対処するような動きは見られない。そこには、今までの高等教育における教育内容並びに方法では対応できない質的な変換が生じているのである。本章では、この質的な変換に大きな影響を与えている、ICTの発展と学士課程の改革状況についてみていく。

1. ICTの発展と大学教育

日常生活と同様に、教育現場においても、ICTの導入は、これまでの教育の在り方、とりわけ教育の方法を劇的に変化させる可能性を秘めている。ICTの利用は、ひとつの授業の中での教員と学生のコミュニケーションツールとしても、また、ネットワーク上において、実際の教育活動すなわち授業を展開するものとしても活用されている。ICTが学校教育活動に与える影響のひとつとしては、時間や場所と行った物理的な条件による教育活動の制約から解放されることであろう。

高等教育においてInformation Technology（以下、ITと記す）革命が盛んに論じられたのは、今日的なものではない。アメリカの高等教育におけるe-learningの事情に詳しい吉田文（2003）によれば、ITを利用して教育配信を行うバーチャル・ユニバーシティの起源は、1989年に開始された営利大学の代表格であるフェニックス大学であるという。その後2000年を挟んで、金融の世界でもITバブルが生じた。同時に、営利大学のみならず既存の非営利大学も、オンラインを使った遠隔教育に乗り出した。しかしながらその結果は、Fisher（2006）が指摘しているように期待する結果には至らなかった。その後、今日までにネットワークシステムは飛躍的に発達してきた。高等教育機関の教育活動においてICTの利用は、不可欠のものとなっている。それでは、ICTは、大学教育において、どの程度利用されているのであろうか。

京都大学が文部科学省の委託を受け、2013年から2014年にかけて行われた『高等教育機関等におけるICTの利活用に関する調査研究』は、日本全国の大学、短大、高等専門学校等を対象とし、大学教育におけるICTの利活用状況を把握した調査である。この報告書で指摘されている、大学教育におけるICTの具体的な実態は次のようなものである。

大学組織としては、e-learning又はICT活用教育について全学的な組織は半数程度の大学で設置

されている。また教育活動の導入推進計画は、半数以下の大学でしか立案されていない。その効果測定に関しても、半数以上の大学では行っていない。すなわち、半数以上の大学では組織上でのe-learningやICT活用教育を活用するまでには至っておらず、かつ効果測定から改善を進めていくような仕組みもないのである。

次に、高等教育機関において実施されているe-learningやICT活用教育の内容として、シラバスのWeb公開に関しては、8割の機関で行われている。授業の中では、「パワーポイント」、「Web上の教材・コンテンツ」、「ストーリーミングビデオ・Flash動画」の利用率は高い。反面、「学生間のコミュニケーション」や「授業中の投票」などといったアクティブ・ラーニングを授業の中で活用できるような利用方法は低い。さらに、教材・コンテンツは教員が独力で作成され、それを支援するような体制には至っていないことが明らかになった。これらの結果から、日本の大学教育におけるICTの活用は、いまだ黎明期にあると結論づけられよう。

近年、各国の大学は、自校の講義をWebにおいて無料で公開してきた。現在のそれは、Selingo (2013)も指摘しているように、エリートのために用意された無料のプログラムであろう。またその目的は、世界中からの人材発掘のためでもあり、大学のPRのためでもあり、国際的な大学間競争の一端であるのかもしれない。しかしながら、大学教育においてICTがより普及してくれば、近い将来、知識の普及を目指した汎用的な講義、例えば授業内容をパワーポイントに移したのものやWeb上での教材配布といった仕組みは、誰もが利用可能なものとなってくと予測される。そしてこれら汎用的な内容から構成される知識普及の教育は、情報通信社会における通信費と同様に、結果として無料化されていくのであろう。さらに、そのような講座で履修された科目の単位が認定されるようになれば、大学教育そのものの存在も危機的なものとなるのであろう。

2. 学士課程改革の方向性

ICTの普及とともに、国による学士課程改革の方針も今後の大学カリキュラム改革に大きな影響を及ぼすものである。

グローバル化並びにユニバーサル段階における大学教育（学士課程教育）は、それ以前の大学教育とは違った存在となる。まずここでは、1991年の大学設置基準の改定並びに2006年の教育基本法改正以降の大学教育改革に関する国の基本指針を参照する。

2008年に、中央教育審議会から「学士課程教育の構築に向けて」という提言が行われた。本提言の内容は、1991年の大学設置基準大綱化以降、大学大衆化の進行とともに、大学がどのような状況にあるのかを総括するものでもあった。同提言では、大綱化により硬直したカリキュラムが改善されるとともに、1) 教育課程全体における専門教育の比重の増加、2) 共通教育、基礎教育における外国語能力、情報活用能力等のスキル訓練の増加、3) 初年次教育、補習教育、就職支援、インターンシップなどの導入、4) 学際的教育活動の前提となる基礎教育の不足、5) 人文・社会学系の専門分野での国際化進行、が生じたことが指摘されている。

この状況の下で、大学が取り組むべき改革の方針としては、1) 教育課程の体系化・構造化、2) 学生の「幅広い学び」の保証、3) コミュニケーション能力の育成と専門教育との関連づけ、4) キャリア教育の教育課程への位置づけ、5) 豊かな人間性や課題探求能力の育成への配慮、6) 共通科目や基礎教育の重要性についての共通理解、7) 地域の実情に応じた、大学間連携の強化と教育内容の豊富化、があげられている。

さらに、教育方法についても学習意欲の向上を目指した教育の双方向化・システム化の必要性が指摘されている。大学に要求される取り組みとしては、双方向型の学習を展開するため、講義

への魅力を高めるとともに、体験活動を含む多様な教育方法を積極的に取り入れることが要求されている。その具体的内容は以下のようなものである。

「学生の主体的・能動的な学びを引き出す教授法（アクティブ・ラーニング）を重視し、例えば、学生参加型授業、強調・協同学習、課題解決・探求学習、PBL（Problem/Project Based Learning）などを取り入れる。大学の実情に応じ、社会奉仕体験活動、サービス・ラーニング、フィールドワーク、インターンシップ、海外体験学習や短期留学等の体験活動を効果的に実施する。学外の体験活動についても、教育の質を確保するように、大学の責任の下で実施する。」

これらの動きは、大学教育の社会的意義という視点からはどのように捉えられるのであろうか。本田由紀（2015）は、1980年代以降の新自由主義政策との関連で、カリキュラムの社会的意義が求められてきた過程を指摘している。すなわち、新自由主義の推進により、失業・貧困・格差といった社会問題が生じた。これらの問題への対処として、教育の役割が重視された。教育に対しては、一方ではエンプロイアビリティ（就労能力）を高めることにより労働市場への参入を促し生産性を向上させるという役割が要請された。他方、主体的に社会・政治活動へ参加するシティズンシップ（市民性）の育成という役割も要請された。同時にグローバル化の進展を背景として、先進諸国においても公的支援を受ける教育機関が生み出すアウトカムについてのアカウントビリティの要求が強くなってきた。このような過程の中で、教育のカリキュラムに対する政府からの統制が強化され、ナショナル・カリキュラム若しくはナショナル・テストを導入することによりカリキュラムを通じてアカウントビリティを「社会的意義」と同等のものと想定して、確保しようという動きが顕在化した、という。

具体的な「社会的意義」としては、エンプロイアビリティやシティズンシップに加えて、OECDやEUが定式化して進めている、ジェネリックスキルとしてのコンピテンシーがあげられている。それは、より具体的には、1) 言語や科学技術などの道具を相互作用的に用いる、2) 異質性の高い集団で、相互に関わり合い、影響を与え合う、3) 自立的に活動する、という3つのカテゴリーから構成される。これらのコンピテンシーは、個別の構成要素に還元することはできず、複雑な行為のシステムであり、それを修得することにより社会や労働市場の変動に対処するために必要である。結果として、これまでのような個別の体系化された知識教授のカリキュラムでは対応できないのである。さらに、ここで問題が生じる。すなわち、個別の要素に還元されないコンピテンシーを形成するためには、教育内容の体系的配列としてのカリキュラムは役に立たない。コンピテンシーを形成するために必要な条件としては、アクティブ・ラーニングに代表される教育方法である。結果として教育内容は重要ではないという結論に結びついてしまうのである。本田は、これらの問題を解決するためには、より抽象度の高い「社会的意義」とは異なった原理が定立されることが必要であることを指摘している。

結論としては、それらが定立されていない現状では、教育内容と教育方法を分離不可分なものとして捉え、現在必要とされている様々な能力を、大学教育に中でどのように育成すべきかについて考えていかなければならないと言えよう。

IV. 結 論

これまでの本論における考察において、次のようなことが明らかになった。

今日の大学は教育機関としては危機的状况にあり、大きな改革を必要としている時期にある。大学生の学力格差は増大し、それに対処すべきFDの改革は特に質的な側面において進んでいな

い。また、国家や社会が高等教育に要求するニーズは高まる状況にある。さらに大学教育の質的改革には、技術としてのICTにおける革新と哲学としての学士課程における改革の指針が必要となっている。

1. 大学カリキュラムの将来展望について

大学カリキュラムが、今後どのようなものになっていくかについて、本結論では、次の4点にその特徴をまとめた。

第一には、多様なニーズを考慮した、個性的で多彩なカリキュラムである。

大学におけるカリキュラムは、汎用的なものではなく学生の特性並びに個々の大学から生じるニーズに応じた個性的なカリキュラムとなろう。ユニバーサル化した日本の大学における多くの学生にとって、彼らのニーズを満たすような教育内容でなければならない。それは、日本の場合、ユニバーサル化の進行とともに大学教育にかかる費用の負担比率が、受益者である学生や保護者に多くなっているからである。しかしながら既に指摘したように、学生やその保護者の具体的な教育内容に関するニーズは明確に確認されていない。彼らの要求は多様で捉えにくいものである。例えば、教育の結果としての就職や学生生活に関する満足感を求めているのであれば、それを捉えそのニーズを充足することを第一に考えなければならない。大学卒業後の就業に関しては、キャリア教育に象徴されるような社会的ニーズや、将来彼らが就業を続けていくための基礎となるような教育内容の整備が必要とされよう。その基礎となる内容も、学習者のそれまでの学びによって変わってくる。この学習歴は、学習者によって大きな格差があり、結果として極めて個性的なカリキュラムが必要となってくるのである。

他方、国レベルのニーズについては、大学教育は自然にそのニーズを充足する方向にあると思われる。なぜなら国は施策を進めるに当たって、各種の補助金の支出や固定費の削減などを行ってきた。今日の国家による将来の方向性と大学が考える将来の方向性を巡る対立も、その一端であるように思われる。結果として、多くの大学の学生と学生が卒業後に生活する社会とのニーズに合わせた、多彩なカリキュラムを創出することが必要となろう。こういった考えは、教育マーケティングの志向と合致するものである。すなわち、非営利組織のマーケティング創始者であるKotler (1985) が指摘しているように、ソーシャル・マーケティングでは1) 消費者のニーズ、2) 消費者の欲求、3) 消費者の長期的利益、4) 社会の利益を考慮に入れる必要がある。

第二には、大学という場において、改めてその教育的価値を反映したカリキュラムである。

この問題はWeb上だけで行われるe-learningとは対峙関係にあり、学校教育という形態そのものに伝統的教育価値が存在するのである。教育的価値とは、単なる知識の伝達だけではない。学習者は、場所と時間を他の学習者と共有しあい、互いにコミュニケーションすることにより、学びを進めていくものである。その結果、単なる知識や技能の獲得だけではなく、交友の原理と称されるような生涯にわたる友人を獲得することも、学校の重要な機能である。今日の初年次教育において、仲間作りや居場所作りが重要な意味を持つのも、まさにこの場としての教育的価値を認識したものであろう。もう一度、本来の学校という組織が持っている様々な教育的機能を見直し、それを活用したカリキュラムの構成が求められる。

第三には、現在の大学が持つ強みのひとつである、大学が持つ様々な施設を利用するものや大学が介在するインターンシップといったカリキュラムである。

実験室や実習室で行う実習、グラウンド・体育館といった施設を利用した実技、学生間の対面コミュニケーションを活用したゼミ室での演習などは、通信制の大学においては実施できない。ま

た、これら大学施設を使った教育は、少数の履修者を対象としてスモールクラスでしか行うことができない。大学は、これらの授業にこそ大学資源を注ぐ必要があるのではなからうか。さらに大学図書館を使ったラーニング・コモンズは、学生のアクティブ・ラーニングの助けになるものであり、図書館の機能を現代社会において再生させた試みとして大変興味深いものである。

大学が学生と外部組織の間に介在した形で行われるインターンシップやサービス・ラーニングといった教育活動もまた、通学制の大学ならではの強みであろう。残念ながら現在、日本で行われている大学生のインターンシップは、とりわけ文系学部では専門性をあまり問われることの少ない、短期の就業体験であり、また企業にとっては就職協定の面接解禁以前における選考過程のひとつの機会になっているように思われる。しかし、この仕組みを実践的な教育体験の授業として整備し、学生、企業双方が利益を得るような形での教育プログラムをつくるのが、今後の大学の役割であると思われる。諸外国では既に、このような実践的な研修課程としてのインターンシップ実際に行われている。

第四には、ICTを利活用した新しい教育内容・方法によるカリキュラムである。

従来の一方向的な教授型の授業は、ネットワーク等の通信手段を用いた通信制の大学の方が、そのコストや教授内容から見ても圧倒的に優位なものである。さらに近年、このような授業は、edX⁷⁾やCOURSERA⁸⁾といった事例に見られるように、世界の中心的な大学が主導する無料の授業配信が行われている。近い将来、このような定式化された知識教授型の授業は、ネットワーク上の授業に統合されていくであろう。最先端を進んでいく大学は、このようなネットワーク授業の開拓を進めていくものと予測される。

それでは、それ以外の多くの大学はどのように対処すればよいのであろうか。そこで、現在模索されている動きのひとつが、ICTを積極的に活用した大学での授業展開であろう。大学施設内における対面型教授活動とICTを組み合わせた形の授業展開であろう。授業内容と自習内容を逆にした反転授業はその一形態と思われるが、バーチャルなネットワークを用いた遠隔授業の利点とリアルな対面コミュニケーションの教授活動を併せ持ったデュアルな授業展開は、通学制の大学でしかできない強みである。このような授業の中におけるICTの活用は、まだ始まったばかりであり、残念ながら、実際にどのような手法が可能であるのか、また、どのような処方が効果的であるのかについての研究は、未開発の領域である。この領域に関する研究は、通学制の大学関係者に今求められているのである。

2. 大学教員は何をなすべきか

ここまでの論考により、新しい学力観に立脚し、学生のニーズにあった形で展開される、実践的経験を活用したカリキュラム創設が必要であることが明らかになった。ここでは、最後にそのようにカリキュラムを大学の教育活動において実践していくためには、何が必要であるのかを考えてみたい。この考察は、とりわけ実際に大学の教授活動に関わっている大学教員を中心に考えていく。

第一に、大学教員にとって研究と教育のすみ分け、意識の分離が必要となってくる。

確かに、大学教員は研究者として最新の研究成果を上げ、その内容を大学の教授活動に活用する必要がある。しかしながら上述で示した通り、大衆化した高等教育では研究の内容は必ずしも学生の学習ニーズや彼らが社会から必要とされる学習内容と合致しているわけではない。また、研究者として蓄積してきた知識体系は、いずれWeb上の教育によって代替えられる可能性がある。

また上述したFD調査やICT調査でも明らかのように、多くの大学教員は、近年の大学改革の速

度に追いついていけず、教育の教育活動や教育改革が必要であると意識改革も停滞したままである。今、必要なのは、原点に立ち返って自らのこれまでの教育歴（自身が教育を受ける側として経験してきた教授内容や教授方法）を反省することであると思われる。研究を中心としてその一部を教育するような大学教育の時代は、過ぎ去ったのである。大衆化された大学教育の中で、教育において何ができるのか、それがどのようなニーズに合致しているのかを問いただすとともに、新たな教育内容と教授方法を開発することが求められているのである。

第二には、教員が、原点に戻って教授内容や方法を学ぶ必要がある。

教員の授業開発を助けるような学内の仕組みは、多くの大学で残念ながら整備されていない。とりわけ高等教育機関では教授内容や方法に関して、他の教員からのアドバイスを受ける機会がほとんどない状態にある。今後新しい教授内容や教授方法を展開するにあたっては、教員間の共同作業や共同開発も当然のことながら必要となる。とりわけ、専門を離れた第三者的な視点からの教授内容・方法の評価と教材作成に関するプログラムの開発は不可欠な事項である。⁹⁾

最後に、学生の成長に関してどこまで関係性を持てるかについて反省する必要があるだろう。和田秀樹（2016）や山田昌弘（2013）らは、日本社会が「自己責任」という言葉によって、若者を育成すべき大人が、そして日本社会全体が若者の将来に関して責任放棄をしていることを指摘している。反面、大学教育においても学生と真正面から対峙し、学生教育に対して真剣に取り組むことで、就職や若者の意識に変化を生じさせた事例も紹介されている。これらのことから大学教員に最も求められていることとは、大学教育において学生の意識を活性化できるような教育的な姿勢ではないかと思われる。大学教員は、研究者としての側面を持つことから、これまでどちらかと言えば教育を副次的なものと考えてきた。それが、今日の大学教育崩壊状況の一因であることは残念ながら事実であろう。このことは、我々自身が大学教育において経験してきたことから明らかである。今こそ、大学教育の責任を、我々教員自身が最重要課題として捉え直さなければならぬのである。

付 記

本稿は、平成27年度東京国際大学教員海外研修員制度（研究課題「高等教育におけるグローバル・リーダーシップ開発に関する研究」）による助成を受けたものである。

注

- 1) Blumenstykは、アメリカ高等教育の危機を、1) 学生に関わる問題、2) 大学の経費、支出そして負債に関わる問題、3) 大学改革を実施するリーダーシップに関わる問題、4) 将来像の4点から考察している。
- 2) 大学のモデルとしては、アメリカ型のモデルとヨーロッパ型のモデルが想定できる。アメリカ型モデルとは、大学の経費負担を受益者である学生に求めるものであり、その結果としての個人間の所得格差を肯定するものであろう。反面、ヨーロッパ型のモデルとは、大学の存在を社会的なものと考え、その経費負担はできる限り公的に行おうとするものである。その結果、大学への進学機会は保証される反面、国民は公的負担の増大による税金の増加に悩まされる。
- 3) 本論では、ITとICTという言葉を使用している。前者はinformation technologyの略語であり「情報技術」と訳され、主にハードウェアにおける技術を意味する。後者は、information communication technologyの略語であり「情報通信技術」と訳され、ソフトウェアの利用によるコミュニケーションの活性化や日常生活や学習活動への利用などを意味している。
- 4) PISA調査の結果では、2006年調査において読解リテラシー15位、数学リテラシー10位、科学リテラシー6位であった国際順位が、2012調査では読解リテラシー3位、数学リテラシー7位、科学リテラシー4位まで復活してきた。

- 5) 大学設置基準第二十五条の三で、「大学は、当該大学の授業の内容および方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする。」と明記されている。
- 6) 具体例としてよく取り上げられたものは、英文学部ではシェークスピアではなく英会話を、経済・経営学部でマイケルポーターや戦略論ではなく簿記・会計ソフトの使い方を、であろう。
- 7) edXとは、マサチューセッツ工科大学とハーバード大学が出資し設立した非営利組織による、オンラインを使った高等教育配布システムである。日本からは京都大学が同システムに参加している。詳細については、<https://www.edx.org/>を参照。
- 8) COURSEERAとは、スタンフォード大学の教授たちによって開発された、営利組織であり、参加大学の幾つかのコースが無償で公開されている。日本からは、東京大学がコースを提供している。詳細については、<https://www.coursera.org/>を参照。
- 9) 諸外国では、大学教員の教育能力開発プログラムを作成し、広く世界から受講生を集めて教授する試みも展開されている。いわば、大学の教育内容・方法のグローバルスタンダードを獲得しようとする試みである。筆者が経験した、University of British ColumbiaのInternational Faculty SoTL Leadership Programもその一例である。同プログラムは、1999年以來、国際的かつ学際的な教授団に対して、教授資格を授与している。

参考文献

- 阿川佐和子 (2012), 『聞く力』, 文春新書.
- Alan Michael Collinge (2009) "The Student Loan Scam" Beacon Press.
- Goldie Blumenstyk (2015) "American Higher Education in Crisis?" Oxford University Press.
- 羽生善治 (2005), 『決断力』, 角川書店.
- 平山一城 (2013), 『大学の淘汰が始まった』, 宝島社新書.
- 広田照幸・石川健治・橋本伸也・山口二郎 (2016), 『学問の自由と大学危機』, 岩波書店.
- 本田由紀 (2015), 「カリキュラムの社会的意義」, 『カリキュラム・イノベーション』, 東京大学出版会.
- 堀口英則 (2013), 『偏差値37なのに就職率9割の大学』, メディアファクトリー新書.
- 池上 彰 (2007), 『伝える力』, PHPビジネス新書.
- 姜 尚中 (2008), 『悩む力』, 集英社新書.
- 加藤信也・小山憲司 (2012), 『ラーニング・コモンズ』, 勁草書房.
- 勝間和代 (2009), 『断る力』, 文春新書.
- 国立教育政策研究所 (2010), 『生きるための知識と技能4 OECD生徒の学力到達度調査 (PISA) 2009年調査 国際結果報告書』, 明石書店.
- 国立教育政策研究所 (2013), 『生きるための知識と技能5 OECD生徒の学力到達度調査 (PISA) 2012年調査 国際結果報告書』, 明石書店.
- 教育再生実行会議 (2013), 『これからの大学教育等の在り方について (第三次提言)』, http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikuseisei/pdf/dai3_1.pdf
- 京都大学 (2014), 『高等教育機関等におけるICTの利活用に関する調査研究』, 京都大学.
- 三宅義和・居神 浩・遠藤竜馬・松本恵美・近藤 剛・畑 秀和 (2014), 『大学教育の変貌を考える』, ミネルヴァ書房.
- 溝上慎一 (2014), 『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』, 東信堂.
- 文部科学省 (2015), 『大学における教育内容等の改革状況について (平成25年度)』, http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1361916.htm
- 文部科学省 (2008), 『学士課程教育の構築に向けて (審議のまとめ)』, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/080410.htm
- 室井 尚 (2015), 『文系学部解体』, 角川新書.
- 日本科学者会議大学問題委員会 (2013), 『危機に直面している日本の大学』, 合同出版.
- 日本キャリア教育学会 (2008), 『キャリア教育概説』, 東洋館出版社.
- 岡部恒治・西村和雄・戸瀬信之 (1999), 『分数ができない大学生——21世紀の日本が危ない』, 東洋経済新

- 開社.
- 大前研一 (2015), 『文科省提言「G大学・L大学」は、若者をつぶす』, PRESIDENT Online, blogos.com/article/109036/
- Philip Kotler, Karen F.A. Fox (1985), “Strategic Marketing for Educational Institution” Prentice-Hall, 水口健次
監訳 (1989), 『学校のマーケティング戦略』, 蒼林社.
- 斎藤 孝 (2006), 『質問力』, ちくま文庫.
- 斎藤 孝 (2007), 『教育力』, 岩波新書.
- 佐藤浩章・中井俊樹・小島佐恵子・城間祥子・杉谷祐美子 (2016), 『大学のFD Q&A』, 玉川大学出版会.
- Saul Fisher (2006), “The Market for Higher Education at a Distance”, 田部井潤監訳 (2011), 「遠隔高等教育市場——伝統的教育機関と教育技術の費用」, 『ビジネスとしての高等教育』, 人間の科学出版社.
- Jeffrey J. Selingo (2013), “College (UN) Bound”, amazon publishing.
- 橋 玲 (2016), 『言ってはいけない残酷すぎる真実』, 新潮新書.
- 高木展郎 (2016), 『「これからの時代に求められる資質・能力の育成」とは』, 東洋館出版社.
- 田中耕治・水原克敏・三石初雄・西岡加名恵 (2005), 『新しい時代の教育課程』, 有斐閣アルマ.
- 東北大学高等教育開発推進センター (2009), 『ファカルティ・ディベロップメントを超えて』, 東北大学出版会.
- 東北大学高等教育開発推進センター (2013), 『大学教員の能力』, 東北大学出版会.
- 富山和彦 (2014), 「我が国の産業構造と労働市場のパラダイムシフトから見る高等教育機関の今後の方向性」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/061/gijiroku/_icsFiles/afieldfile/2014/10/23/1352719_4.pdf#search=%27%E6%88%91%E3%81%8C%E5%9B%BD%E3%81%AE%E7%94%A3%E6%A5%AD%E6%A7%8B%E9%80%A0%E3%81%A8%E5%8A%B4%E5%83%8D%E5%B8%82%E5%A0%B4%E3%81%AE%27
- 和田秀樹 (2016), 『この国の冷たさの正体——一億総「自己責任」時代を生き抜く』, 朝日新聞出版.
- 山田昌弘 (2004), 『希望格差社会』, 筑摩書房.
- 山田昌弘 (2013), 『なぜ日本は若者に冷酷なのか』, 東洋経済新報社.
- 山田礼子 (2012), 『学びの質保証戦略』, 玉川大学出版部.
- 吉田 文 (2003), 『アメリカ高等教育におけるeラーニング』, 東京電機大学出版会.
- 吉見俊哉 (2016), 『「文系学部廃止」の衝撃』, 集英社新書.

アイデンティティ概念の理論的背景と問題点について ——精神分析的観点による再検討のために——

大 矢 泰 士

Theoretical Background of the Concept of Identity and its Problems: An Attempt for Re-examination from Psychoanalytic Viewpoints

OYA, Yasushi

Abstract

E. H. Erikson's concept of identity is nowadays seldom referred to in psychoanalytic literature and seems to be left without stable position within psychoanalytic theory (Wallerstein 1998). The author attempted to re-examine the problems and possibilities of this concept, focusing on its relationship to the stream of phenomenological ego-psychology from Victor Tausk to Paul Federn. As a result, the author pointed out this concept's problem concerning "the relationship between ego as a function and ego as an object of consciousness", and the confusion accompanying "the overlap of multiple levels of psychological development or personality organization". The implications of phenomenological stance of Erikson and its relationship to mainstream psychoanalytic theory were also discussed.

Key words: E. H. Erikson, personal identity, ego identity, Victor Tausk, Paul Federn, phenomenological, ego-feeling, sense of self, levels of personality organization, personality disorders

キーワード：E・H・エリクソン，パーソナル・アイデンティティ，自我アイデンティティ，ヴィクトール・タウスク，パウル・フェダーン，現象学的，自我-感情，自己感，パーソナリティ組織化の水準，パーソナリティ障害

目 次

- はじめに
1. ヴィクトール・タウスクの貢献
 - 1.1 タウスクのアイデンティティ概念
 - 1.2 タウスクの背景から
 2. パウル・フェダーンの影響
 - 2.1 フェダーンについて
 - 2.2 フェダーンの自我概念
 - 2.3 フェダーンとフロイト
 - 2.4 フェダーンとエリクソン
 3. E. H. エリクソンのアイデンティティ概念について
 - 3.1 エリクソンの歴史
 - 3.2 エリクソンの臨床アプローチの特徴
 - 3.3 エリクソンのアイデンティティ概念の検討
 - 3.3.1 機能としての自我と意識の対象としての自我の関係
 - 3.3.2 発達の水準の折り重なり
- おわりに

はじめに

心理学および精神分析の用語としての「アイデンティティ」は、児童と成人の精神分析家であったE.H.エリクソンが、精神分析の考え方を個人と社会との関係を含めた観点へと拡張しようとする彼の心理-社会的観点を発展させるなかで大きく取り上げた概念である。エリクソンの発想が学際的志向性に親和的であったこともあり、この概念は精神分析や心理学の枠組みを超えて、多種多様な研究を今でも生み出している。

ただ、今日においてこの概念は、たとえば「民族」やジェンダー等の「集団アイデンティティ」にかかわる研究を数多く生み続けているのに対して、精神分析の分野においては、Kernberg (2006)らがアイデンティティ拡散を境界水準のパーソナリティ障害の基本的特徴の一つに位置づけているのを除けば、テーマとして取り上げられることが稀となっており (Wallerstein 1998)、アイデンティティとは何かという基本的な点が十分に合意されないまま置き去りにされているようにも見える。

エリクソン自身もたびたびこの概念の曖昧さを認めている。この曖昧さはこの概念の本質的な特徴を反映している可能性もあり、単純に定義が明確になればそれで良いという問題ではないように思われるが、この概念が青年期から成人期にかけての発達の研究や臨床心理的援助において現在でもキーワードの一つであり続けていることを考慮すれば、この概念の基本的な意味合いについて、その問題点と可能性を含めて再検討する必要性は高いように思われる。とくに、エリクソンのアイデンティティ論の精神分析理論における位置付けは、実際には不明確なまま放置された状態になっているという指摘もあり (Wallerstein 1998)、こういった精神分析的観点からの根本的な再検討が欠かせないと考えられる。

本稿では、このやや巨大とも言えるテーマの研究への一寄与として、精神分析的な思考の中でこのアイデンティティの概念がどのように生まれてきたのか、その淵源に焦点を当て、その角度

からこのアイデンティティ概念の特徴を浮き彫りにし、精神分析的な理論と臨床的思考におけるその利用可能性にまつわる問題点を中心として再検討することを試みたい。一般に、アイデンティティ概念はエリクソン個人がもつ社会的・民族的背景から生まれたとやや大雑把に理解されており、それは一面においては妥当と考えられるが、それだけでなく彼が精神分析の理論的思考を形成するなかで受けた影響関係もまた彼の理論の特異性に影を落としており、本稿ではこの点も含めて考察することで、精神分析理論の中での彼のアイデンティティ論の位置付けを明らかにするための一助ともしたい。

1. ヴィクトール・タウスクの貢献

精神分析の世界でアイデンティティという言葉初めて術語として使用したのは、ヴィクトール・タウスクの論文「統合失調症における『影響機械』の起源」(Tausk 1933 [1919])であるとされている (Jacobson 1964, 邦訳p. x)。エリクソンが精神分析のサークルに関与しはじめたのはタウスクの死後であり、タウスクをめぐる当時の精神分析界の状況から見ても直接の影響関係は想定しにくい。エリクソンは彼が学んだウィーン精神分析研究所のセミナーで、講師であったパウル・フェダーンが自我アイデンティティまたはそれと非常に近い表現を用いていた憶えがあると語っている (Friedman 1999, p. 79)。このフェダーンは生前のタウスクと近い関係にあって、タウスクの提唱した自我境界の概念を発展させた精神分析家であり、後述のようにアイデンティティ概念に類似する発想を展開していた。以下では、歴史的順序に沿って、まずタウスクと彼のアイデンティティ概念について見ていきたい。

1.1 タウスクのアイデンティティ概念

タウスクとフェダーンはともに、最初期に精神分析運動に参加した人々のなかでは数少ない医師であり、フロイト自身が臨床的にはあまり試みなかった精神病への精神分析的アプローチを考究したことで知られている。タウスクは上記の論文において、統合失調症の「影響機械」の妄想について、投影の概念を用いて説明し、この症状を発達早期の段階への退行と捉えた。そして彼は、早期発達に二つの段階を想定し、そのひとつは自己と対象の区別を知らない自己充足的なアイデンティティの段階、もうひとつは外界への自己の身体の投影から始まり自己認識をもつアイデンティティの段階であるとしている。そして彼は、後者の段階に至っても前者がなくなるわけではなく、本来的なナルシズムの源として働くと考えた。付言すれば、この論文で彼は影響機械の妄想を含めて幅広い次元の自己愛的問題を「自我境界の喪失」として捉え、このオリジナルな観点は後述のパウル・フェダーンに受け継がれて、以後の精神分析的自我心理学の精神病論に大きな影響を与えることになる。

アイデンティティの二つの段階に話を戻すと、前者の段階は対象が存在しない段階として記述されており、その意味ではフロイトの一次的ナルシズムや、M. マーラーが提唱してのちに否定した正常自閉段階を思わせる概念であって、今日的な観点からすれば仮想的なものにすぎないように見えるが、全体的な趣旨からすると、むしろウィニコットが想定したような自他未分化な万能的世界を指し示そうとしていたのではないかと推測することもできる。

タウスクがアイデンティティという言葉直接的に用語として用いているのは主にこの部分であり、比較的プリミティブな次元の発達に即して述べられているが、この論文の後半で彼はこの二つの段階に関連して、「人は存在していくための闘争において、彼自身を新たに見出し認識する

よう常に強いられている（英語版p. 544）」ことを理解すべきだとも書いている。この記述からも明らかなように、彼のこの概念は（社会との関わりの側面も含めて）健康な成人も体験するような普遍的なものとして思い懐かれており、ごく萌芽的な記述ではあるが既にエリクソンの概念と通底するものがある。

ある個人の考えとその人の個人史とを安易に結びつけるのは危険でもありうるが、タウスクのアイデンティティ概念は、彼自身の個人史にみられる事柄と大きく重なる側面があると思われるため、ここで彼の背景に簡単に触れておきたい。

1.2 タウスクの背景から

ヴィクトール・タウスクは、初期のフロイトの弟子のなかでは最も才能に溢れた人物と目されていたが、精神的に不安定な要素を抱えていたことも知られている。彼は1879年にスロヴァキアで生まれ、クロアチアで育った。ジグムント・フロイトよりも23歳年下である。タウスクに関する伝記的著作を記したローゼン（Roazen 1969, 1975）によれば、ジャーナリストだったタウスクの父親は魅力的な人だったが、性的に放縦で家庭では暴君的であり、母親は自己犠牲的な人であったという。タウスクは母親に対して優しく、父親に強い反感を抱いていたとされる。タウスクは医学を志していたが経済的理由から断念し、ウィーン大学で法学を学んだ。21歳で結婚してユーゴスラヴィアに戻り、弁護士助手として働く。26歳で正式の弁護士資格を得るが、同時期に結婚生活が破綻し、妻子はウィーンに去り、彼はベルリンに移って劇作家・著作家・ジャーナリストに転身してしまう。しかし経済的な貧窮が続き、心身の疲労により2年後には体調を崩してライン地方の保養所に自発的に約三週間入院した。ベルリンに戻った後、彼はフロイトの著作への感想を著者フロイトに送り、これを読んでタウスクが医師であると思い込んだフロイトから、精神分析を学ぶように勧める返事をもらう。彼は医師になることを決意して1908年にウィーンに移り、新聞社で働きながら医学を学んだ（同年に正式に離婚）。1914年に医学の修行を終えるが、第一次大戦が勃発して精神分析の開業が困難となる中、彼は軍務に服し、軍医として遠方に駐在することになる。多忙な生活であったがこの時期に彼は上記の「影響機械」の妄想に関する労作をはじめとする代表的な論文を発表した。彼は、この論文を含め、フロイトのサークルのなかでは初めて精神病の臨床研究に取り組み、このテーマに関する論文をいくつか発表して、当時の精神分析のサークルで代表的な論客としての評価を得た。大戦後、ウィーンに戻った彼は、フロイトに精神分析を依頼するが、フロイトは断り、代わりにタウスクよりも5歳も年下のヘレーネ・ドイチュの分析を受けるように勧める。タウスクはフロイトの勧めに従ってドイチュの分析を受けたが、その当時ドイチュ自身がフロイトの分析を受けているという入り組んだ状況にあり、彼女はフロイトから受けている分析でタウスクの話ばかりするようになった。これを妨げと感じたフロイトは、ドイチュに対して、自分との分析をやめるか、タウスクの分析をやめるかどちらかにするようにと告げ、ドイチュはタウスクに事情を説明して分析を終わりにした。その約三ヶ月後、タウスクは新たに恋愛関係となった女性との結婚の準備中に自殺を遂げた。

タウスクの卓越した才能は当時の誰もが認めるものだったが、その一方、前述のローゼン（Roazen 1969）によれば、タウスクは医学の勉強を始める直前のベルリン時代の入院中に二週間程度の抑うつ状態にあり、その後も時折再発していたことが彼の手紙などから推測されているほか、妻やその他の女性との関係と同様にフロイトに対しても対人的な距離の喪失の問題を抱えており、過度に深くもたれかかってしまう傾向を示していた。タウスクと一時期恋愛関係にあったルー・アンドレアス・ザロメも、才気煥発な彼があまりにもフロイトに忠実で、フロイトに過度に同一化

していることに驚いており、タウスクが「自分を（フロイトの）息子にすること」と、「そのことゆえに父（フロイト）を憎むこと」という葛藤的な転移的状况に陥っていたと後年になって分析している（Andreas-Salome 1964, pp. 166-167; Roazen 1969）。

ローゼン（Roazen 1969）は、タウスクが精神病や芸術の精神分析的研究など、ちょうどそのときにフロイトが取り組もうとしている問題に取り組んではフロイトよりも先に発表してしまう傾向があったことを指摘し、フロイト自身がタウスクとの関係を居心地悪く感じると告白しているのは主としてこのためであると見ている。それはともかく、フロイトがドイツによるタウスクの分析を事実上中断させてしまった経緯には、今日の精神分析の治療構造や転移-逆転移のエナクトメントといった観点から見れば問題と思われる点があるが、当時はまだこのような視点が十分に成立していなかったことに加えて、当時は神経症を主な治療対象としておりパーソナリティや対象関係の問題が十分に認識されておらず、フロイトもドイツもタウスクを健康人とみなして分析の中断の影響を深刻に考えなかったであろうことなども、その背景にあると考えられる。

ローゼンによる理解の是非はともかく、その詳細な資料から浮かび上がってくるタウスクの個人史には、特定の相手に極度に依存し同一化する傾向と、そのように自分が依存したり女性から依存されたりすることに対する恐怖、父親の人物への際立った敵対と攻撃などの要素が繰り返し現れているように見え、タウスクがそういった自らの心理的問題を背景として、自他の境界や自分の自立性というテーマを強く意識していたことが推測される。このことは、彼のアイデンティティ概念が、ややプリミティブな退行的次元での自他の融合と分離を扱っていることと無関係ではないように思われる。もちろん、彼が弁護士助手、劇作家、精神分析家と大幅な転身を遂げている点は、彼の社会的自己規定に関する苦闘という側面を反映していると思われるが、この点は付加的な記述を除けば彼のアイデンティティ概念そのものに直接反映されているわけではない。簡潔に言えば、彼のアイデンティティ概念の記述は、彼が抱えていた主要な心理的問題と同様に、どちらかといえば前エディプ的な次元に重点があるように思われる。

2. パウル・フェダーンの影響

エリクソンのアイデンティティ概念が精神分析理論のなかに位置付けにくい背景として、エリクソンが一般的には自我心理学派に分類されながらも、自我心理学の主流であるアンナ・フロイトやハルトマンとは明らかに異質な基盤と発想に立っているという点が挙げられる。実際、エリクソンはアンナ・フロイトやハルトマンが自我そのものの本質を明らかにしていないと考え、ウィーン時代には二人よりも「分かりにくいが魅力的な教師」であったパウル・フェダーンに目を向けていたという（Friedman 1999）。

前述のように、エリクソンは、フェダーンが「自我アイデンティティ」あるいはそれに非常に近い表現を用いるのを耳にしたような憶えがあるとフリードマンに語っている（上掲書）。エリクソンは『青年と危機』（Erikson 1968）のまえがきでも、ウィーン精神分析研究所でフェダーンの「自我境界」に関する（やや難解な）セミナーを受講したときのエピソードを記し、エリクソン自身のアイデンティティ概念の分かりにくさとフェダーンの自我境界概念の分かりにくさを諧謔的に併置させてみせている。

もちろん、エリクソン自身が影響を受けたと述べているのはフェダーンだけでなく、自我に奉仕する退行という概念から芸術的創作を説明したエルンスト・クリスや、自我における流動性と鑑について述べたヴィルヘルム・ライヒからの影響にも彼は言及しており、またそれ以外にも多

種多様な影響関係を想定することが可能であろう。とはいえ、アイデンティティ概念の理論的側面に関していえば、後述するように、フェダーンのやや独特とも言える現象学的な自我概念や、とくに自我感情 (Ich-Gefühl) の概念が、エリクソンのアイデンティティ概念に直結する要素を数多く持っているため、以下では、フェダーンのこれらの概念について検討し、そこからエリクソンの概念を検討するための補助的な視点を得ることを試みたい。

2.1 フェダーンについて

パウル・フェダーンは1871年ウィーン生まれの内科医・精神科医で、フロイトの最古参の弟子の一人であり、1938年のフロイトの英国亡命後は米国に移り、1950年に亡くなっている。彼は自我を考究して自我心理学の祖とされるほか、精神分析の発展の早期から精神病患者への精神分析的アプローチを試み、統合失調症等においては自我への備給が過剰なのではなく不足していると指摘して、自我を強化する方向をもった精神病への治療アプローチを提唱し、戦後の米国の力動精神医学に大きな影響を与えたことで知られる (cf. 小此木 2002)。

エリクソンがウィーンでの精神分析研究所でフェダーンに教えを受けたのは1930年前後の時期であるが、これはフェダーンが自我を考究して自我境界や自我感情に関する論文を数多く発表した直後の時期にあたり、前述のようにエリクソンの「青年と危機」の序文にも、彼がウィーンでフェダーンによる自我境界に関するセミナーを受けた時のエピソードが記されている。以下では、エリクソンが直接触れた時期のフェダーンの自我論の特徴を簡単にまとめてみたい。

終生フェダーンはフロイトへの忠実さで知られ、彼自身とフロイトとの見解の相違を容易には認めようとしなかったと伝えられるが (Weiss 1953)、1920年代の彼の論文にみられる自我の概念は、後期フロイトやそれ以後の自我概念とやや異なるものである。フェダーンの自我概念は、フロイトと一定の距離を置き続けたP.F.シルダーの「身体像」・「身体図式」といった概念の影響や、哲学者フッサールの現象学の影響を受けて、体験に即した現象学的なものとなっている。

フロイトは1923年の「自我とエス」で、自我について機能としての側面を論じ、アンナ・フロイトらもその方向性を受け継いでいるのに対して、フェダーンは自我を「体験」として捉えた。彼はタウスクの自我境界の考え方をさらに展開させ、健康者から離人症そして精神病にいたる幅広い状態を例に引きながら、自我境界へのリビドー備給の欠乏が現実感覚の低下をもたらすとした。また、彼は自我や自我境界に関連して、個人にとっての自分自身という感覚を表すために Ich-Gefühl (一般に「自我感情 ego-feeling」と訳される) という言葉を用いた。また彼は、健康な自己愛という観点に初めて本格的に言及した分析家としても知られる。

フェダーンの業績の全体像については小此木 (1985b) を参照されたいが、以下のような点が、フェダーンの考えのなかでもエリクソンのアイデンティティ概念に直結しているように思われる。

フェダーンは、体験としての自我や、自我境界、自我感情といった概念について、その特徴として全体性、統一性、連続性、一貫性を繰り返し強調している。一例を挙げれば、彼はある箇所です、「自我『境界』という用語は…自我感情がひとつの全体性であることを暗示していなければならない。それによって、自我感情を構成するリビドー備給も同様に、中心的には一貫していなければならない」 (Federn 1953, p.286) と述べている。この自我感情 (Ich-Gefühl) は、フロイトがあまり用いなかった言葉であるが、実質的には現代でいう自己感 (sense of self) に近く、フェダーンはこれを自己愛的備給が主観的に体験される仕方として説明している。近年になってこの言葉の臨床的な有用性に再注目したBonomi (2010) は、この自我感情 (Ich-Gefühl) を英語では“the feeling of myself”と訳すことを提案しており、これも自己感にかなり近いものを指していると思わ

れる。

また、フェダーンは機能としての自我と、体験としての自我との関係について述べた中で、自我が主体にもなれば客体にもなるという点が、自我を他のあらゆる存在から区別する特徴であるとしている。彼は自我を客体として捉えた場合に「自己」という言葉も併用してはいるが、彼がこれらの論文を発表した1920年代には、精神分析理論に今日のような「自己」の概念は十分に確立しておらず、結局、彼の理論全体の中では客体の側面も自我として扱われている。

また、彼は、自我が自己愛の主体でもあれば対象でもあるという点に関連して、タウスクにも似た形で自他未分化な一次的自己愛から二次的自己愛への進展を論じ、古典ギリシャ語文法の用語である「中間態」(能動態と受動態の中間にあたるもの)と西洋語の「再帰動詞」(主体自身を '~oneself' といった形で目的語として明示するもの)の対比を用いて、「一次的自己愛は『中間態』の特徴をもち、もっと後に、自我がそれ自身と数多くの関係性のなかで出会った後になって初めて『再帰的』な形をとるようになる」(Federn 1953, p. 312)と述べている。しかしこれも、主体としての自我と客体としての自我を素朴に同じものにとらえる見方から一步も出てはいない。

タウスクからフェダーンにいたる初期の自我理論の流れを「現象-力動論的自我心理学」と呼んで他の自我心理学と区別した小此木(1985a, b)は、彼らの自我理論がこのように現象学的なものになった背景として、前述のシルダーやフッサールの影響に加えて、フェダーンやタウスクが新たに精神病の症状を精神分析的に説明しようと試みるなかで、その主観的に体験される症状を対象とすることとなり、そのため必然的に現象学的な説明の仕方となったと見ている。

フェダーンらの自我概念は、後年の自我概念のように防衛や性格といった観点を中心とした力動的なものとはやや異質なものであるが、欲動あるいはリビドーの備給といった観点から説明されている点で当時のフロイトに忠実であり、師フロイトの考えを精神病の説明に応用しようとした試みであった。また、精神分析理論における初期の自我概念は、まだ明確に定義されずに多種多様な側面から説明されており、そのような中から生まれてきたものである。

2.2 フェダーンの自我概念

フェダーンの自我概念は、彼の中でその後、脆弱な自我の強化を含む精神病への精神分析的アプローチへと発展し、これが米国の精神力動的精神医学に大きな影響を与えたことは前述のとおりである。しかし、彼の自我概念そのものは、その後の自我心理学のメインストリームに直接的に受け継がれているとは言えない。部分的には、たとえば彼の自我境界の概念がロールシャッハテストを用いた研究に応用されて精神病の自我の特徴を浮き彫りにするうえで重要な役割を果たしたことや、あるいは、健康な自己愛を想定しつつ、自己愛状態を自己愛の過剰ではなく欠乏から説明したという点はその後のコフォートの基本理論と大いに重なることを挙げることはできるが、彼の自我概念そのものがあまり精神分析理論の中で直接継承されていないのはなぜであろうか。

体験としての自我(あるいは自我感情)という概念や、主体でもあり客体でもある自我という発想など、彼の現象学的な自我の概念化は、本来の精神分析の本質的特徴である無意識の措定という観点から見れば、自我が自分自身を、何の苦もなくありのままに捉えることができるかのような印象を与えるという意味で、やや素朴で楽観的な見方のように見える。精神病の主観的症狀への着目が背景にあることや、リビドー論的な説明が中心で防衛などの観点はあまり含まれていないことなどもあって、神経症的な防衛による歪曲などはあまり考慮されていない。

1920年代にフェダーンが体験としての自我を言い表す際に盛んに用いていた用語の一つである、

前述の「自我感情」の概念に関連して、フロイトは1930年の論文「文化の中の居心地悪さ」のなかで、このように述べている（岩波版p.69）。

通常、われわれにとって、自分の自己の感情、われわれ自身の自我の感情（das Gefühl unseres eigenen Ichs）ほど確かなものはない。われわれには、この自我は自立的、統一的で、他のすべてのものから鮮やかに際立っていると映る。一見もっともらしく思えるのだが、これが誤りであること、…（中略）…、自我はこのエスを飾るいわばうわべの装いにすぎないこと、これは精神分析的な研究が初めて説いたところである。

フロイトはこの少し後の部分の脚注で、自我感情（Ichgefühl）等についてはフェダーンらの研究を参照するようにとも記しており、決して自我感情の研究を全面的に否定していたわけではないが、精神分析的観点を特徴づけている無意識の措定という前提からすれば、このような自我の体験としての自我感情を、不確かな仮象にすぎないとして切り捨てるフロイトのこのような捉え方はごく必然的な帰結とも言える。

ただ、このような、機能の主体としての自我と客体としての自我との素朴な同一視とも呼べるものは、フロイト自身の自我概念の変遷と無関係というわけではない。ストレイチーが英訳標準版フロイト全集（Standard Edition）の「自我とエス」の訳注で指摘しているように（Strachey 1961, 邦訳p. 369）、フロイトの「自我」という言葉の用法には揺らぎがあり、フロイト初期の1895年「科学的心理学草稿」や、この1923年の「自我とエス」では機能としての自我が論じられているのに対して、その二つに挟まれた時期での自己愛に関する記述では、自我という用語をむしろ「自己」に相当する意味で用いている。

フロイトやフェダーンが依拠していたリビドー論的な文脈で自己愛を論じようとした場合、機能する自我へのエネルギー備給などの観点が入ってくることからも、自己愛が向けられる対象として自我の概念を含める必要があったものと考えられ、リビドー論がはらむ混乱がこの概念化に反映されているとも考えられる。フェダーンの自我概念は、フロイトが用いた自我概念の揺らぎのなかの、この「自己」に相当する意味での自我概念を包含していることになる。

いずれにせよ、自我がみずからをそのままに認識することは一般的に可能でなくその統一性も仮象に過ぎないという、無意識仮説を前提とした精神分析のペシミスティックともいえる視点からすれば、フェダーンの自我感情の概念を何か確固としたものであるかのように考えることは困難になると考えられる。

とはいえ、主観的体験に沿うフェダーンの現象学的な自我概念は、すぐれた臨床家としての彼の特徴と結びついている側面もある。精神病的な体験を基盤にしたことが現象学的な自我概念に結びついたという小此木の説明については前述の通りであるが、それに加えて、フェダーンの精神病治療論は陽性転移の確立と維持を重視しており、患者の思考を肯定し、人格を尊重する共感的アプローチがとられるのが特徴である。体験に沿う現象学的な自己概念は、このような彼のアプローチの特徴と表裏一体でもあったと考えられる。そして、この彼の特徴は後述のようなエリクソンの臨床アプローチの特徴とも主要な側面において重なっている。

2.3 フェダーンとフロイト

前述のようにフェダーンはフロイトの最古参の弟子の一人であり、フロイトの癌が発覚してからはフロイトに分析を求めてくる患者たちを任されたり、フロイトの役割の代行に任せられるな

ど、臨床面や運営面に関して言えば、ある程度フロイトの信頼を得ていたと言える。フェダーンは臨床家としてはフロイト以上に人間味と思いやりにあふれた人物であったといい、精神分析に限らずその患者に適した技法を柔軟に用いていた。当時のウィーン大学医学部教授でフロイトと微妙な関係にあったヴァグナー-ヤウレックも、臨床家としてのフェダーンを信頼して患者を回してきていた (cf. Roazen 1975, Weiss 1966)。

その反面、フロイトの直接の弟子たちについて詳しい資料を提示しているローゼン (Roazen 1969, 1975) によれば、フロイトは自分のもとに残った最初期の弟子たちを学問的にあまり評価しておらず、フェダーンの理論化についても、分かりにくく不明瞭なものと考えており、その価値も認めていなかった。ヘレーネ・ドイチュがローゼンに語ったところによれば、フェダーンの研究発表中にフロイトが彼女にジョークを書いたメモを回してきて、そこには「何を話しているか分かるかね？私には分からん」と書かれていたという (Roazen 1975)。

フェダーンに好意的な多くの分析家たちも、フェダーンの自我に関する論文の書き方の不明瞭さや彼の自我境界概念の分かりにくさを認めている (ex. Erikson 1968, Weiss 1953, 1966)。彼は混乱しやすいことや言い間違いの多いことでも知られており (Roazen 1975, Erikson 1968)、自分でも言い間違いの多さを自覚して冗談の種にしていたという。彼の弟子の一人で、彼の著作集の編者でもあるワイス (Weiss 1966) は、博愛的で人の良いフェダーンが他人に騙されやすかったことを記し、また、フロイトのような現実主義や自己懐疑が彼には欠けていたとまで述べている。

2.4 フェダーンとエリクソン

前述のように、フェダーンは自我あるいは自我感情、自我境界、自我経験などについて述べた際に、いずれにおいても全体性、統一性、連続性、一貫性を本質的特徴として繰り返し強調していた。また、彼はアンナ・フロイトらとは異なり、自我についてリビドー論の文脈で説明する傾向が強かった。フェダーンがどの程度、(タウスクが用い始めた) アイデンティティという言葉を用いていたかは明らかでないにせよ、こういった彼の自我論の特徴が、エリクソンの述べるアイデンティティ概念に非常に色濃く反映されていることは明らかであり、エリクソンはそれに独自の心理-社会的観点を付け加えることによって彼の概念を作り上げたとも言えるだろう。

もしそうだとするなら、なぜエリクソンは、フェダーンを十分に引用してその影響関係をもっと明らかに示そうとしなかったのであろうか。前述のワイスによると、フェダーンは、彼のセミナーに出席していた何人かの精神分析家たちが1930年以降に自我心理学の論文や著作を発表したさい、彼に言及しなかったことに深い失望を味わっていた。しかし、フェダーン自身も認めていたように、フェダーンが彼の発表したもののなかで自分の発見を明快に述べることができているのは事実であって、その理由の一端は、彼がフロイトへの絶対的な忠実さゆえに、自分の独自の見解を常にフロイトの概念を裏付ける方向に結びつけようとしたためであると考えられる (Weiss 1966, p. 153)。

実際、フェダーンが自我について書いた諸論文を読むと、その趣旨を明快にまとめたり、その考えを簡潔に凝縮した部分を見つけたりすることが容易でないことが分かる。弟子であったワイス自身でさえ、フェダーンの記述を読んだだけでは必ずしも理解できるとは言えず、フェダーンと長々とやりとりしてようやく分かるのが常だったと述べている (上掲書)。エリクソンがフェダーンのセミナーから多くの発想を得たとしても、どこからどこまでがフェダーンの発想なのかを明確に引用して示すのは難しかったと推測される。おそらくエリクソンは、彼自身もよく分からないその影響関係を、1968年の『アイデンティティ：青年と危機』のまえがきの冒頭において、

以下のようなフェダーンのセミナーをめぐる笑い話（愛情をこめた揶揄のようにも見える）を通して、漠然と示すことしかできなかったように思われる。

〔自我境界についての連続セミナーの最終回の終わりに、フェダーンは〕手にした原稿をたたみながら、ようやく理解してもらったことができた人の雰囲気を漂わせて、こう尋ねた。「さて、私はよく理解しているかな？」(Erikson 1968, 邦訳p.9)【注：原語の言い回しに即して説明すれば、「私は私自身をよく理解してもらえただろうか？」と言おうとして、言い間違えて「私は私自身をよく理解しているだろうか？ (“Habe Ich mich verstanden?”) 」と言ってしまったという錯誤行為の笑い話である。なお、1969年の邦訳版ではこの言い間違いが正確に訳されていないため、ここでは新たに訳し直した。】

このあとにエリクソンは、自分はアイデンティティについての自らの論文を読む際にこの「自分は理解しているだろうか」という問いを繰り返してきた、と続けて、アイデンティティ概念の定義的説明の困難さを述べており、その意味では彼はフェダーンと自分自身を重ねた書き方をしている。ただ、エリクソンが、アイデンティティ概念について述べるなかで、この概念に学問的論文で言及したことがないフロイトを大幅に引用しているのに対して（「ブナイ・ブリース協会会員への挨拶」Freud 1926）、彼自身のアイデンティティ論と共通点の多いフェダーンにはわずかしか言及していないのは、ややバランスを欠いているのも事実である。もちろん、前述のようなフェダーンの自我論の分かりにくさという背景や、当時、米国内で精神分析理論からの逸脱を批判されていたエリクソンにとってはフロイトの思考との連続性を強調することが必要だったという理由もあるかもしれない。しかし、この扱いの違いには、遠く離れたよく知らない父親を理想化してそこに同一化し、目前の優しい養父にはやや脱価値化したような見方をするという（図式化のためにやや誇張した表現ではあるが）、エリクソンのパターンが繰り返されているようにも見える（cf. Friedman 1999）。

3. E. H. エリクソンのアイデンティティ概念について

エリクソンのアイデンティティ概念が、彼の歩んできた人生と深く結びついたものであるという盛んに繰り返されてきた説明は、大筋において妥当とは考えられるものの、そこでいう彼の人生とは主としてエリクソン自身が回想したナラティブにもとづくものであった。エリクソンが亡くなって5年後の1999年に発表されたフリードマンによる伝記（Friedman 1999）は、エリクソンが生涯知ることのなかった彼の父親に関する情報や、家族背景、青年期の彼についての詳しい客観的情報など、彼の人生について再構成するうえで重要な情報を多く含んでいる。以下では、これによって付け加えられた情報も含めて、エリクソンがアイデンティティ概念を提唱するまでの彼の背景についてかいつまんで述べてみたい。

3.1 エリクソンの歴史

エリクソンの母親カーラは、デンマークの首都コペンハーゲンのユダヤ人の名門アブラハムセン一家の出身である。この一家はもともと商人が多かったが、知的な気風をもち、家系図にはコペンハーゲンの主任ラビ（ユダヤ教の聖職者）のほか、ルター派の牧師の記載もあるという。一家は食事などでもユダヤ教の伝統に必ずしもとらわれない面があった。カーラは一家の中でも知

的な女性で、高等教育を受け、キリスト教的な哲学者キルケゴールの著作を愛読していた。

カーラは最初、一族の知人の息子で株式仲買人のサロモンセンと結婚したが、すぐにこの新郎は秘密にしていた金銭問題ゆえに新婚旅行先のローマから一人で失踪し、のちに彼の死亡が確認されるまで音信不通のままとなった。

その4年後、カーラは、コペンハーゲンを離れてヴァカンスで滞在していたドイツで、エリク（エリクソン）を妊娠していることに初めて気付き、このときはもう出産の二ヶ月前であったという。カーラはエリクの実父が誰であるかを決して明かさなかった。エリク自身は、子供時代に親戚の会話を食卓の下でもれ聞いたのをもとに、自分の父親はデンマーク人の貴族で芸術家であったと考えていたが、彼自身これを半ばひとつの空想と見なしてもいた。

上記のフリードマンもエリクの実父が誰であったかについては確証がないとしながらも、カーラに近いアブラハムセン一家の人々の間では、エリクの父親はコペンハーゲン裁判所の法廷写真家でエリクという名前だったと伝えられているといい、フリードマンはこの条件に反しない人物としてエリク・バーンセンという写真家の名前を挙げている。のちにエリクは米国に移住した後、自分の名字を、エリク自身の息子という意味で「エリクの息子＝エリクソン」としたが、彼の父の名もエリクであったとすれば、偶然とはいえこの名字もあながち根拠のないものとは言えないことになる。

ともあれ、一族の人々は不名誉を避けるためカーラに対してドイツに住む独身の伯母たちのもとにとどまるようにすすめ、彼女はフランクフルトでエリクを出産する。カーラは結婚後の苗字を使い続けており、出生証明書のうえではエリクは（4年前から行方不明のままの）サロモンセンとの間の息子として登録された。その4ヶ月後、カーラのもとに、サロモンセンが死亡したという知らせが届いたという。

その後の2年あまり、カーラはフランクフルト近郊のビュールという町でエリクを育てた。当地でのカーラは芸術家たちのサークルと交流があり、その一人からの紹介で、胃腸の弱かったエリクをカールスルーエの小児科医ホーンブルガーに診せた。適切な診断と処方によってエリクはみるみる健康になり、これがきっかけとなって、エリクの3歳の誕生日にカーラはこのホーンブルガーと再婚した。この人は優しく誠実な人物だったが、のちにエリクソンは、それまで深い相互信頼のもとに母と二人でくらししてきたと感じていた彼にとって、ホーンブルガーが闖入者としか感じられなかったことを述懐している。夫婦はエリクにホーンブルガーが実の父親だと教えることにしたが、エリクにはそれを信じることはできなかった。この欺きについて、のちのエリクソン自身は、彼を守るための愛情から出た欺きであると考えたり、あるいはもっと利己的な動機から出たものと見なしたり、どう捉えるか揺れていた（上掲書・邦訳pp. 8-9）。

また、養父ホーンブルガーはリベラルではあったが熱心なユダヤ教徒であり、カールスルーエのユダヤ教コミュニティの中心人物として活動し、カーラもその手伝いにエネルギーを注いだ。ホーンブルガーとカーラのあいだには全部で三人の女の子が生まれたが、そのうち最初の子は早くに亡くなり、エリクは二人の異父妹とともに育った。

この両親夫婦と違って（実父から受け継いだ）金髪で青い目という明らかに非ユダヤ的な外見をもっていたエリクは、ユダヤ教会では「異邦人（Goy）」と呼ばれ、逆に地元の学校ではユダヤ人と呼ばれていたと回想している（Wallerstein 2014）。また彼は、当時のドイツの子どもたちの外国人蔑視の気風の中で（特に敵視されていた）デンマーク系の出自を隠す必要も感じており、そのために少年時代の彼自身もドイツ国粋主義的な考え方に走っていた。

彼はしだいに、儀礼的なユダヤ教よりも、キリスト教のプロテスタントの純粋な敬神と信仰に

魅力を感じるようになったという。これには母親カーラの影響もあって、母親は内面ではキリスト教的精神に親しみつつユダヤ教徒としての伝統にも誇りを抱いており、これらの境界を越えることができるとエリクに教えた (Friedman 1999 邦訳p. 19)。また、彼は自分の実父はキリスト教徒のデンマーク人だったと推測するようになっていった。

彼は徹底的に暗記中心だった当時のドイツの学校の教科には関心が持てなかったといい、母カーラが彼に学業の必要性を説いて毎日勉強をみてやっていたにもかかわらず、成績は冴えなかった。最終学年のころ、同級生でのちに精神分析家となるピーター・ブロスと親友になった。ブロスとは哲学や芸術への興味や自然への親近感などを共有できたほか、母親がユダヤ人で父親がキリスト教徒だったブロスには、エリクのユダヤ教中心の家庭への不満がよく理解できたという。

ギムナジウムを卒業すると、彼は数ヶ月の徒歩旅行のあと、地元の芸術学校に入学する。これと並行して師事した美術指導者グスタフ・ヴォルフはその小冊子に若きエリクの作品を大きく取り上げており、エリクもヴォルフの「その人の本質になることや、自己を社会に結びつける重要性」を強調する教育思想に影響を受けたと推測される (上掲書p. 24)。エリクはこの小冊子を終生大切にしていたという。

その翌年から二年間にわたって、彼はミュンヘンの芸術アカデミーで学んだが、そのあいだに彼は自分には色彩を操ることができないという限界に直面し、芸術家は自分の職業ではないと悟るにいたった。その後、ミュンヘンから南下してイタリアに行き、親友ピーター・ブロスらと合流してフィレンツェ郊外で共同生活を始めたが、このフィレンツェ時代の後半にはもう絵を描くこともやめてしまい、1925年に深い挫折感を抱えたままカールスルーエの両親の家に戻った。ここでの無気力な数ヶ月間は、エリクにとって非常に辛い時期であったようである。

この少し前の1923年から約1年にわたって彼が書き連ねた手記が、彼の妻ジョーンらによって保存されており、フリードマン (上掲書) がその一部を紹介している。内容は断片的で、学問的・論理的な書き方はされていないが、のちの彼の考えにつながる萌芽をそこに見ることもできる。たとえば彼は、有形のものの有限性と、スピリチュアルなものの永続性を対比した詩句の中で、「Personは死に、Ichは生きる」と書いている。この時点で彼は精神分析の考えにまだ影響を受けていないことから、Ich (私) は精神分析用語としての「自我」ではなく、人間の主体のことを指していると思われるが、この主体を重視する姿勢は彼のアイデンティティ論のひとつの特徴とも重なる。また、「個は……より包含的であるほど、より真となる」という価値観は、直接的には人間の個人について書かれてはいるものの、彼のアイデンティティ概念や心理社会的発達図式が著しく包含的であるという際立った特徴を考えれば、まさしく彼の考え方の特徴を表しているように思われる。

彼の生涯に戻ると、彼の何ヶ月にも及ぶ無気力な状態を心配していた親友ブロスは、当時ウィーン大学に通いながら、フロイトの被分析者だった富裕な米国人ドロシー・バーリングガムの子供たちの家庭教師をしており、バーリングガムやアンナ・フロイトから小さな学校の設立を打診されたとき、才能豊かな友人エリクと一緒に出来ると返事し、1927年の早春にエリクをウィーンに呼び寄せた。

エリクの子どもたちの気持ちに対する理解力の鋭さと細やかな関係づくりの能力はアンナ・フロイトに強い印象を与え、その後、彼女は彼に対して安価で精神分析を行う提案をした。

彼はこの学校の教師として初めての仕事を、そこで天分を大いに発揮した。彼は分析中にアンナ・フロイトから児童分析家になることを勧められたとき、精神分析はあまりにも知的で言語的であり、視覚的な天分の自分には合わないと言ったが、のちの彼自身の説明によれば、アンナ

が父フロイトにそれについて相談したところジグムント・フロイトがそういう人は「子どもたちに見ることを教えることができる」と答えたことと聞き、児童分析家になることを決意したという (Friedman 1999)。エリクソンは、ジグムント・フロイトが芸術的天分を精神分析に統合していると感じており、そこに自分が同一化できる人物を見出すようになった。

彼は、この学校に加わった同僚でウィーンに舞踏教授法の研究に来ていたカナダ人女性ジョーン・サーソンと出会って親しくなり、数ヶ月後にジョーンは妊娠に気づいた。当初エリクは結婚に尻込みしたが、彼の実父と同じ過ちを繰り返してはならない等という友人たちの強い説得で結婚を決意した。ジョーンは熱心なキリスト教徒であったが、エリクの両親の手前、二人はキリスト教式の結婚式のほかにユダヤ教式の結婚式も行った。

当時の学校でのエリクの人となりについて生徒たちが回想するところによれば、エリクは「神経質で内気だったが、独特のひょうきんさもあった」(上掲書 p. 43) といい、何でもないことですぐに赤面し、服装にひどく気を使っていて、鏡の前を通る時は必ず自分の姿を確認せずにいられない人だったが、子どもたちが何に関心を持っているかを直感的にわかってくれたという。

アンナ・フロイトとの分析を振り返って、エリクは、母と二人きりの幼児時代を再体験したと語っている。一方、実父をめぐる苦悩について彼は分析で話したが、(第一次大戦で父親を亡くした子どもたちとの経験が豊富だった) アンナは、彼の父親をめぐるファンタジーに批判的で、彼が自分自身の父親になるしかないと答え、エリクは理解されていないと感じたという。とくにジョーンとの結婚後は、次第にアンナとのあいだに距離が開いていったとされる。

これは筆者の推測であるが、彼の父親をめぐるファンタジーは自己愛的な防衛として機能するようになっていた側面があり (それは何ら特殊なことではなくしばしば起こりうることである)、アンナ・フロイトはそこに反応して、エリクが内的空想の問題を外的問題のせいにしてるように感じた可能性が高いと思われる。ただ、分析の内容についての被分析者の回想をそのまま事実と決めることはできないにせよ、もしそのやりとりが事実とすれば、精神分析ではそのような説得よりも防衛の分析をするほうが本来的であるとも言える。また、当時の精神分析ではまだ治療構造に関する洞察が未発達であり、アンナ・フロイトがエリクソンの働く学校の存続の可否に決定権をもつような立場にあるなど、過度に濃厚に絡み合った現実的關係からみて、十分な分析が行える治療構造があったとは言いがたい。

エリクソンは分析の終了後もアンナ・フロイトに感謝の念を表明し続けるが、アンナ・フロイトは次第にエリクソンに対して批判的になっていく。

エリクソンは児童の分析にすぐれた才能を発揮し、かなりのスピードで児童分析家・成人の分析家としての資格を得るにいたった。一方、彼が当時発表した初期の論文では、子どもと分析家との特別な関係そのものの意義を著しく強調するなど、どちらかといえば後年の関係学派を思わせるような発想もみられ、これは当時のウィーンの分析家たちからは精神的でないと批判的に受け止められた。

彼は分析家としての資格を得た1933年に、ナチスの脅威をいち早く認識して、妻子とともにウィーンを去る。最初、彼は、自分が本来はそこに属しているという思いを抱いていたデンマークに定住して分析家として開業するつもりであったが、当地の母方の親戚やユダヤ人社会の弁護士の奔走もむなしく、デンマーク市民権は認められなかった。彼は失望するが、妻ジョーンの意見もあって、妻の親戚が多く住み、児童分析家も求められているという米国に向かうこととなる。

到着後、ニューヨークの精神分析研究所では冷たいあしらいを受けて先行きの不安な数週間を過ごす、ボストンに移って、彼にアメリカ行きを勧めたハンス・ザックスに会い、英語は満足

に話せないながらも、当地の精神分析家たちと交流しつつ、児童と成人の精神分析を行うようになった。ほどなく、ボストン精神分析協会の会員の妹で、かつてオットー・ランクの分析を受けたが改善しなかったという若いマーサ・テイラーの治療に成功したことや、分析協会での発表などをきっかけに、彼は精神分析家・児童分析家としての実力を周囲から高く評価され、数多くの仕事を任されるようになっていった。その一方で、ウィーンで分析家となり精神分析を人文学ととらえている彼は、米国では精神分析が完全に医学の一部に位置づけられていることに、強い違和感をもっていた。

彼は精神分析的な臨床活動を続けながら、TAT（絵画統覚検査）の創始者として知られるヘンリー・マレーのいるハーバード大学の心理クリニックをはじめとして、さまざまな大学や研究所で研究活動に加わるようになった。しかし心理検査や統計的手法をもちいた研究が主流であった米国の心理学の世界で、検査にも統計にも縁のない彼は自分を異質な存在と感じていた。イェール大学に移り、人間関係研究所で研究を続けた彼は、のちの彼の心理社会的発達図式の部分的な原型となるものを含む論文を発表しているが、全体として彼の研究は米国の心理学の世界では客観性に欠けると見なされがちであり、心理学の研究プロジェクトのなかに適切な位置を見出すのも難しかった。

一方、彼はこの人間関係研究所で、文化人類学者のエドワード・サピアに出会って強い印象を受ける。サピアは個々人の人生に焦点を当てるアプローチに高い価値を置き、また学際的な志向性を強く持っており、エリクソンは文化人類学と精神分析を結びつけることを考えるようになった。1937年には、精神分析の訓練経験もある文化人類学者のスカダー・メキールと友人になり、サウスダコタ州のスー族の特別研究に誘われたことは彼にとって『幼児期と社会』につながる大きな経験となった。

1939年、カリフォルニア大学バークレー校に移り、児童福祉研究所の研究員として健康児の遊びの研究をする傍ら、文化人類学者たちとのフィールドワークにも参加する。1942年にはサンフランシスコ精神分析研究所で、非医師としては例外的に正規の訓練分析家に指名される。

彼は、知的な刺激に満ちている大学という環境を好んだが、全体として、正規の研究プロジェクトのチームにはあまり溶け込めず（前述のような当時の米国の心理学の風潮が彼の目指すところに合わなかったこともあろうが）、チームのなかで彼はあまり評価されない傾向があった。また、精神分析研究所や他の亡命ユダヤ人分析家たちにもじっくりこないものを感じており、周囲の分析家からも彼のアプローチが批判されるようになった。その一方で、文化人類学者の友人たちとの結びつきでのフィールドワークには生き生きと参加しており、自由な気風のあるメンガー・クリニックでの時折の活動も含め、彼は少数の親しい友人と深くつきあってお互いに刺激を与え合う関係をつくることができた。

さまざまな外的事情はあるにせよ、彼には全体として、正規の集団のなかでは居心地悪く感じるのに対して、一対一の関係では深く濃厚な関係をつくる、という傾向が繰り返し見られる。このことは、二者関係では深く関われるが、三者関係は必ずしも得意でないようなパーソナリティを想起させる。また、フリードマン（上掲書）は、エリクソンがアンナ・フロイトや妻ジョーンなどのように強くて知的な女性に依存するというパターンを繰り返していることを指摘しており、そこには母親との関係性が反復されている側面があることが推測される。全体的な情報を総合すると、機能は高いがやや「薄皮の自己愛」的なパーソナリティ（Rosenfeld 1987）が想定される。これが、成長期に社会的な承認を得ることが困難だった彼の特殊な家族のおよび民族的背景と関連している可能性は想像に難くないが、そこにもっと内的な要因がどれくらい関わっているのか

は、さらに慎重な検討を必要とするところである。

3.2 エリクソンの臨床アプローチの特徴

一方、エリクソンの臨床アプローチの特徴としては、著書に記された事例との関わり (ex. Erikson 1950) やフリードマン (上掲書) が記している様々な事例の経過などから、当時の米国の他の精神分析家たちとくらべた場合、①子どもをとりまく家族や社会という外的要因の重視、②本人の視点に立った共感的なアプローチ、③治療関係そのものに価値を置いていること、④治療構造が厳格でないこと、などの点を挙げるができるだろう。

最初の二つの点は、その後の精神分析の一つの方向性を先取りしているとも言える。最初の点に関して言えば、当時の精神分析では、現在ほど環境要因が重視されずに精神-内的 (intrapsychic) 要因で説明しようとする傾向が強かったことを考えると、家庭や社会の要因を重視したことは適切なアセスメントと対応に大きく資する部分があったと考えられる。その一方で、青年時代のエリクソンには内面を見つめることができないところがあった (Friedman 1999) という指摘もあり、場合によっては内的要因を否認して外的要因のせいにしてしまう危険にもつながる側面は否定しきれないであろうし、これは彼を批判した周囲の分析家たちの抱いていた危惧とも重なるであろう。もっとも、彼自身の残した論文中の事例記述を見る限りでは、内的要因と外的要因の両方におのずと目を配っている場合が多く、あまり外的要因の極端な偏重に陥っていたような傾向は伺われない。むしろ、その点はエリクソンの視点をを用いる場合に私たち自身が注意すべき陥穽であると考えられる。

二番目に挙げた共感的なアプローチは、その人がおかれた立場に対する理解という意味では、上記の家庭や環境などの外的要因を重視することともつながっていると思われる。また、本人の主観的体験の重視という意味では、フェダーンらにも通じる現象学的な観点と親和性が高いといえる。

三番目の点については、一見すると、初期における子どもとの関係づくりを重視したアンナ・フロイトの発想とも重なるように見えるが、エリクソンの場合は関係それ自体にも本質的な価値をおいており、このあたりはのちの関係学派に親和性の高い側面であるといえる。

四番目に挙げた、治療構造の厳格さに欠ける点は、エリクソン自身としてはウィーンの世界分析サークルの雰囲気そのままに受け継いだものと感じられていたようであるが、被分析者である子どもや親と食事を共にするなどの点は、(おそらく一定のメリットはあったと考えられるにせよ)、今日の精神分析的な観点からすれば、分析的な作業に制約や限界を生じる側面や、その他の境界侵犯にもなう問題を生じることが懸念されるところである。

彼はサンフランシスコ精神分析研究所時代に、被分析者と気軽に接触しすぎる、自由に転移満足させていると批判され、また、セッション頻度が少ないなどの問題から、彼は精神分析家ではなく精神療法家であるとの批判を受けたりもしている (Friedman 1999, 邦訳上巻 p. 150)。これらがやや教条主義的で一面的な批判であったとしても、また批判されている点が必要しも全面的なデメリットとは限らないとしても、こういった彼のセラピーの枠組みに関する批判には一定の根拠があることも否定できないと思われる。

3.3 エリクソンのアイデンティティ概念の検討

上記のように、エリクソンの心理-社会的観点は、それ以前の環境的側面を無視しがちであった精神分析の全体的傾向に対して補完的な視点を提供したと言える。そして、その心理-社会的観点

の一つに位置付けられるエリクソンのアイデンティティ概念は、青年期の心性を記述するうえで有用な概念であるとともに、アイデンティティ拡散の状態像に焦点を当てることによってその後大きな影響を与えたことは間違いない (cf. Kernberg 2006)。

その一方で、エリクソンによるアイデンティティ概念の説明には、タスクからフェダーンにいたる現象学的な自我の概念化が影を落としており、これが肯定的・否定的の両面においてエリクソンの概念の特徴となっている部分があると考えられる。

以下では、このような点を軸にしなが、エリクソンのアイデンティティ概念の特徴について検討し、とくに精神分析的な理論と臨床思考におけるその有用性を制約してしまうような問題がどこにあるのかを明らかにすることを試みたい。

3.3.1 機能としての自我と意識の対象としての自我の関係

以下の二つの節で述べるエリクソンのアイデンティティ概念の問題点のほとんどは、大まかに言えば、その極端なまでの包括的または包含的性質に由来すると筆者は考えている。この性質は他の面ではメリットでもありうると考えられるが、精神分析的にみた場合にはいくらか問題をはらんでいると言わざるをえない。

その包括的性質が問題を生じている点の一つとして、フェダーンらの発想と同様に、自我の統合性としてのアイデンティティ（機能的自我としての側面）と、体験される自己のまとまりとしてのアイデンティティ（意識の対象としての側面）とが、どちらもアイデンティティ概念のなかに包含されてしまっており (cf. Erikson 1959, 邦訳p. 112)、やや混然一体となったかたちで扱われている点が挙げられる。無意識を措定する精神分析の発想からすれば、機能的自我と意識される自我とが同一であるとは考えられず、無意識領域のない理想形においてしか実現されえないことである。

もちろん、エリクソンはその記述の多くにおいて無意識を措定しており、アイデンティティについてもたとえばアイデンティティ抵抗など無意識領域を含む抵抗を想定している。その意味で、エリクソンの考え全体においては無意識（その「深さ」は問わないとして）も大いに焦点を当てられてはいる。

しかし、自己認識がさまざまに歪められ、部分的なものにとどまるという精神分析の基本的観点が、アイデンティティ概念そのものには反映されているとは言えない。精神分析的に見れば、その点が欠けていることは無意識領域のない理想形を当然の出発点としていることにもなり、見方によってはそのような楽観的な発想自体が、万能感や自己愛性を許容しているようにすら見える。

ある一面から見れば、そういった万能感や自己愛を許容するような特徴が、私たちにとって彼のアイデンティティ概念を魅力的に感じさせるという側面も否定できないように思われる。ただ、過去においてたとえば教育学の思想の多くが理想主義的で人々に希望を与えるような種類のものであったことを考えれば（彼自身、最初の仕事は教師であり、若い頃に前述のヴォルフの教育思想に触れているほかにもウィーン時代の初期にはモンテッソーリ教育の資格も取得している）、そのような思想に近いものとして捉えることも可能であろうし、決して彼の考えの社会的価値を否定するものではないが、上記のような意味で、アイデンティティ概念自体が精神分析の基本的発想と整合性が取りにくいことは事実であろう。

なお、エリクソン自身、『アイデンティティ：青年と危機』（Erikson 1968）に収録された「私、私の自己、私の自我」という文章のなかでこの問題に触れ、（意識の対象としての）自己という用語を用いるべきところに自我という言葉を使うべきでないとするハルトマンの意見への同意を表

明している。しかし、そのあとの部分で、こんどは「私」と「(複数の)自己」と「(無意識的)自我」という三つを別のもので述べている。そこでは「(複数の)自己」はごく移ろいやすいものとされ、「私」は確固として一貫性のあるものと捉えられている。そこには、意識の中心としての「私」の体験を追究する現象学的な姿勢が一貫しているとも言え、その方向性に意義を認めることも可能であるが、その一方で、ここでの「私」が、その意味するところであるはずの現実の意識的自我に比べてやや理想化されているように見えるのが気になるところである。

3.3.2 発達的水準の折り重なり

前述のように、タウスクのアイデンティティ概念やフェダーンの自我論が、もっぱら精神病やそれに近い水準での体験を精神的に解明しようとするなかで生まれてきたものであるのに対して、エリクソンはどちらかといえば健康度の高い子どもや青年の治療を志向し (Friedman 1999)、彼の心理-社会的図式もアイデンティティ論も基本的には健康な発達を描く試みとして形成されたものである。

エリクソンのアイデンティティに関する考え方や用語法には若干の揺らぎがあるが、いくつかの箇所では (ex. Erikson 1959, 1968, 1987)、パーソナル・アイデンティティと自我アイデンティティ (または心理-社会的アイデンティティ) とを区別する書き方をしている。

それらの一つにおいて (Erikson 1968)、彼はパーソナル・アイデンティティについてこう書いている。「パーソナル・アイデンティティをもっているという意識的感觉は、二つの同時的な観察にもとづいている。すなわち、時間と空間における自らの存在の自己斉一性と連続性の知覚、そして他者たちが自分の斉一性と連続性を認識しているという事実の知覚である。」(原書p. 50)

そして彼はこれに続けて、「しかし、自我アイデンティティと私が呼んだものは、存在という単なる事実より以上のことに関わっている。それはいわば、この存在の自我的な性質である。したがって自我アイデンティティとは、その主観的側面において、自我の総合する方法すなわち自らの個人性のスタイルに自己斉一性と連続性があり、このスタイルが周囲のコミュニティのなかで自分が重要な他者たちにとってのもつ意味の斉一性や連続性と一致している、という事実への覚知である」(同p. 50) と述べている。

とくに後者の説明は、エリクソンに特徴的とも言える、やや不明瞭で理解しにくい書き方であり、指し示している内容に茫漠とした幅があるために概念間に境界線を引くのが難しくなるような説明であるが、パーソナル・アイデンティティは自分自身をまとまりとして感じられる基本的感覚に関わっているのに対して、自我アイデンティティ (心理-社会的アイデンティティ) は自らの個性の自覚や周囲の社会から認められている感覚に関わっていると言うことができる。

その意味では、パーソナル・アイデンティティの感覚は、基本的な二者関係における分離個体化の相対的な達成において得られる、あるいは抑うつポジションにおいて体験されるような、全体対象関係にもなう全体自己 (whole self) の感覚をさしていると考えられ、これに対して、自我アイデンティティは、さらにエディパルな葛藤を経た先に得られる社会的関係のなかでの genital primacyに関わっていると考えられる。言い換えれば、前者は二者関係の (前エディプス期的な) 問題の相対的克服、後者は三者関係の (エディプス期的な) 問題の相対的克服を意味しているとも言え、精神分析的な意味での発達水準 (人格水準) の異なる次元を指し示していることになる (cf. Kernberg 1976, 邦訳p. 18)。そして当然、理論上は後者が達成されるには前者が達成されていることが必要条件となる。

このように捉える限りでは、これら二つが明確に区別されていて問題の余地などないように見えるが、エリクソンはアイデンティティについて述べる際に、これら二つをあえて区別しない場

合が多く、アイデンティティ概念を用いる際に混乱が生じやすいように思われる。もちろん、アイデンティティの感覚においてこれら二つが本人の覚知のなかで区別されるわけではないため、その区別の必要性は、どちらかといえば精神分析的あるいは臨床的な有用性から要請されるものである。

たとえば、エリクソンの記述では、自我アイデンティティに主眼を置いた理論的記述をしながら、その問題の臨床例示として、明らかにパーソナル・アイデンティティの次元での問題を呈するアイデンティティ混乱の事例が示されていることがある。パーソナル・アイデンティティが障害されていればその先の達成である自我アイデンティティも障害されることになるので、そのような例を用いることはもちろん間違いではないが、臨床的に何が問題なのかという点に関しては混乱を生じやすい書き方であるように思われる。

また、Kernbergらが指摘するように、臨床場面においてアイデンティティの問題を呈して来談するのは、境界水準や顕著な自己愛の障害の場合がほとんどであり、これらはつまりパーソナル・アイデンティティの次元での問題に属している。そのような事例では、たとえ表面的には自我アイデンティティ（心理社会的アイデンティティ）の問題を呈して来談しているように見えても、その背景にはさらに基本的なパーソナル・アイデンティティの問題があると考えられる。

これに対して、自我アイデンティティの次元に固有の問題は、基本的に青年期に固有の問題の反映であると考えられ、健康度の高い人が体験し、自分で乗り越えていく場合が多いと考えられる。ちなみに、エリクソンが1950年代以降において、臨床的記述よりも、社会的変動のなかにある偉大な人物の心理-歴史的な記述に軸足を移したように見えるのも、このような自我アイデンティティの次元に固有の問題への彼の関心を反映しているように思われる。

誤解を避けるために記せば、本節では、エリクソンのアイデンティティ概念が多次元的であることが間違っていると言っているのではなく、多次元的なものをやや一緒に扱う傾向があるために、とくに臨床思考においては混乱を生みやすいという点を指摘しているのである。

現代の精神分析的な臨床理論においては、上記の二つのアイデンティティ概念のうち、パーソナル・アイデンティティの次元はKernberg（2006）らによって取り上げられ、その障害がパーソナリティ障害の基本的特徴の一つと位置づけられているのに対して、自我アイデンティティの問題はそれ自体として取り上げられることは稀であり、むしろ自己あるいは社会的自己の問題という形で論じられているように見える。

エリクソンのいう「自我アイデンティティ」に固有の問題は、パーソナリティが比較的によく統合されている次元での問題であることからすれば、獲得や成功をめぐる神経症的葛藤や、自己の承認をめぐる自己愛の問題、あるいは社会的位置づけをめぐる外的・環境的問題などの形をとると考えられる。これに対して、連続性や斉一性といった「アイデンティティ」という用語を必要とする問題は、主として「パーソナル・アイデンティティ」の次元の問題であって、「自我アイデンティティ」に固有の問題においてはこれらが中核的な問題となることは少ないように思われる。

ここに、現代において精神分析的な文脈の中でエリクソンの自我アイデンティティの概念が用いられなくなっている理由の一つがあると考えられる。つまり、自我アイデンティティの次元に固有の問題は、本人のアイデンティティの意識に目配りをしつつも、神経症的葛藤、自己愛の問題、社会のなかでの位置づけの問題などとして個別的に扱うことが精神分析的な臨床においては実りが多いことと、これらのなかでも自己愛の問題への注目がその後は高まってその視点から論じられることが多くなったことにより、これらを自我アイデンティティという用語によって混然と一体化させて扱うメリットは感じられにくくなった側面が考えられる。その一方で、エリクソ

ンがアイデンティティ概念の中核として扱った斉一性や連続性における問題は、自我アイデンティティではなくパーソナル・アイデンティティの次元の問題として、Kernbergらのパーソナリティ障害の中核的特徴の一つに位置づけられるようになっていく。

おそらく、エリクソンが自我アイデンティティの問題を述べるさいに、本来はパーソナル・アイデンティティの次元の特徴である斉一性や連続性をやや過度に強調したことが、彼の概念を分かりづらくしている要因の一つであると考えられる。たしかに、自我アイデンティティが成立してくるためにはそれに先行するパーソナル・アイデンティティの成立が必要であり、そのため自我アイデンティティにも斉一性や連続性が必要となるのは事実であるが、これらは本質的に自我アイデンティティの次元に固有のものとは考えられない。

もちろん、現象としてのアイデンティティの感覚とその混乱、その意義と心理-社会的側面、そしてアイデンティティが原始的な次元から比較的高度な次元までを含んでいることを指摘したエリクソンの慧眼と功績は、今日においても高く評価されるべきものであることに変わりはない。その一方で、上記のような意味で彼のアイデンティティ概念があまりにも包括的であること、「総合的 (synthetic)」ではあっても「統合されている (integrated)」とは言いがたいものであることが、彼の概念が精神分析的な臨床思考において用いられにくくなっている理由の一つであると考えられる。エリクソン以外の論者がアイデンティティという言葉を使うと、決まってアイデンティティの一面だけを述べている形になるという指摘が時折なされるが、これは上記のような極端な包括性からくる当然の帰結であると言える。

彼がアイデンティティ概念のあいまいさを認めつつもこのような包括的な概念化にこだわったのは、一つのまとまった主体として感じられる「私」の感覚（ここではアイデンティティの異なる次元が区別されたりはしない）をとらえようとする彼の現象学的な姿勢の反映でもあったと考えられるが、そのような姿勢は、精神分析的観点の前提である無意識の措定に伴う「主体の疎外」というパラダイムと対極をなすのも事実であろう。ただ、これら対立しあう二つの観点は、必ずしも二者択一的なものにとどまらず、ひとつの弁証法的対立としての意義をもつ可能性も否定できないように思われる。

おわりに

E. H. エリクソンのアイデンティティ概念は、精神分析的理論のなかに明確な位置づけを与えられないまま、精神分析的な文脈では一部を除いて言及されることが少なくなっていると指摘されている (Wallerstein 1998)。本稿では、あいまいとされるエリクソンのアイデンティティ概念の基本的な意味合いについて、とくにこの概念が生まれてきた理論的源流の一つであるタウスクからフェダーンに至る現象学的自我心理学の流れに焦点を当て、それらとの関連という観点から、この概念の問題点と可能性を再検討することを試みた。その結果、これらの流れと共通する『『機能としての自我』と『意識の対象としての自我』との関係』をめぐる問題点と、これらの流れとの不連続に関連した「発達の水準の折り重なり」にともなう混乱を指摘した。

本稿はエリクソンのアイデンティティ概念について、その形成の背景となったと考えられる一部の精神分析理論との関連という視点から検討した。一方で、彼以降に他の精神分析家たちが展開したアイデンティティ論との関係から論じることは本稿ではできなかった。そもそもエリクソンがベーシックなアイデンティティの中核的要素として強調した斉一性や連続性といった特徴は、自我心理学よりはむしろ対象関係論的なスプリッティングの観点から捉えることが臨床的に有用

であり、クライン派やその影響を受けた精神分析家たちが展開しているアイデンティティ論や青年期論から、エリクソンのアイデンティティ概念や青年期論を捉えなおすことが有益であると考えられるが、そのような検討についてはまた別の機会に譲りたい。

参考文献

- Abend S. M. (1974) Problems of identity: Theoretical and clinical applications. *Psychoanalytic Quarterly*, 43(4): 606-37.
- Andreas-Salome, L. (1964) *The Freud Journal*. Basic Books.
- Bonomi, C. (2010) Narcissism as mastered visibility: The evil eye and the attack of the disembodied gaze. *International Forum of Psychoanalysis*, 19: 110-119.
- Brockman, D.D. (2003) *From Late Adolescence to Young Adulthood*. International Universities Press.
- Erikson, E.H. (1950) *Childhood and Society*. Norton. (仁科弥生訳『幼児期と社会1・2』みすず書房 1977, 1980年)
- Erikson, E.H. (1959) *Identity and the Life Cycle*. International Universities Press. (西平・中島訳『アイデンティティとライフサイクル』誠信書房 2011年)
- Erikson, E.H. (1968) *Identity: Youth and Crisis*. Norton, Paperback edition. (岩瀬庸理訳『主体性——青年と危機』北望社 1969年)
- Erikson, E.H. (1987) *A Way of Looking at Things: Selected Papers of Erik H. Erikson*. Norton.
- Federn, P. (1926) Some variations in ego feeling. In: *Ego Psychology and the Psychoses*. Basic Books. 1953.
- Federn, P. (1927) Narcissism in the structure of the ego. In: *Ego Psychology and the Psychoses*. Basic Books. 1953.
- Federn, P. (1929a) On the distinction between healthy and pathological narcissism. In: *Ego Psychology and the Psychoses*. Basic Books. 1953.
- Federn, P. (1929b) The ego as subject and object in narcissism. In: *Ego Psychology and the Psychoses*. Basic Books. 1953.
- Federn, P. (1943) Psychoanalysis of psychoses. In: *Ego Psychology and the Psychoses*. Basic Books. 1953.
- Federn, P. (1953) *Ego Psychology and the Psychoses*. Basic Books.
- Freud, S. (1930) Address to the Society of B'nai B'rith. *Standard Edition XX*, 271-274. (石田雄一訳「ブナイ・ブリース協会会員への挨拶」『フロイト全集19』岩波書店 2010年)
- Freud, S. (1930) Civilization and its discontents. *Standard Edition XXI*, 57-146. (嶺・高田訳「文化の中の居心地悪さ」『フロイト全集20』岩波書店 2011年)
- Friedman, L.J. (1998) Erik Erikson's critical themes and voices: The task of synthesis. In: Wallerstein & Goldberg (ed.). *Ideas and Identities: The Life and Work of Erik Erikson*. International Universities Press.
- Friedman L.J. (1999) *Identity's Architect: A Biography of Erik H. Erikson*. Scribner. (やまだようこ・西平直監訳『エリクソンの人生——アイデンティティの探究者 上・下』新曜社 2003年)
- Grinberg, L. & Grinberg, R. (1974a) Pathological aspects of identity in adolescence. *Contemporary Psychoanalysis*, 10: 27-40.
- Grinberg, L. & Grinberg, R. (1974b) The problem of identity and the psychoanalytical process. *International Review of Psycho-Analysis*, 1:499-507.
- Jacobson, E. (1964) *The Self and the Object World*. International Universities Press. (伊藤洸訳『自己と対象世界』岩崎学術出版社 1981年)
- Kernberg, O.F. (2006) Identity: Recent findings and clinical implications. *Psychoanalytic Quarterly*, 75: 969-1003.
- Lunbeck, E. (2014) *The Americanization of Narcissism*. Harvard University Press.
- 小此木啓吾 (1985a) 『現代精神分析の基礎理論』弘文堂
- 小此木啓吾 (1985b) 『精神分析の成り立ちと発展』弘文堂

- Rapaport, D. (1959) A historical survey of psychoanalytic ego psychology. In: Erikson E.H. *Identity and the Life Cycle*. International Universities Press. (小此木啓吾訳「精神分析的自我心理学の歴史的展望」『自我同一性——アイデンティティとライフサイクル』誠信書房 1973年)
- Roazen, P. (1968) *Brother Animal: The Story of Freud and Tausk*. Alfred Knopf Inc. (小此木啓吾訳編『ブラザー・アニマル』誠信書房 1987年)
- Roazen, P. (1969) Victor Tausk's contribution to psychoanalysis. *Psychoanalytic Quarterly*, 38: 349-353.
- Roazen, P. (1975) *Freud and His Followers*. Alfred Knopf Inc. (岸田秀他訳『フロイトと後継者たち 上・下』誠信書房 1988年)
- Rosenfeld, H. (1987) *Impasse and Interpretation*. Tavistock. (神田橋條治監訳『治療の行き詰まりと解釈——精神分析療法における治療的/反治療的要因』誠信書房 2001年)
- Strachey, J. (1961) Editor's introduction to "The ego and the id". In: *Standard Edition* XIX, 3-11. (北山修監訳『フロイト全著作解説』人文書院 2005年)
- Tausk, V. (1919/1933) On the origin of the "influencing machine" in schizophrenia. *Psychoanalytic Quarterly*, 2:519-556.
- Wallerstein, R.S. (1996) The life and work of Erik Erikson. *Psychoanalytic Contemporary Thought*, 19: 164-178.
- Wallerstein, R.S. (1998) Erikson's concept of ego identity reconsidered. *Journal of American Psychoanalytic Association*, 46(1): 229-47.
- Wallerstein R.S. (2014) Erik Erikson and his problematic identity. *Journal of American Psychoanalytic Association*, 62(4): 657-75.
- Weiss, E. (1953) Introduction. In: Federn, P. *Ego Psychology and the Psychoses*. Basic Books. 1953.
- Weiss, E. (1966) Paul Federn: The theory of the psychosis. In: Alexander, Eisenstein & Grotjahn (eds.) *Psychoanalytic Pioneers*. Basic Books. 1966.

腹筋呼吸法が動画視聴によるストレス反応に およぼす影響

麓 正 樹

Effect of Voluntary Abdominal Breathing on Stress Responses Induced by Watching a Movie Clip

FUMOTO, Masaki

Abstract

Since slow breathing ranks among techniques to achieve appropriate levels of arousal prior to athletic training or competition, we evaluated how voluntary abdominal breathing (VAB) affected stress responses induced by watching a movie clip. In our earlier studies, VAB is characterized by the voluntary, prolonged contraction of abdominal muscles during expiratory phase. In this study, participants performed VAB for 15 min with an expiratory period of 9–12 s and inspiratory period of 6–8 s. Following VAB, participants watched a movie clip to stimulate stress responses, which earlier findings characterized as inducing a 10–15 mmHg increase in blood pressure. During VAB, we evaluated level of arousal with an electroencephalogram (EEG) and measured prefrontal activity in terms of total hemoglobin (tHb) level using near infrared spectroscopy (NIRS). We measured blood pressure, heart rate, level of arousal, and the visual analog scale (VAS) of perceived stress as stress-induced responses. As a result, during VAB, EEG alpha2 band power and tHb level increased compared with pre-VAB levels. By contrast, blood pressure, heart rate, and both EEG alpha and beta power while watching the clip did not change. For stress-induced responses without VAB, EEG beta power and blood pressure tended to increase in participants as they watched the clip. Lastly, the VAS of perceived stress without VAB tended to be higher than that following VAB. Altogether, considering previous findings and our results, stress responses induced by watching a movie clip without VAB occurred as previously reported, whereas the lack of change in blood pressure, heart rate, and both EEG alpha and beta power possibly resulted from the inhibition of stress responses by VAB.

Key words: voluntary abdominal breathing, stress-induced responses, electroencephalogram, near infrared spectroscopy

キーワード：腹筋呼吸法，ストレス反応，脳波，近赤外分光法

目 次

1. 緒言
2. 方法
 - 2.1 被験者
 - 2.2 脳波，眼電図，心電図および筋電図の記録
 - 2.3 脳波解析
 - 2.4 血圧
 - 2.5 脳血流量の測定と解析
 - 2.6 ストレスの主観的評価（Visual analog scale：VAS）
 - 2.7 腹筋呼吸法
 - 2.8 動画視聴
 - 2.9 実験の流れと測定および解析対象区間
 - 2.10 動画視聴のみを行った場合の実験の流れと測定および解析区間
 - 2.11 統計処理
3. 結果
 - 3.1 腹筋呼吸法に伴う脳波の変化
 - 3.2 腹筋呼吸法に伴う総ヘモグロビンレベルの変化
 - 3.3 腹筋呼吸法後の動画視聴中の血圧と心拍数
 - 3.4 動画視聴のみの場合の血圧と心拍数および脳波の変化
 - 3.5 VASの変化
4. 考察
 - 4.1 腹筋呼吸法中の脳波パワーと総ヘモグロビンレベルの変化
 - 4.2 腹筋呼吸法中の α 波パワーの変化の背景
 - 4.3 腹筋呼吸法中の前頭前野総ヘモグロビンレベルの変化の背景
 - 4.4 腹筋呼吸法後の動画視聴中の血圧，心拍数，脳波の変化
 - 4.5 腹筋呼吸法後の動画視聴中の血圧，心拍数，脳波の変化の背景
5. まとめ

1. 緒 言

スポーツの試合前の高すぎる緊張は，効率的でスムーズな運動を妨げると考えられている。この緊張はストレス反応の一種と考えられ，緊張が高い状態では血圧や心拍数の増加などとともに，脳の覚醒レベルが高まっている。すなわち，ストレス刺激によって視床下部を介して交感神経系が刺激され，様々な求心性線維が活性化して覚醒レベルが上昇すると考えられる（Hebb, 1972）。覚醒レベルは，認知機能や運動遂行機能など（Polich *et al.*, 1997, Masaki *et al.*, 2000），スポーツパフォーマンスに必要となる脳機能に影響することが知られている。したがって，スポーツの試合前などでは高まりすぎた覚醒レベルを適度なレベルに戻すための，リラクセーションが重要となってくる。

高まりすぎた覚醒レベルを呼吸法が適度に低くする，というリラクセーション効果が，スポーツ心理学などにおいて提唱されているが（徳永，2005），呼吸法の効果についてのメカニズムや呼

吸法の行い方などについては説明すべき点が多い。

我々は、座禅やヨガなどで行われる腹筋を意識したゆっくりとした呼吸（腹筋呼吸法）を行うことにより、心理状態の改善と腹筋呼吸法中に脳波の α 波が増加する結果を得てきた（Fumoto *et al.*, 2004, Yu *et al.*, 2011）。すなわち、腹筋呼吸法にはリラックスして緊張や不安が少なく活気の高い状態を導く可能性が示唆された。このような腹筋呼吸法後の身体的・心理的状态は、腹筋呼吸法後には精神的もしくは肉体的なストレス刺激を受けても、ストレス反応が出現しにくい状態と考えられる。

Child *et al.*, 2014は、メンタルストレスが心筋の活動電位に及ぼす影響を調べるため被験者に動画を視聴させた。彼らの一連の研究では、動画の一部分の4分30秒間を視聴すると、ストレス反応として血圧が10～15 mmHg上昇すると報告されている。

本研究では、腹筋呼吸法がストレス反応に及ぼす影響を調べるため、被験者に対して腹筋呼吸法後に動画視聴によるメンタルストレスを与え、脳波、血圧、心拍数の変化を調べた。また、腹筋呼吸法中の脳機能の変化を調べるために、脳波に加えて前頭前野の脳血流の変化を近赤外分光法を用いて検討した。

2. 方法

2.1 被験者

被験者は健常成人9名を対象とした（男2名、女7名、 23 ± 7 才）。実験に先立ち、被験者にはあらかじめ本研究の目的、方法及び実験に伴う苦痛、危険性について十分な説明を行った後、書面において本研究に参加することへの同意を得た。本研究は東京国際大学倫理委員会の承認を得た上で行われた。

2.2 脳波、眼電図、心電図および筋電図の記録

両耳朶を基準として脳波を単極導出するため、国際10-20法に従い、頭皮上12箇所（F3, Fz, F4, C3, Cz, C4, P3, Pz, P4, O1, Oz, O2）に電極を装着した。瞬きに伴う垂直眼球運動が脳波に影響するため、眼電図の記録用に、右眼窩の上縁と下縁に電極を装着した。心電図記録のために右の鎖骨、および左の第8肋骨と前液下線が交わる部分に電極を装着した。腹筋呼吸法に伴う腹筋の収縮状況を、筋電図として被験者にフィードバックするために、臍と左の上前腸骨棘の中間に3 cm間隔で電極を装着した。脳波と眼電図および心電図は時定数3.2秒、高周波フィルタ60 Hzで、筋電図は時定数0.03秒、高周波フィルタ1.5 KHzで導出した（Biotop 6R12, NEC Sanei, Japan）。データはサンプリング周波数200 HzでA/D変換し、コンピューターのハードディスク装置に記録した。なお、電極装着前には該当箇所をアルコール綿や乾いたカット綿などによって拭き、電極抵抗を十分に落とした上で電極を装着した。

2.3 脳波解析

ハードディスクに記録された脳波は、デジタルフィルター処理（バンドパス：0.5-60 Hz、減衰率：20dB、次数：250 Hz）した後に（図1）、筋電図や眼電図などによるアーチフェクトが混入している区間を視覚的に除外しながら解析した。後述するように（# 2.9）、腹筋呼吸法前、腹筋呼吸法中、動画視聴中、動画視聴後に、2分間の解析ブロックを合計6ブロック設定した。1ブロック内の解析区間は1区間2.56秒であり、高速フーリエ変換によってスペクトルパワー算出した後に、

1ブロックにおける平均を求めた。このようにして得られた平均のスペクトルパワーからそれぞれ θ 波 (4 ~ 8 Hz), $\alpha 1$ 波 (8 ~ 10 Hz), $\alpha 2$ 波 (10 ~ 13 Hz), $\beta 1$ 波 (13 ~ 20 Hz), $\beta 2$ 波 (20 ~ 30 Hz) 帯域の脳波パワーの面積を求め、4 ~ 30 Hzまでの面積に対する割合を算出した (Atamap II, Kissei Comtec, Japan)。その後、全導出部位のデータを帯域ごとに平均して、各被験者の脳波パワー値とした (Schneider *et al.*, 2009)。

2.4 血圧

血圧は、上腕にカフを装着し、自動血圧計 (EBP-330, Minato, Japan) を用いて測定した。血圧の測定と同時に脈拍数も計測された。

2.5 脳血流量の測定と解析

脳血流の測定には近赤外分光法 (near infrared spectroscopy : NIRS) (Hot121, Hitachi, Japan) を用いた。脳波電極の装着に用いられるFpzを中心として、左右の前額部に送光と受光プローブが約4 cm間隔となるように調整された、専用の装置を装着した。送光プローブから照射された近赤外光の波長は810 nmであり、左右の前額部から、2つのプローブ間隔を直径とした深さ約2 cmの深さまでの総ヘモグロビン (total Hemoglobin : tHb) レベルをサンプリング周波数10 Hzで測定した。tHbレベルにより脳神経活動の上昇にともなう脳血流の上昇を評価することが可能とされている (福田, 2009)。我々のこれまでの研究では腹筋呼吸法により、前頭前野の神経細胞の活性化を示唆する、前額部の脳血流の局所的変化が得られている (Yu *et al.*, 2011)。

NIRSによって得られたデータはtHbの絶対値ではなく、相対値であるために被験者内でのチャンネル間の違い、同じチャンネルの被験者間での違い、異なる被験者のデータを平均して群間の評価を行う、などの処理は不可能とされている (Fumoto *et al.* 2010)。そのため、測定区間全体のデータから得られた平均値と標準偏差値により、個々のデータをz変換し (図4)、z変換後のデータを用いて、腹筋呼吸法前と腹筋呼吸法中のtHbレベルの変化を比較した。

2.6 ストレスの主観的評価 (Visual analog scale : VAS)

本研究では100 mmの水平な直線において、左端が“ストレスを全く感じない”，右端が“耐えられないストレスを感じている”として、受けているストレスの度合いに応じて直線上の任意の場所に線を入れさせ、左端からの長さを測定した (McCormack *et al.*, 1988)。

2.7 腹筋呼吸法

被験者は、我々の先行研究に基づいて腹筋呼吸法を実施した (Yu *et al.*, 2011, Fumoto *et al.*, 2004)。被験者は実験用の安楽椅子に座り、呼気が9 ~ 12秒、吸気は6 ~ 8秒を目安に、苦しさを感ぜないペースでゆっくりと深い呼吸を行った。呼気における腹筋の確実な収縮を促すために、被験者の前方約1 m下方においたオシロスコープの画面上には腹筋筋電図がフィードバックされた。被験者は腹筋の収縮に伴う筋電図が呼気中に漸増するように確認しながら15分間継続した。

2.8 動画視聴

被験者の前方約1 mに置かれたモニター (37 cm × 64 cm) に動画が提示された。モニターの下方には、腹筋筋電図をフィードバックするためのオシロスコープが設置してある。被験者はイヤホンから動画の音声を聞いた。

動画は先行研究 (Child *et al.*, 2014) に基づき、パーティカル・リミットという英語字幕版の山岳映画を用いた (マーティン・キャンベル, 2000)。この中でも動画開始後59分50秒～1時間4分50秒までの5分間を被験者に視聴させた。

2.9 実験の流れと測定および解析対象区間

本実験では、測定装置の装着後に、記録が安定したことを確認したうえで測定を行った。被験者は、安静状態を5分維持し、その後15分間腹筋呼吸法を行った。腹筋呼吸法後には続けて動画視聴を5分行い、その後安静状態を5分間維持した。

血圧と心拍数測定のタイミングは、自動血圧計を用いて安静維持の開始直後と安静維持の終了直前、腹筋呼吸法開始後5分、10分、15分の時点、動画視聴開始後2分30秒、動画視聴終了直前、動画視聴終了後の安静維持終了直前の8回であった。

脳波パワーと脳血流の解析ブロックは、血圧と心拍数の測定中を除いて、腹筋呼吸法開始前の安定した2分間、腹筋呼吸法開始後の1～3分、6～8分、11～13分、動画視聴中の2分間 (動画視聴開始後3分～5分)、動画視聴終了後の安定した2分間の6ブロックであった (図3)。

動画視聴によるストレスの主観的評価は、VASを用いて動画視聴後の安静維持が終了した直後に行わせた。

2.10 動画視聴のみを行った場合の実験の流れと測定および解析区間

腹筋呼吸法と動画視聴を行った被験者の中から3名の被験者は、腹筋呼吸法を行わずに、動画視聴のみを行う実験にも参加した。解析対象となる測定項目は脳波、血圧、心電図およびVASであった。

被験者は、測定装置の装着後記録が安定した後に、安静状態を10分間維持し、その後5分間の動画視聴を行い、動画視聴終了後に安静状態を5分間維持した。

血圧と心拍数測定のタイミングは、安静維持の開始直後と安静維持開始後5分、動画視聴開始直後、動画視聴開始後2分30秒、動画視聴終了直前、動画視聴終了後の安静維持終了後の6回であった。

脳波解析は2名の被験者について行った。解析区間は安静維持開始後2～4分、5分30秒～7分30秒、動画視聴開始後30秒～2分30秒と3～5分、動画視聴終了後の3～5分であった。

ストレスの主観的評価はVASによって行った。評価のタイミングは動画視聴後の安静維持終了直後であった。

2.11 統計処理

脳波パワーについてはまず、腹筋呼吸法の脳波への影響を検討するために、先行研究 (Fumoto *et al.*, 2004, Yu *et al.*, 2009) をふまえ、腹筋呼吸法中の脳波パワーの最大値について、対応のあるt検定を用いて腹筋呼吸法前と比較した。また、腹筋呼吸法の影響を受けていると考えられる腹筋呼吸法後の動画視聴中の脳波パワーについては、腹筋呼吸法の影響を受けていない、腹筋呼吸法前の安静時とを比較するために、対応のあるt検定を用いた。tHb レベルについては、先行研究をふまえ (Yu *et al.*, 2009)、腹筋呼吸法の前頭前野への影響を確認するため、腹筋呼吸法前と腹筋呼吸法中の比較について対応のあるt検定を行った。血圧、心拍数については、腹筋呼吸法の影響を受けていると考えられる動画視聴中と、腹筋呼吸法の影響を受けていない腹筋呼吸法前を比較するために、対応のあるt検定を用いた。有意水準は5%未満とした。統計的なデータは平均値と標

準誤差で示した。

3. 結果

3.1 腹筋呼吸法に伴う脳波の変化

図1には腹筋呼吸法中の脳波と腹筋筋電図の記録例を示した。腹筋の筋電図は呼吸相において明瞭に記録され、腹筋呼吸中のどの時間帯にもほぼ同様のパターンの腹筋筋電図が出現していた。腹筋呼吸法の開始前には低振幅速波が観察されるが(図1A), 腹筋呼吸法を継続すると、周波数がより遅く、振幅のより大きい脳波が観察されるようになった(図1B)。このような脳波は腹筋呼吸法が進むにつれてより高頻度に観察されるようになった(図1C, D)。

図2には1名の被験者の脳波パワーの時間経過を示した。腹筋呼吸法前と比べて θ 波帯域のパワーは腹筋呼吸法中に減少し、動画視聴中に増加する傾向があった。 $\alpha 1$ 帯域と $\alpha 2$ 帯域の脳波パワーは腹筋呼吸法前と比べて腹筋呼吸法中に増加する傾向があった。 $\beta 1$ 帯域と $\beta 2$ 帯域の脳波パワーは腹筋呼吸法前と比べて腹筋呼吸法中に減少傾向となり、動画視聴中には腹筋呼吸法前と同様であった。

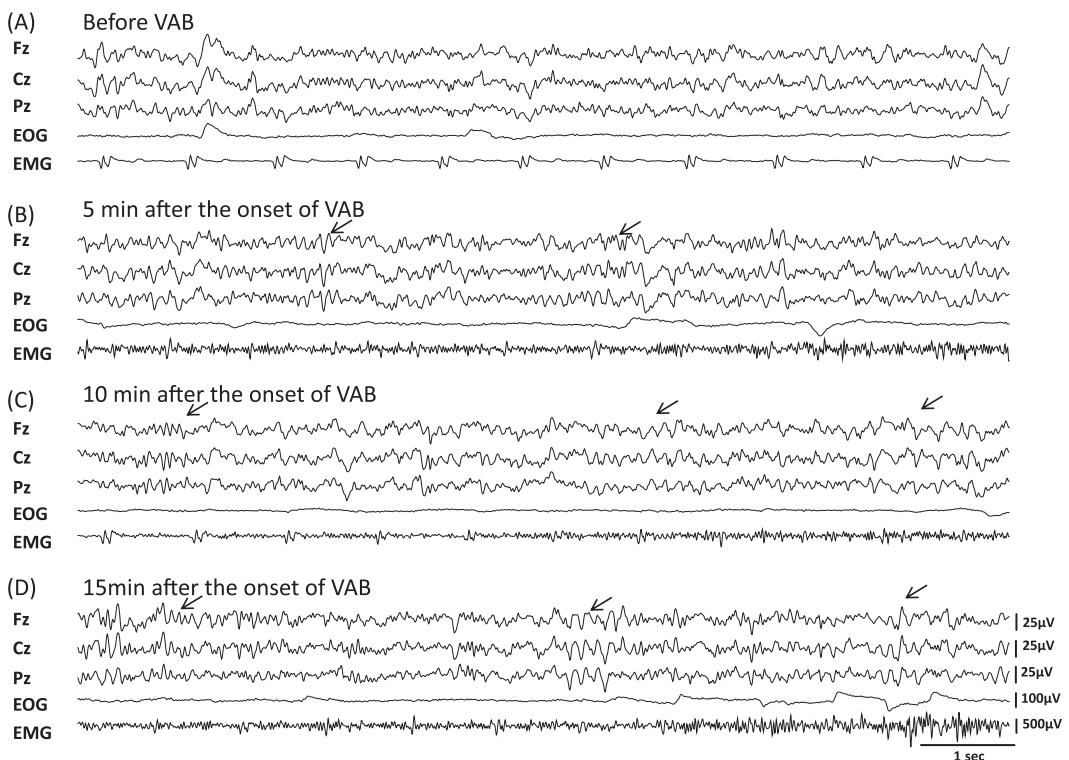


図1 腹筋呼吸法中の脳波と腹筋筋電図の記録例

腹筋を意識した呼吸法(腹筋呼吸法(Voluntary abdominal breathing: VAB))の開始前(A), 開始後5分(B), 10分(C), 15分(D)の時点での脳波, 眼電図, 腹筋筋電図の記録例が示されている。矢印は振幅がより高く、周波数のより低いリズムカルな脳波の出現を示している。呼吸は腹筋筋電図の持続時間から分かるように非常にゆっくりとしたペースで行われている。

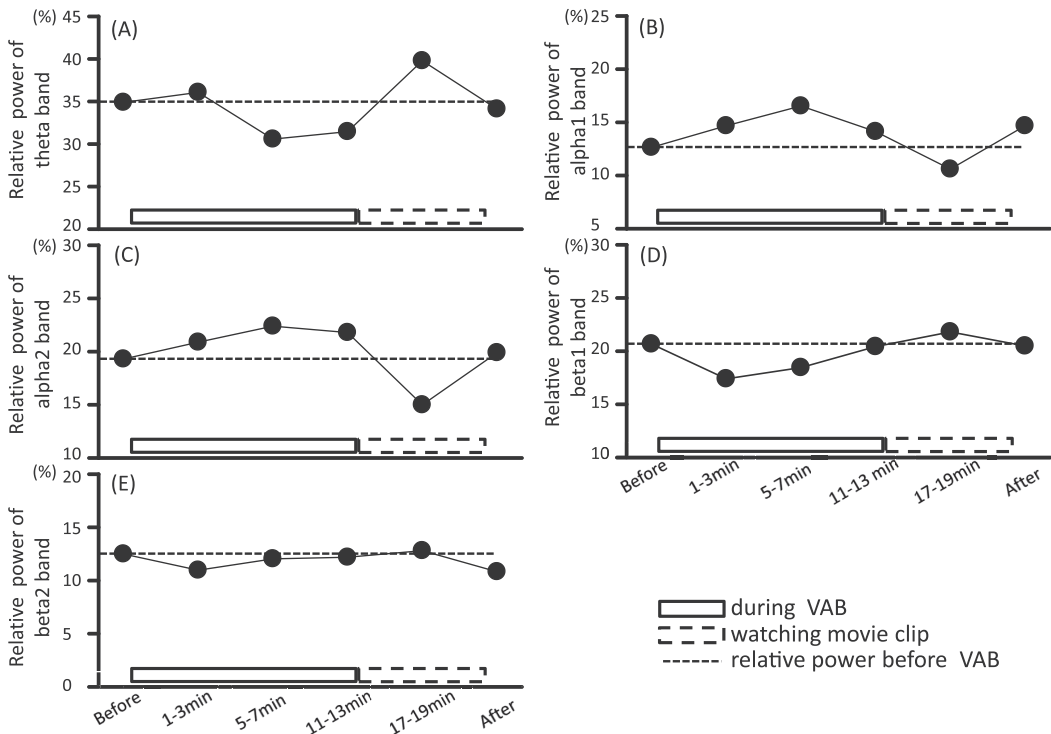


図2 一人の被験者の脳波パワーの時間経過

実線の四角は腹筋呼吸法が行われている時間帯、点線の四角は動画を視聴している時間帯である。点線は呼吸法を行う前の脳波パワーのレベルである。(A)、(B)、(C)、(D)、(E)はそれぞれ、 θ 波帯域、 $\alpha 1$ 波帯域、 $\alpha 2$ 波帯域、 $\beta 1$ 波帯域、 $\beta 2$ 波帯域のパワーの時間経過である。

図3には、腹筋呼吸法前と腹筋呼吸法中の脳波パワーの統計的な解析結果を示した。 θ 波帯域 ($t(8) = -0.16, p = 0.88$) と $\alpha 1$ 波帯域 ($t(8) = -1.46, p = 0.18$) では腹筋呼吸法前と最中に変化はなかった。 $\alpha 2$ 波帯域については腹筋呼吸法前と比べて腹筋呼吸法中に増加した ($t(8) = -6.98, p < 0.01$)。 $\beta 1$ 波帯域 ($t(8) = 5.31, p < 0.01$) と $\beta 2$ 波帯域 ($t(8) = 3.62, p < 0.01$) については腹筋呼吸法前と比べて腹筋呼吸法中に減少した。

腹筋呼吸法後の動画視聴中の脳波パワーの統計的な解析結果については、腹筋呼吸法開始前と比べて θ 波帯域が増加 ($t(8) = -3.5, p < 0.01$) したものの、 $\alpha 1$ 波帯域 ($t(8) = 1.1, p = 0.31$)、 $\alpha 2$ 波帯域 ($t(8) = 1.8, p = 0.12$)、 $\beta 1$ 波帯域 ($t(8) = 0.58, p = 0.58$) と $\beta 2$ 波帯域 ($t(8) = -0.02, p = 0.98$) に変化はなかった。

3.2 腹筋呼吸法に伴う総ヘモグロビンレベルの変化

図4には一人の被験者の腹筋呼吸法中に前額部から得られたtHbレベルの変化を示した。左右の前額部とも、tHbレベルは腹筋呼吸法開始後ゆっくりと増加し、腹筋呼吸法開始後5～10分でピークとなり、その後減少傾向にあるものの15分まで高いレベルを維持した。tHbレベルは腹筋呼吸法終了後に漸減し動画視聴後には元のレベルに回復した。

図5には左右の前額部から得られたtHbレベルについて、腹筋呼吸法前と最中を統計的に比較し

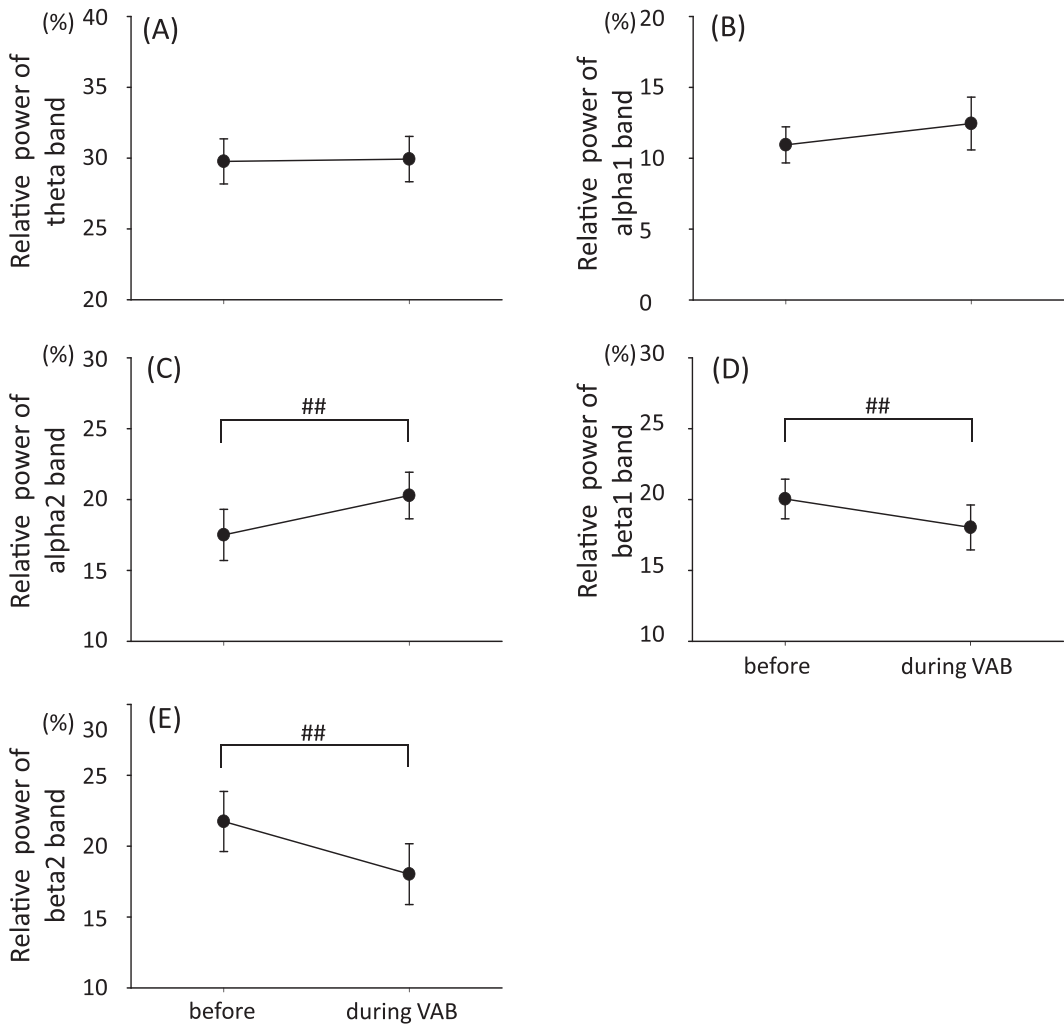


図3 腹筋呼吸法前と腹筋呼吸法中の脳波パワーの比較

(A), (B), (C), (D), (E) はそれぞれ, θ 波帯域, $\alpha 1$ 波帯域, $\alpha 2$ 波帯域, $\beta 1$ 波帯域, $\beta 2$ 波帯域のパワーの比較である. ## : $p < 0.01$

た結果を示した。左の前額部 ($t(8) = -3.11, p < 0.05$) と右の前額部 ($t(8) = -3.23, p < 0.05$) から得られたtHbレベルは両者ともに腹筋呼吸法中の方が大きかった。

3.3 腹筋呼吸法後の動画視聴中の血圧と心拍数

図6には血圧(収縮期血圧と拡張期血圧)と心拍数について腹筋呼吸法前と動画視聴中を統計的に比較した結果を示した。血圧については収縮期血圧 ($t(8) = 0.56, p = 0.59$) と拡張期血圧 ($t(8) = -1.68, p = 0.74$) ともに腹筋呼吸法前と動画視聴中に変化はなかった。心拍数についても腹筋呼吸法前と動画視聴中に差は得られなかった ($t(8) = 0.74, p = 0.48$)。

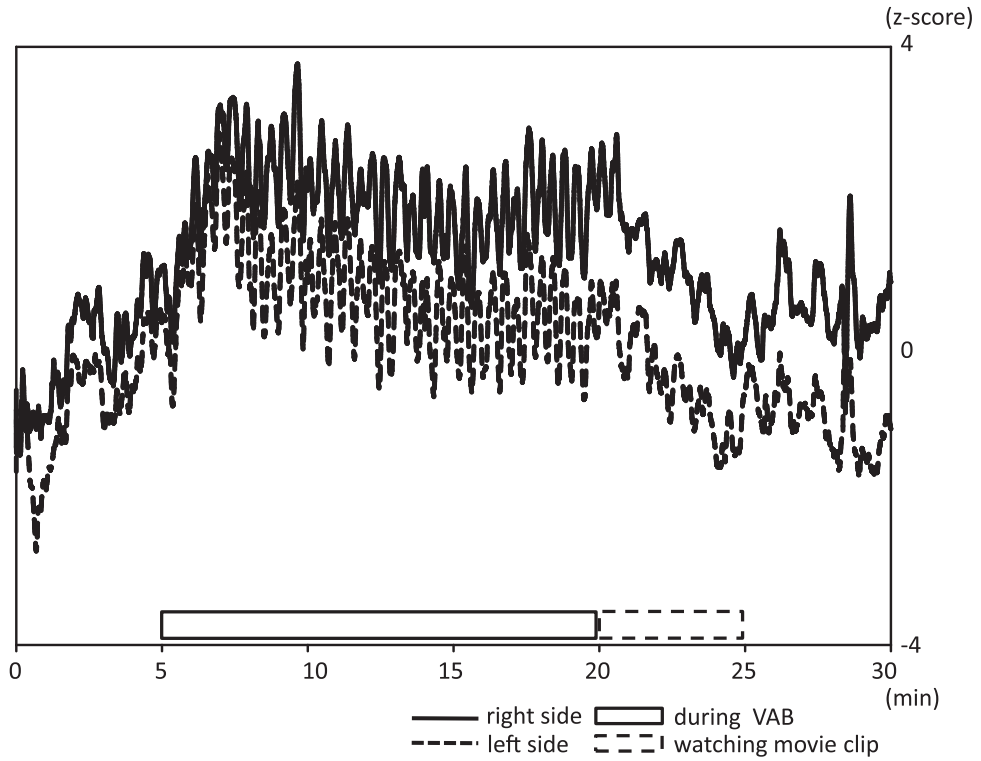


図4 腹筋呼吸法に伴う総ヘモグロビンレベルの記録例

実線の四角は腹筋呼吸法が行われている時間帯、点線の四角は動画を視聴している時間帯である。グラフの実線は右、点線は左の前額部から記録された総ヘモグロビンレベルの時間経過である。

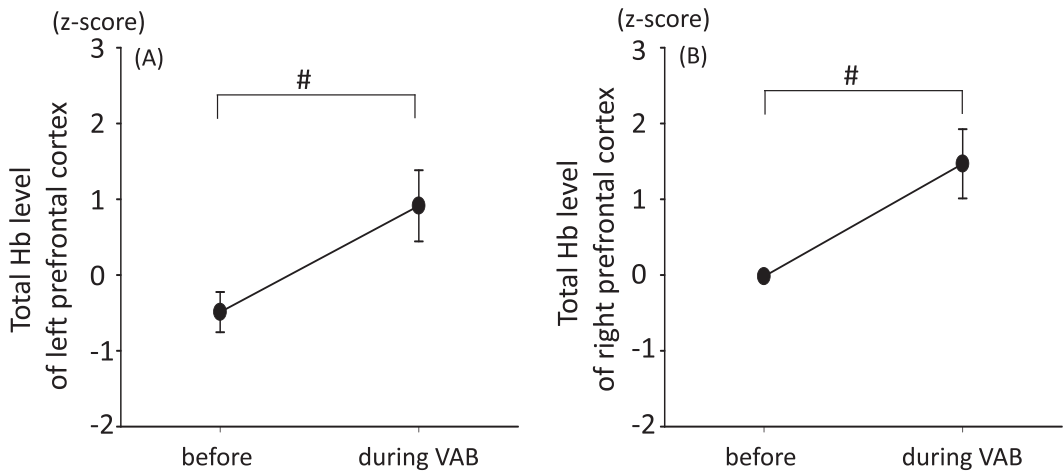


図5 腹筋呼吸法前と腹筋呼吸法中の総ヘモグロビンレベルの比較

(A), (B) はそれぞれ、左と右の前額部からの測定された総ヘモグロビンレベルを解析したものである。#: $p < 0.05$

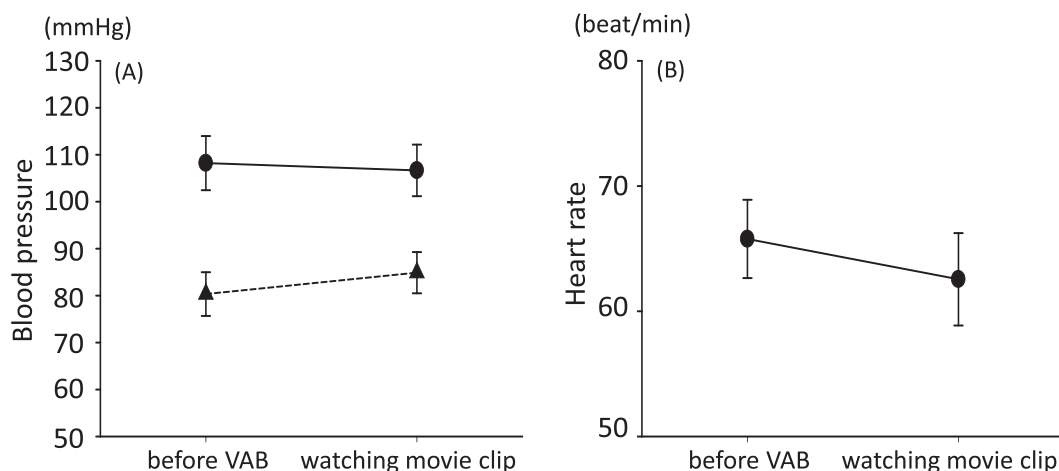


図6 腹筋呼吸法前と動画視聴中の血圧と心拍数の比較

(A) は血圧の比較であり、丸が収縮期血圧を、三角が拡張期血圧を表す。(B) は心拍数の比較である。

3.4 動画視聴のみの場合の血圧と心拍数および脳波の変化

3名の被験者について、腹筋呼吸法を行わずに動画視聴のみを実施し、血圧と心拍数を測定した結果、収縮期血圧については動画視聴前 (108.3 ± 11.1 mmHg) と比べて動画視聴中 (124.0 ± 12.9 mmHg) に高くなる傾向があり、拡張期血圧についても動画視聴前 (77.3 ± 7.6 mmHg) と比べて動画視聴中 (92.7 ± 11.1 mmHg) に高くなる傾向があった。

心拍数については、動画視聴前 (63 beat/min) と動画視聴中 (64.7 beat/min) に変化の傾向はなかった。

2名の被験者から得られた脳波パワーについては、 θ 波帯域 (動画視聴前 ($30.6 \pm 5.9\%$), 動画視聴中 ($31.3 \pm 6.3\%$)) に動画視聴前と比べて動画視聴中に変化の傾向はなく、 $\alpha 1$ 波帯域 (動画視聴前 ($15.3 \pm 0.8\%$), 動画視聴中 ($11.0 \pm 1.5\%$)) と $\alpha 2$ 波帯域 (動画視聴前 ($21.0 \pm 1.3\%$), 動画視聴中 ($19.9 \pm 0.2\%$)) については動画視聴前と比べて動画視聴中に減少傾向があり、 $\beta 1$ 波帯域 (動画視聴前 ($20.7 \pm 3.9\%$), 動画視聴中 ($23.7 \pm 5.3\%$)) と $\beta 2$ 波帯域 (動画視聴前 ($12.4 \pm 0.1\%$), 動画視聴中 ($14.1 \pm 0.3\%$)) については、動画視聴前と比べて動画視聴中に増加する傾向があった。

3.5 VASの変化

腹筋呼吸法を行った後のストレスの主観的評価は 52 ± 7 mm、腹筋呼吸法を行わなかった場合は 66 ± 7 mm であり、ストレスの主観的評価は腹筋呼吸法を行った後の方が低い傾向にあった。

4. 考 察

本研究では、我々の先行研究に基づく腹筋呼吸法が、腹筋呼吸法後の動画視聴によるストレス刺激に対するストレス反応におよぼす影響について検討した。腹筋呼吸法中には腹筋呼吸法前と比べて $\alpha 2$ 帯域の脳波パワーが増加し、前額部の総ヘモグロビンレベルが増加した。一方、腹筋呼吸法後の動画視聴中の血圧、心拍数は変化しなかった。腹筋呼吸法後の動画視聴中の脳波パワーについても α 波帯域と β 波帯域については腹筋呼吸法前と比べて変化はなかった。腹筋呼吸法を実

施せずに動画のみを視聴させた場合、脳波の α 波パワーの減少傾向と β 波パワーの上昇傾向および血圧の上昇傾向があった。また、腹筋呼吸法を実施せずに動画のみを視聴させた場合のストレスの主観的評価（VAS）は、腹筋呼吸法を実施した場合よりも上昇する傾向があった。

4.1 腹筋呼吸法中の脳波パワーと総ヘモグロビンレベルの変化

本研究では、腹筋呼吸法中には $\alpha 2$ 帯域の脳波パワーが増加した。我々の先行研究（Fumoto *et al.*, 2004）では、開眼状態で行われる腹筋呼吸法中にはlow-frequency α 波（本研究の $\alpha 1$ 波）帯域とhigh-frequency α 波（本研究の $\alpha 2$ 波）帯域の脳波パワーの両者が増加するが、閉眼状態で行われる腹筋呼吸法の最中には、low-frequency α 波帯域の脳波パワーはむしろ減少し、high-frequency α 波帯域のみが増加することを報告している。本研究でも、 $\alpha 1$ 波帯域の脳波パワーは増加傾向ではあったが、 $\alpha 2$ 波帯域の増加が統計的に有意であったことから、腹筋呼吸法に特徴的な脳波の変化は $\alpha 2$ 波帯域のパワーの増加として特徴付けられると考えられた。

本研究の腹筋呼吸法中には前額部のtHbレベルが増加した。Yu *et al.*, 2011は腹筋呼吸法中には前額部腹側の酸素化ヘモグロビン（oxyHb）レベルが局所的に増加する結果を得た。この結果は、腹筋呼吸法により前頭前野が活性化して血流が増加したため、oxyHbレベルが増加したと解釈された。神経活動増加に伴う大脳皮質の血流増加は、NIRSを用いた場合、oxyHbとtHbレベルの増加および脱酸素化ヘモグロビンレベルの減少として観察される（Hoshi *et al.*, 2011, Fumoto *et al.*, 2010）。したがって、脳血流の変化の統計的な評価に際してはoxyHbとtHbレベルが用いられることが多い。本研究では、tHbレベルを測定して腹筋呼吸法中に増加する結果を得た。プローブを装着した場所は、先行研究（Yu *et al.*, 2011）において局所的にoxyHbレベルが増加した腹側前頭前野に含まれる場所であった。したがって、本研究におけるtHbの腹筋呼吸法中の増加は、腹筋呼吸法により前頭前野が活性化し、脳血流が増加したことを反映すると考えられる。

4.2 腹筋呼吸法中の α 波パワーの変化の背景

腹筋呼吸法中の $\alpha 2$ 波帯域のパワー増加の背景にはどのような生理学的な機序があるのであろうか？ Yu *et al.*, 2009は、腹筋呼吸法中に脳波の α 波パワーの増加を得たことに加え、腹筋呼吸法後に血液中セロトニンレベルが増加する結果を得た。Nakatani *et al.*, 2008は、動物モデルにおいて、血液中セロトニンレベルの増加が脳内セロトニンレベルの増加を反映する結果を得ているため、Yu *et al.*, 2009の腹筋呼吸法による血液中セロトニンレベルの増加は脳内セロトニンレベルの増加を反映すると考えられた。

脳内セロトニンレベルの増加が脳波の徐波化に関係する可能性を示唆する結果が報告されている。Jones and Muhlethaler, 1998は、動物モデルにおいて前脳基底部にセロトニンを微量注入すると、大脳皮質活動の減少が起こることを確認している。前脳基底部には大脳皮質活動の増加に関係するアセチルコリン神経があり、大脳皮質の広範な領域に投射している。したがって、前脳基底部へのセロトニンの微量注入による大脳皮質活動の減少には、アセチルコリン神経の抑制が関わることが示唆される。本研究では $\alpha 2$ 波帯域のパワーの増加と $\alpha 1$ 波帯域の脳波パワーの増加傾向に加え、 β 波帯域のパワーが減少する結果を得た。このように、脳波の相対的に高い周波数帯のパワーが減少し、より低い周波数帯のパワーが増加する結果は、大脳皮質活動の減少を反映すると考えられ、脳内セロトニンレベルの増加による、前脳基底部アセチルコリン神経活動の減少を示唆する。

4.3 腹筋呼吸法中の前頭前野総ヘモグロビンレベルの変化の背景

上述したように、腹筋呼吸法中に起こったtHbレベルの増加は、前頭前野の活性化に伴う血流増加を示唆する。前頭前野は脳幹の背側縫線核にあるセロトニン神経と双方向性に線維連絡していることがHajos *et al.*, 1998によって示されている。最近のGonçalves *et al.*, 2009の研究でも、腹側前頭前野から背側縫線核に密な投射があることが報告されていることから、前頭前野の活性化が背側縫線核のセロトニン神経を活性化し、脳波の α 2波パワーの増加と β 波パワーの減少に関与した可能性が示唆される。

4.4 腹筋呼吸法後の動画視聴中の血圧、心拍数、脳波の変化

腹筋呼吸法後にストレス刺激として与えられた動画の視聴中には、血圧と心拍数および α 波帯域と β 波帯域の脳波パワーは、腹筋呼吸法前と比べて変化しなかった。先行研究では、本研究で用いた動画により収縮期血圧が10～15 mmHg、心拍数が10～15 beat/min増加すると報告されている (Child *et al.*, 2014)。本研究でも3名の被験者では動画視聴のみの条件では収縮期血圧が約16 mmHg増加する傾向を得た。また、脳波パワーには α 波帯域の減少と β 波帯域の増加傾向が得られた。本研究の結果と先行研究の結果をあわせて考えると、本研究の動画視聴のみの条件でも、動画視聴中にストレス反応が出現したと考えられる。したがって、腹筋呼吸法後の動画視聴中に収縮期血圧と拡張期血圧および心拍数が増加しなかったこと、 α 波帯域と β 波帯域の脳波パワーが変化しなかったことは、腹筋呼吸法の影響により、動画視聴によるストレス反応が抑えられたためと考えられる。

4.5 腹筋呼吸法後の動画視聴中の血圧、心拍数、脳波の変化の背景

精神的もしくは肉体的ストレス刺激による急性のストレス反応として、血圧、心拍数および覚醒レベルの増加が起こることが知られているが、この背景には一般的に以下の2つのメカニズムが関与すると考えられる (鈴木, 2015)。一つは、視床下部・下垂体・副腎髄皮質系 (Hypothalamus・pituitary・adrenal axis : HPA軸) であり、もう一つは交感神経系・副腎髄質系である。前者については、ストレス刺激に対し、視床下部室傍核にある副腎皮質刺激ホルモン放出因子 (corticotropin releasing factor : CRF) 神経が活性化し、下垂体から副腎皮質刺激ホルモンが血液中に分泌されて副腎皮質を刺激し、血液中にコルチゾールを代表とする副腎皮質ホルモンが分泌される。長期的なストレス刺激への暴露による副腎皮質ホルモンの影響は、胸腺リンパ節の肥大、胃潰瘍、副腎肥大に代表される様々な兆候を引き起こす。後者の交感神経・副腎髄質系については、ストレス刺激に対して交感神経活動が上昇して副腎髄質が刺激され、副腎髄質からノルアドレナリンとアドレナリンが放出され、血圧や心拍数の増加を引き起こすと考えられる。このように、ストレス刺激に対するストレス反応には、HPA軸と交感神経・副腎髄質系が独立して関与しているように見受けられる。しかしながら、Fisher *et al.*, 1983はCRFを脳室に投与すると血圧と心拍数が増加することを報告しており、CRF神経はHPA軸と交感神経・副腎髄質系の両者に影響し、血圧と心拍数の増加を含めたストレス反応に重要な役割を担っていると考えられる。CRF神経はさらに、背側縫線核のセロトニン神経の影響を受け、ストレス刺激に対するHPA軸と交感神経・副腎髄質系の活動を抑える可能性がLowery, 2002によって提唱されている。

本研究の腹筋呼吸法による α 2波パワーの増加と前頭前野の脳血流の増加という結果を、我々の先行研究 (Yu *et al.*, 2009, Fumoto *et al.*, 2004) を含めて考えると、腹筋呼吸法中にはセロトニン神経の活性化が示唆される。セロトニン神経の神経伝達はポリウムトランスミッション (拡散

伝達)であり, 比較的ゆっくりと影響することが知られている (Jennings, 2013)。また, Yu *et al.*, 2009は, 腹筋呼吸法後30分の時点でも血液中セロトニンレベルの増加が維持されることを報告している。これらの報告は, 腹筋呼吸法中のセロトニン神経の活性化の影響が, 腹筋呼吸法後も継続することを示唆する。したがって, 腹筋呼吸法後の動画視聴中には, 腹筋呼吸法中のセロトニン神経活性化の影響が, CRF神経を介して交感神経活動・副腎髄質系におよび, 血圧と心拍数が上昇しなかったものと考えられる。また, HPA軸と交感神経活動・副腎髄質系の活性化は直接もしくは間接的に覚醒レベルの増加を起こす可能性があるが (Hebb, 1972), 腹筋呼吸法によるセロトニン神経の活性化の影響は, CRF神経を介して覚醒レベルにおよび, 腹筋呼吸法後の動画視聴による覚醒レベルの増加としての脳波の速波化を抑制したのと考えられる。

5. まとめ

スポーツの試合などにおいて高まりすぎた覚醒レベルを適度に低くする技法の一つとして呼吸法が知られている。本研究では, 我々の先行研究で行われてきた腹筋の収縮を意識した呼吸法 (腹筋呼吸法) が, 腹筋呼吸法後に与えられるストレス反応におよぼす影響について検討した。腹筋呼吸法は呼気12秒, 吸気8秒を目安としてゆっくりとしたペースで15分間行わせた。その後, 先行研究に従って血圧が10-15 mmHg程度上昇すると報告されている動画をストレス刺激として視聴させた。その結果, 腹筋呼吸法中には腹筋呼吸法前と比べて $\alpha 2$ 波帯域の脳波パワーが増加し, 前額部の総ヘモグロビンレベルが増加した。一方, 腹筋呼吸法後の動画視聴中の血圧, 心拍数は変化しなかった。腹筋呼吸法後の動画視聴中の脳波パワーについても α 波パワーと β 波パワーに腹筋呼吸法前と比べて差は見られなかった。腹筋呼吸法を実施せずに動画のみを視聴させた場合, 脳波の α 波パワーの減少傾向と β 波パワーの上昇傾向, また血圧の上昇傾向があった。また, 腹筋呼吸法を実施せずに動画のみを視聴させた場合のストレスの主観的評価 (VAS) は, 腹筋呼吸法を実施した場合よりも上昇する傾向があった。以上の結果から, 腹筋呼吸法を行わない場合には, 先行研究と同様に動画視聴によりストレス反応が上昇したと考えられた。また, 本研究では腹筋呼吸法によりストレス反応が抑えられたため, 腹筋呼吸法前と比べて, 腹筋呼吸法後の動画視聴中の血圧, 心拍数および脳波の α 波帯域と β 波帯域のパワーが変化しなかったと考えられた。

謝 辞

本研究の実施に当たり有益な助言をいただいた東京国際大学の確井外幸先生, また, 実験実施にご協力いただいた東京国際大学の木浪絢乃氏, 大山葉奈氏, 五十貝杏奈氏, 岩崎理奈氏に感謝申し上げます。

参考文献

- Child N, Hanson B, Bishop M, Rinaldi CA, Bostock J, Western D, Cooklin M, O'Neil M, Wright M, Razavi R, Gill J, Taggart P. Effect of mental challenge induced by movie clips on action potential duration in normal human subjects independent of heart rate. *Circ Arrhythm Electrophysiol.* 2014 Jun; 7 (3): 518-523.
- Fisher LA, Jessen G, Brown MR. Corticotropin-releasing factor (CRF): mechanism to elevate mean arterial pressure and heart rate. *Regul Pept.* 1983 Jan; 5 (2): 153-161.
- Fumoto M, Sato-Suzuki I, Seki Y, Mohri Y, Arita H. Appearance of high-frequency alpha band with disappearance of low-frequency alpha band in EEG is produced during voluntary abdominal breathing in an eyes-closed condition. *Neurosci Res.* 2004 Nov; 50 (3): 307-317.

- Fumoto M, Oshima T, Kamiya K, Kikuchi H, Seki Y, Nakatani Y, Yu X, Sekiyama T, Sato-Suzuki I, Arita H. Ventral prefrontal cortex and serotonergic system activation during pedaling exercise induces negative mood improvement and increased alpha band in EEG. *Behav Brain Res.* 2010 Nov 12; 213 (1): 1-9.
- Gonçalves L, Nogueira MI, Shammah-Lagnado SJ, Metzger M. Prefrontal afferents to the dorsal raphe nucleus in the rat. *Brain Res Bull.* 2009 Mar 16; 78(4-5): 240-247.
- 福田正人. 精神疾患とnirs——光トポグラフィー検査による脳機能イメージング. 2009, 中山書店.
- Hajos M, Richards CD, Szekely AD, Sharp T. An electrophysiological and neuroanatomical study of the medial prefrontal cortical projection to the midbrain raphe nuclei in the rat. *Neuroscience* 1998; 87 (1): 95-108.
- Hebb, D.O, *Textbook of psychology.* 1972, (3rd Edition) WB, Saunders Company.
- Hoshi Y, Kobayashi N, Tamura M. Interpretation of near-infrared spectroscopy signals: a study with a newly developed perfused rat brain model. *J Appl Physiol* 2001; 90 (5): 1657-1662.
- Jennings KA. A Comparison of the Subsecond Dynamics of Neurotransmission of Dopamine and Serotonin. *ACS Chem Neurosci.* 2013 May 15; 4 (5): 704-714.
- Jones BE, Muhlethaler M. Cholinergic and GABAergic neurons of the basal forebrain: role in cortical activation. In: Lydic R, Baghdoyan HA, editors. *Handbook of behavioral state control: cellular and molecular mechanisms.* Boca Raton, Florida: CRC Press; 1998. p. 327-348.
- Lowry CA. Functional subsets of serotonergic neurones: implications for control of the hypothalamic-pituitary-adrenal axis. *J Neuroendocrinol.* 2002 Nov; 14 (11): 911-923.
- Masaki H, Takasawa N, Yamazaki K. Human movement-related brain potentials preceding voluntary movements in different arousal states monitored with skin potential level. *Percept Mot Skills.* 2000 Feb; 90 (1): 299-306.
- Mohri Y, Fumoto M, Sato-Suzuki I, Umino M, Arita H. Prolonged rhythmic gum chewing suppresses nociceptive response via serotonergic descending inhibitory pathway in humans. *Pain.* 2005 Nov; 118 (1-2): 35-42.
- 松本直子. 心理的プレッシャーが打球動作に及ぼす影響. *バイオメカニクス,* 2005 9, 170-180.
- McCormack HM, Horne DJ, Sheather S. Clinical applications of visual analogue scales: a critical review. *Psychol Med.* 1988 Nov; 18 (4): 1007-1019.
- Nakatani Y, Sato-Suzuki I, Tsujino N, Nakasato A, Seki Y, Fumoto M, *et al.* Augmented brain 5-HT crosses the blood-brain barrier through the 5-HT transporter in rat. *Eur J Neurosci* 2008; 27 (9): 2466-2472.
- Polich J. On the relationship between EEG and P300: individual differences, aging, and ultradian rhythms. *International Journal of Psychophysiology* 26: 299-317, 1997.
- Schneider S, Askew CD, Diehl J, Mierau A, Kleinert J, Abel T, Carnahan H, Strüder HK. EEG activity and mood in health orientated runners after different exercise intensities. *Physiol Behav.* 2009 23; 96 (4-5): 709-716.
- 鈴木郁子. やさしい自律神経生理学——命を支える仕組み. 中外医学社, 2015.
- 徳永幹雄. 教養としてのスポーツ心理学. 大修館書店, 2005.
- Yu X, Fumoto M, Nakatani Y, Sekiyama T, Kikuchi H, Seki Y, Sato-Suzuki I, Arita H. Activation of the anterior prefrontal cortex and serotonergic system is associated with improvements in mood and EEG changes induced by Zen meditation practice in novices. *Int J Psychophysiol.* 2011 May; 80 (2): 103-111.

「太陽に乾杯」三島由紀夫の生の「欲動」

——三島事件の心的機序の研究②——

安 岡 真

‘A Toast to the Sun’-Yukio Mishima’s Desire for Life: A Study of the Psychological Mechanism of the ‘Mishima Incident’ ②

YASUOKA, Makoto

Abstract

Yukio Mishima, one of the greatest post-war Japanese novelists, travelled extensively from 1951 to 1952, visiting Honolulu, San Francisco, Rio de Janeiro, San Paulo, New York, and parts of Europe including Greece. This 6-month long journey had a tremendous impact on Mishima’s subsequent thinking and, eventually, his way of living. Mishima wrote a relatively long account of his days abroad called ‘The Cup of Apollo’ which was published in 1952. This academic paper deals with the detailed daily descriptions of Mishima’s travels and suggests that during this trip Mishima found himself to be categorized on the side of ‘living’. Mishima keenly realized that he wanted to enjoy his life, to devour the gift of living wholeheartedly. His travels were an excellent chance for Mishima, who considered himself an unexpected survivor of WW II, to experience a rebirth and revive his own strong desire for life. This paper also deals with Mishima’s unique understanding of Greece’s Acropolis, particularly how it reflects his complex approach towards living.

Reviewed by Ted Rybakowsky, MBA, New York University

Key words: Yukio Mishima, the Cup of Apollo, Mishima Incident, Acropolis, desire for life

キーワード：三島由紀夫、アポロの杯、三島事件、アクロポリス、生の欲動

目 次

1. はじめに
2. 旅
3. アメリカの土
4. 「閉じた人」
5. 旅の興趣
6. 笑う三島
7. 自意識と陶酔
8. 小林秀雄の言う言葉の意味—私的概観
9. ヨーロッパにて
10. 心身の平衡
11. 精神の錬磨
12. 太陽に乾杯
13. おわりに

1. はじめに

昨年私は、「三島事件の心的機序の研究——「仮面の告白」の虚偽を中心に——」と題した論文を本学論叢に発表した。三島は昭和20年2月10日に本籍のある兵庫県富合村・高岡工廠において旧陸軍への入隊検査を受け、たまたま引いていた風邪を大げさに言い募って「青二才の軍医」から「肺湿潤」と診断され「即日帰郷を命じ」られた。が、先の論文の中で私はこれは誤診ではなく実はひ弱な三島（平岡公威）を見かねた軍医の「手ごころ」であることを、主に三島の精神の起伏を追うことで、論証しようと試みた。これを論じるにあたり私は防衛省・防衛研究所で旧陸軍の残存資料にあたり、当時の高岡工廠、今は陸上自衛隊青野原駐屯地になった現場へ赴き広報官から図面等を頂き、軍医の軍籍を調べるため兵庫県庁へ赴くなど、「青二才の軍医」とは誰だったのか、明らかにしようと努めた。結果は上記の論文に詳しい。ぜひ、参照されたい。

ところで三島は、母校である学習院高等科を卒業するにあたって、成績きわめて優秀（首席卒業）であったので、時の昭和天皇から銀時計を拝受している。これを「銀時計組」と言うが、この栄えある立場と「肺湿潤」で「即日帰郷を命じ」られ「天皇の軍隊」の役に立てなかった挫折の記憶が作家のなかでコンプレックスをなしたことは十分に想像しうる。1970年11月25日、正午を少し過ぎたあたり、なぜ三島は市ヶ谷駐屯地に乱入しあのような挙に出たのか。この「戦後日本文学（‘文学’を取ってもよい）最大の謎」について、これを三島の精神の起伏に焦点をあてて詳らかにしようというのが、私の目下の主題である。

本稿でもたびたび指摘した通り、生来三島には「死」への傾きがあった。が、これも本稿でたびたび指摘したことだが、そんな三島にも「生」を強烈に希求した瞬間があった。三島事件の、その根幹とも言える彼の「人間」を理会するためには、この「死」と「生」の相剋、むしろ「生の欲動」の在処について考察することがどうしても必要であるだろう。三島事件とは、当代一の人気作家が突如狼藉を働いた、戦後屈指の悲劇であるが、この事件をもたらした作家の心のメカニズムについては、いまだ解明されているとは言い得ないであろう。本稿は、この悲劇に私なりにメスをいれようと試みた、「三島事件の心的機序の研究」の二作目にあたる論文である。

2. 旅

陽の光をいっぱい浴びようと念じたわけではない。太陽とは、ふいに出会ったのである。義務としての旅だった。世界周遊旅行がまだ船舶による時代、三島が、その生涯で初めて祖国日本の地を離れ、外遊を我がこととしたこの当時、横浜港からサンフランシスコ港までは優に二週間の長さを要するものだった。それでも、たっぷり二週間かかったとは言え、まだ三島は幸運だった。なぜなら、三島の一行をその船腹にのみ込んだ客船プレジデント・ウィルソン号（以下、ウィルソン大統領）はそもそも戦時標準船アドミラル・W・S・ベンソン級輸送艦を貨客用に改装した船であって、洋上を21ノットの速力で突っ走る能力を備えていたからである。いざ航海が緒についた初日のこと——1951年12月26日——三島は微笑ましくも次のような感想を書き残している。「千夜一夜物語の筆法によると、この船の生活は一行に尽きる筈である。「それから私たちは、十四日の航海を経て、バグダッドに着きました」¹⁾

そして、三島は当たり前のようにこう付け加えた。「それはバグダッドでも、われわれのように桑港（サンフランシスコ）でも、変わりはない。」²⁾

初めての洋行を前にした、いかにも三島らしい冷めた口吻であるだろう。

私は、その著作を通して三島との対話を続けているうちに、三島を読む行為とはさながら皮を剥がして肉を穿つようなものであると思うに至った。その髄液を顕微鏡にでもさらすに等しい手さばきで精密に観察する必要があると。そう思ってわが「読み」を納得するようになっていく。私は永年文芸の翻訳家として活動してきた。みずからの生業として常に作家を「探す」側に立ってきた。作家の視点と文章（エクリチュール）との距離、これを正確にかつ真つ当に測ることが私の読みの出発点である。そういった分析家としての態度を常にみずからに課してきた。そんな私の経験からすると、多くの三島の文章は実に「微笑ましい」のである。三島は「行為が欠けているから、書く価値がない」と、ウィルソン大統領の船客としての退屈な日常について、三島の言葉を借りれば「抽象的な船客の生活」について、あくびでもかみ殺すように書いている。デッキ・チェアに寝転んで、甲板の上で腕を組んで三島は「衛兵のように規則正しく行ったり来たり」する初老の夫妻の「単調な動物の運動を見物し」、「少なくとも四カ月、私は仕事をしないでもいい。仕事をしていない時のこういう完全な休息には、太陽の下に真裸で出てゆくような、或る充実した羞恥がある。」と嘯いて、あたかもお気に入りの詩人ランボーさながら、ヴォワイアン（見者）を決め込んでいる。

が、しかしこの「太陽の下に真裸で出て」って獲た「充実した羞恥」こそが27歳の三島を一このことについては詳述するが—再生させたこともまた事実なのだ。

三島には生に対する強烈な欲望があった。そしてその強い欲動を「羞恥」と韜晦する精神の傾きがあった。生命讃歌を承認することから遠ざかりそれを「恥」と思い込むうす暗い心の襲っていた。

だがその「恥」を自覚しつつも圧倒的な陽の光を浴びながらみずからの心の底から沸き起こるおらび声を聞き届けることが出来た。これこそがこの洋行の大なる成果であっただろう。

「仮面の告白」の成功で人気作家の地位をすでに手にしていた三島は、朝日新聞社の計らいで特別通信員の資格を得て、アメリカ合州国から南米へ、さらにはヨーロッパへといたる船旅に出たのである。出帆は1951年12月25日のこと。横浜港に浮かぶ船内でクリスマス・パーティーを祝い、翌年5月10日ローマから日本に帰国するという半年弱にわたる長旅であった。ホノルル、サンフ

ランシスコ、ロサンジェルス、ニューヨーク、マイアミ、サンパウロ、リオデジャネイロ、再びサンパウロに戻ってからは、ルアー・アイモレス（ブラジル）、リンス（ブラジル）と周り、3月2日にはジュネーブ（スイス）に、翌3日にはパリ（フランス）にたどり着いた。「太陽！ 太陽！ 完全な太陽！」興奮のおもむくままに三島は書いている。

「太陽！ 太陽！ 完全な太陽！ 私たちは夜中に仕事をする習慣をもっているのに、太陽に対してほとんど飢渴と云っていい欲望をもっている。終日、日光を浴びていることの自由、仕事や来客に煩わされずに一日を日光の中にいる自由、自分のくっきりした影を終日わが傍らに待たせる自由」。³⁾ 横浜を出港してまだ三日目、エメラルド色をしたホノルルの港すらその目に写す前から三島はこのような興奮を身の内に感じていた。ここで三島の言う「太陽」とはあたり一面を海に囲まれて水と光に包まれる中で彼の心に沸き起こった「生きる」喜びそのものであった。そう言ってまず間違いないだろう。およそ比喩としての「太陽」が「生命」以外の何ものかを指し示すとは考えにくいからだ。このとき三島の膚を突きぬけて、その神経の先端まで、陽の光が降りそそいだ。

「今日の快晴と平穏とは、昨夜おそく甲板に出て、かすかにゆれている檣上（しょうじょう）の灯や、頭上のオリオンを仰いだとき、すでに予期されたものである。陸の影も、船の影も、雲の影ももたない巨大なフラスコの内部のような海。このすばらしさは、これから見るどんな未知の国のすばらしさをも凌駕しているように思われる。」⁴⁾ そう書きながら三島はまるで母親からももらったおもちゃ箱を開いてみせる幼児にも似た純白の興奮につつまれていた。もっとも、この excitement の中にすら一条の鱗を感じさせずにはおかないところに、三島の生の所在もあるのだが。「私は今日、日没を見なかった。一日、太陽の面差に見惚れていたので、その老いの化粧を見ようとは思わなかった。」⁵⁾ その三島の眼前に、おもむろに「北米」が姿を現すのである。

ここで三島の気を惹いたのは、この時点でいままなお占領下にあった日本の小説家だからだろうか、ウィルソン大統領に乗り合わせた一人の日系の婦人であった。「お納戸いろの洋服を着て、金ぶちの眼鏡をして、首にレイをかけて、プロムネイド・デッキの窓から、遠ざかりゆくホノルルの灯をみつめている」「六十近い小柄な痩せた女」。「同郷の老いた友人たちとここで別れ、一人でロサンゼルスへかえる」日系のこの婦人を三島はまじまじと観察する。太平洋戦争が始まるや即日抑留され、監房に入ることを余儀なくされた。日本海軍が真珠湾を攻撃するばかりで「米本土に責め上がってこないことを残念がって」、「もしまた、自刃の羽目に陥ったら、みんなで首を括って死のうと相談した」この日本婦人が故国への里帰りを果たし、いまウィルソン大統領の船客となってテレビジョンのある米本土の自宅へ帰るのである。彼女の口から聞かされたこの事実、占領下にあった戦後日本のありようを見、宙に浮かんだような我と我が身の足場の脆さを思ったのであろう。三島は、この日系の婦人に冷え冷えとした観察者の視線をそそいだのである。その「冷えた」視線という一点で、三島はまだ「開かれて」はいなかった。

昭和20年2月10日、旧日本軍への入隊検査を拒絶された三島には、戦勝国アメリカを前にして意識するとも無く首をもたげてきた自然な気負いがあった、と私は解釈している。確かに初めての海外、しかも日本とアメリカが戦端を開くきっかけとなったハワイの土地を前にして、三島の精神が「閉じて」いるのはそのせいだろう。その気負いは例えば次のような描写からも明らかである。「ホノルルは何か用意周到な野趣というようなものを持っている（と、三島は書いている）。あらゆる観光地には、「売られた花嫁」のような野趣、いわば野趣の売笑化があるものだが、ホノルルのはそれとも幾分かっている。それは文明のもたらす生活的利便の、さらに先廻りをして自信をもった、熱帯のあの偉大な自然の怠惰の威力なのである。」⁶⁾ 今ここを引用している私

が学生時代に初めて訪れた外国はホノルルであるのだが、なるほどハワイには「管理された野趣」といったものがあるかもしれない。それを「売笑化」という言葉で呼ぶことも出来るだろう。その光景を前にして「偉大な自然の怠惰の威力」と書き、「生活的利便の」先廻りした「自信」と捉えるあたりに、三島がその裡に抱え込んだ、ひび割れた苦しい自意識が窺えるとは言えないだろうか。ともあれ「私の船の属する会社で発行したパンフレットの……天然色写真の図柄」と同じものを現実のホノルルの街に見た三島の姿は、後年世界じゅうを歩いて異国の風を我が身に感じたエトランジェの私の目からすると、どこか「閉ざされた」、作家にも似合わぬ精神のこわばりと映るのである。

3. アメリカの土

三島由起夫が戦後作家としての自意識を高め「即日帰郷」の屈辱を払って世界へと目を転じたのは、この「アポロの杯」に結実した米欧への旅行がそのきっかけであった。「アポロの杯」はいまなお日本を占領しているアメリカ合州国の文明を、若い三島がどう観察したかというあたりが最初の読ませどころなのだが、アメリカを前に若い三島が少々「構えた」せい、その言葉のきわどいところで彼がアメリカにそっぽを向いていることが端々から窺えて少々鼻白む思いを読む者に感じさせずにはおれない。先の日系婦人へ寄せた冷淡な描写からも明らかなように観察者の鎧をいまだ脱いでいないように映るのだ。それを私はむしろ微笑ましく思う者だが、この「閉じた人」から「開かれた人」への変身——ギリシアでアクロポリスを前にして覚醒した彼の精神の変革——こそが三島を再生させた初の外国体験の効用であり「アポロの杯」の本当の読ませどころであるだろう。

年が変わって52年1月に一行はサンフランシスコの土を踏む。ここで三島がたまたま口にした日本料理屋の味噌汁の不味さ、「がさつな給仕と、一膳飯屋の雰囲気」「顔いろのわるい刺身」の描写は有名である。三島はこう書いた。「身がかがめて不味い味噌汁を啜っていると、私は身がかがめて日本のうす汚れた陋習を犬のように啜っている自分を感じた」⁷⁾ このやや硬直気味のひび割れた自意識（自己愛の傷つきと言ってもよいが）こそ三島と日本とアメリカ合州国との三角関係を絵的に伝える、戦後作家三島がこの時点で立っていた立ち位置であった。

三島の味噌汁はこうして「一国民、一民族の風習」となり、「黄いろく変色した記念写真のよう」に説得力を欠いた「日本人の舌をも閉口させる代物」として印象された。これを比較して後天的に獲得された合州国の「風土を感じさせない」サンフランシスコという土地と隣り合わせてみるや、「二重の不調和、二重の醜悪さ」⁸⁾の象徴として映る。これは三島のコンプレックスである。当時の太平洋航路はすべからくハワイ、サンフランシスコを経路とした。となると、このアメリカ受容は、当時海外へ渡航した日本人がおそらくは例外なく経験した感情とひと連りのものである。三島の「アポロの杯」は、こうして少なくともアメリカ描写に関する限り、彼の作家が発露される数歩手前にとどまっている。そう感じざるを得ない。

同じ年の1月8日、三島はロサンゼルスへと赴いた。その街を見渡しながら三島はこう書いた。「ハンティントン美術館は英国美術とルイ王朝仏蘭西工芸品と英国古典文学の古文書との注目すべき蒐集を展覧している。ヘンリー・E・ハンティントン氏が一九〇八年から一九二七年にわたる蒐集の公開せられたるものである。

ロココ様式の調度で統一された窓のない仄暗い一室に、ルイ十五世時代の幾多の白粉笥（おし

ろいばこ)や、十八世紀末から十九世紀初頭にわたる英国華胄(かちゅう)界の名華の肖像をえがいた、あまたのメダイヨンが陳列されている。

この一室は就中、ここに佇む人をしばらく夢みさせる。」⁹⁾……

そして三島はこう筆を進める。「白粉筥は甚だ精巧な細工を施され、その工人の手は優雅と巧緻の境を極めてい。蓋の一つ一つが檣(ほばしら)の櫛比(しっぴ)する港の光景や、戯れに矢をつがえているおさない薔薇いろの裸のクピイドや、美しい三人の姉妹の肖像画や、古典劇を演ずる劇場の風景や、貴族の男女が緑濃い庭に嬉戯するワットオ風の画面や、狩の動物の密画などで飾られており、細かい宝石をちりばめた色あざやかな七宝や彫金の額縁がこれを囲んでいる。その蓋をあけようにも、これらの白粉筥は無粋な硝子の檻にとじこめられているので、手をふれることができない。しかし七宝の鮮やかな緑や庭園嬉戯図の潤いのある夕空の彩色などを見ると、これらの小筥の中、たとえば金の小さな蝶番の内側などに、そのかみの白粉のほんの一刷毛ほどが名残をとどめていそうに思われる。」¹⁰⁾

まるで初めて欧州の美術館に足を踏み入れた画家の卵か美学生のような感想なのである。先に書いたように「アポロの杯」は三島の精神に変革をもたらした旅行の記憶である。だがこれが作家初めての旅行記であるなら、旅行記の骨法とはその土地土地の文化、風俗、人間の驚異を描くことにあるわけだから、ロサンジェルスにあって欧州美術のコレクションに殊更に目を向ける三島の筆さばきは、これは相当に脱線した筆鋒であると言わざるを得まい。こう言ってしまえば身も蓋もないが、ウィルソン大統領の船上で日系婦人のうつろう心情に目をとめた三島の目に、サンフランシスコであれロサンジェルスであれ、アメリカおよびアメリカ人の姿は「見えて」はいないのである。

「大英美術館から借用出品のターナーをたくさん見る。ターナーは私をおどろかせた。」「ウィリアム・ブレイクの初版本「ソングス・オブ・イノセンス」を見た。自刻の木版に水彩を施したもので、きわめて美しい。」¹¹⁾さらには、「これを見たことは羅府(ロサンジェルス)における私の最も大きな浄福だと云っていい。」¹²⁾と書く三島にとって、処女地アメリカはいまだ幻想の都の寓意であったかのようだ。

「紐育の印象——などというものはありえない」と三島は書いている。その精神の全的な「解放」を三島はその後訪れたブラジルからヨーロッパへの旅で経験するのだが、いまだ「開かれた人」への途上にあつた彼は、ニューヨークで十日あまりを過ごした後ですら、こう憎まれ口をきく他なかった。「一言にして言えば、五百年後の東京のようなものであろう。……ここでも画壇の人たちは朝から晩まで巴里に憧れて暮らしている。」¹³⁾こうして三島の自意識は、三島の精神を苛んでいた。1950年代のアメリカ絵画を少しでも知るものにとってそれはとても鵲呑みにすることは出来ない評言なのである。

気負いが反転した心理の微妙な綾と、それがもたらす劣等意識三島のシニカルな視線は、間違いなくそこに理由がある。三島はきわめて自己愛の強い人物だった。日本の敗戦と、それに続くアメリカの占領、またその戦中と戦後にみずからは「軍医の誤診」となおい言い張るのであろうが、まったく参与出来なかったという苦い挫折の記憶が三島をして目を「開く」ことから遠ざけていた。人として、作家として、三島はどちらかと言えば二元論の立場に立つものであった。事象を自由に、相対的に見るよりはむしろ直線的・絶対的に捉える傾きがあった。こうしてなおアメリカから「距離」を置き、素直な観察、積極的な受容を強く斥けているのは、つまりは作家の本質に由来すると言うほかはない。こう考えてみると、三島の戦後理解、天皇への振幅の激しさは、この劣等意識(と、その根っこにあった自己愛)と無縁のものでは無かったように思われる。

三島は初めて訪れた芸術の都ニューヨークではシアターからシアターへ忙しくはしごしている。メトロポリタン歌劇場ではリヒャルト・シュトラウス作曲のオペラ「サロメ」とプッチーニ作曲の「ジャニ・スキキ（ジャンニ・スキッキ）」を、インペリアル劇場ではミュージカル「コール・ミー・マダム」を、マジェスティック劇場ではミュージカル「南太平洋」を、ヘンリー・ミラー劇場ではコメディ「ムーン・イズ・ブルー」を、さらに映画については封切り間もない黒澤明の「羅生門」を、セシル・B・デミルの「地上最大のショウ」を、エリア・カザンの「欲望という名の電車」を見ている。「知識階級のあいだでは「羅生門」の評判は非常なものである。」この短い一言が三島による黒澤評のすべてである。が、街を歩き、人と交わり、料理屋をカフェをマーケットを、地元のんびりと賑わう八百屋や魚屋や本屋を冷やかしてみると言った異国の風を呼吸しようという行動ぶりは示していない。むしろ、他人の制作した芸術作品を受け身になって鑑賞し、黒澤には（一足先に世界に出た芸術家をやっかんだのか）冷やかかな一言を残し、日本の新劇とブロードウェイの演劇とを比較して論じながら、どちらが様式的で、どちらが拡声器を一切使わないなどと言った些細な事柄を殊更に言い募っている。その精神の動きを追い続けてみると、その真意が奈辺にあったかはともあれ、三島にとって戦後とは何か、世界とはどういう場所であったのかについて思わざるを得ないのである。

4. 「閉じた人」

「アポロの杯」は間違いなく生き生きした旅行記である。特に後半に行くほどにその生気をいや増しに増す、戦後日本の海外受容の有り様をわれわれに伝える第一級の史料である。このことは本稿の後半で詳述するつもりだが、「アポロの杯」という書名は、簡単に言えば、「太陽に乾杯」と言ったほどの意味だろう。ギリシアの太陽¹⁴⁾とイタリアの芸術を一言ってみれば「古典」の助けを借りて三島がその「生」を痛切に発見したという意味で、彼の生涯にほとんど決定的とも言える影響をもたらした重要な旅の記録である。が、およそ旅の始まりにあって誰もが感じる狂熱、興奮が本書にはない。その代わりにシアターをはしごして何と何を見たといった、カラカラに乾いた芸術鑑賞の描写があるばかりだ。「ミュージアム・オブ・モダン・アート（近代美術館）」で三島は「合州国の画家の作品で、心を動かしてくれるものに会いたいと思」い、「ほんの二三點」水彩画家の Demuth¹⁵⁾の絵画に目を留め、さらにメトロポリタン・ミュージアムでは同じ画家による「5の字を大書した商店の飾窓のポジション」¹⁶⁾を眺めている。デムースは同性愛者で対象を精密に捉えたジョージア・オキーフ風の描写に持ち味のある画家だが、その画風は、どちらかと言えば感情に訴えかけるよりはむしろ無機質な描線にその特徴があると言える。この画家の絵を見て「それでいて不吉なのである」と書くあたりに、三島のこわばり、「閉じた人」の心情が反映されている。

三島のアメリカは、こうして客席から眺められた舞台のような、硝子扉の向こう側にいる見物人がようやくとしたためたデッサンのような、冷めた筆致に終始する。旅とは、土地のんびととのぎこちない交わりであるだろう。胃袋に放り込んだ得体の知れないモノであり、目にするのも初めての奇妙な習俗であり、それを見て面白いと悦に入る精神であるだろう。そのためにはみずからが主体となって世界と関わる心の奥行きがなければならないが、サンフランシスコ条約が今にも締結されるかされないかと言ったこの当時、その余裕を作家に求めることは無理だった。三島のアメリカは、こうして、あくまで客の視線、ランボーのヴォワイアンとはまた異なる視点で眺められた幻想の都そのものだったのである。

三島はニューヨークのハーレムを指して「黒人部落」と書いている。それを読んで私は、当時の日本人の海外交流の程度から言って、すこしドキリとはするものの、やむを得なかっただろうと理會する。だが周知の通り当時のハーレムはモダンジャズの全盛期を迎えていた。名だたるプレイヤーたちが夜ごとあちこちのクラブに集ってはビバップ革命を推し進めていた。ブラック・ルネサンスの首府だった。そこを深夜訪れるにあたって三島は（惜しいかな）「白人の友、コロンビア大学のB君」の案内を請い、どうやらヴォードヴィルでも観たのだろうか、「黒人の老優」や「黒人の娼婦」や「黒人のレスビアン」にからかわれ、「黒人の給仕と女給仕が、ピアノにあわせて、古い恋唄をうたう」のを聞き、「女も男も、その声ははなはだ美かった」と書く。ヴォードヴィルを演じる黒人たちをエンターテイナーとして捉え、その芸能を異国の情趣と受けとめて、それを聞き取るにあたって「抒情的な節の哀切さ」などと言って、みずから「開く」のではなく、それこそ目を半目にして眺めやる、その三島のアメリカは残念なことに後年の作家たちが懸命にわれわれの目を開かせようと奮闘してきたアメリカとは異なり、どうにも強ばった、焦点の合わない眼鏡越しに見た半世界のように映るのだ。三島より20年ほど早生まれの作家ウィリアム・アイリッシュは揺籃期にあったビバップの音の氾濫について「幻の女」の中で印象的に描いていた。¹⁷⁾ そのアイリッシュの驚きを、三島が驚くことは無かったのは、これはいかにも残念なことである。だからその「閉じた人」三島に旅の道連れがあったというのははなはだ遺憾なことであったと言わなければならない。すでに見たコロンビア大学のB君しかり、この「壮途」（川端康成）をアレンジした朝日新聞社の出版局長しかり。何より行く先々でパーティに呼ばれ名士と交わり案内人を先導役にハーレムを歩き「インディアン部落」では「車を停めて二十五仙を払って見物する」そのパッケージ旅行のあり方こそ、三島のアメリカ体験を稀積なものにしている元凶であると言わざるを得ない。

だからと言っていいだろう。フロリダを経てブラジルのリオデジャネイロへ向かう機上の人となるや、突如その「閉じた人」三島が言いようのない感動に襲われたのは。煎じ詰めれば三島にとって異国の地は実はここから始まったのだと言ってよい。この瞬間のことを、三島はこう書いている、「しかしリオのこの最初の夜景は、私を感動させた。私はリオの名を呼んだ。着陸に移ろうとして、飛行機が翼を傾けたとき、リオの燈火の中へなら墜落してもいいような気持ちがした。」¹⁸⁾。「私は突然、明日南米へ自分の身が運ばれることを思って胸のときめきを感じた。」南米に入る前日にこう書き、「日本を発ってはじめて感じる旅のときめきと謂っていい」¹⁹⁾と書いた三島にとって、精神的にも物理的にも、興味を覚えるのにブラジルはうってつけの距離だったのだろう。だからこそリオをあたかも恋人の名前のように崇めたのである。

ここ南米で三島は初めて旅を始め旅人の視線を獲得している。プエルト・リコの首府サン・フワンで、機上で知り合ったアメリカ人に教えられた安宿に泊まった三島は「着物を着て、街へ散歩に出た。」

十一時前だというのに、すでに街路は闇（げき）としている。大方の店は閉ざしている。夜の早い町である。街路に人が佇んでいる。傍を通ると、プエルト・リカン特有の鋭い暗い目付でこちらを見る。又別の街角には、身振はまだ少年の名残があるのが、一様に口髭を生やしたプエルト・リカンの若者たちが屯している。かれらは涼んでいるのであるらしい。小公園の前へ出る。先刻の雨に濡れているベンチには人影がない。

映画館の前をとおる。それもすでに閉まっている。看板の電気広告がすでに灯を消して白々と見える。

……MUSICA……

……AMOR……

……APASIONADO……²⁰⁾

5. 旅の興趣

そして「私は突然……南米へ自分の身が運ばれることを思って胸のときめきを感じた。」という興趣が沸き起こるのだ。この描写はおそらく三島がウィルソン大統領で日本を離れてから初めて感じる旅を旅たらしめた旅情であった。街を、人を、外国語をアメリカでは感じることのなかった三島は、ここで初めて旅の孤独と向き合ったのだ。

こうして三島は「開かれた」。いま三島を書く者として私は、三島が旅と出会ったことを衷心より喜ばないわけにはいかない。朝日新聞社まで動かしてやっと実現した洋行が物見遊山から「旅」へと変質したことに共感しないわけにはいかない。旅とはすなわち出会いである。その出会いとは偶然そのものであるだろうが、どんな人と出会い、どんな料理と出会い、どんな音楽と出会い、どんなふうにも街角をめぐり、どんな酒を喰らいどう酔いつぶれどうあしらわれたか、そこに旅を旅した者だけが味わうことを許された運というか、教養の在処もあるだろう。そこにこそ旅に出ることの意味、醍醐味もあると、私は思うものだ。ウィルソン大統領もアメリカ合州国も三島にとっての旅先ではなかった。これは三島の「生」を考える上で殊のほか重要であると思うのだが、三島が南米で異国にあることの非日常を発見し、次いでヨーロッパをその目で見、ギリシアでは太陽を、イタリアではルネサンスの美術を発見したことは、作家の「生」にとってきわめて画期的な出来事であったと言うべきだろう。

事実三島の「アポロの杯」はこの南米紀行から、俄然、深いものになっていく。作家が自身を—おそらくは知らず知らずのうちに—「解放し」旅先の空気と一体化し、だから生み出せたとしか思えない、情味あふれる表現が満ちあふれてくるのだ。

門扉はいずれも閉ざされて、家中が外出しているとみえて、高台にそそり立つどの家も、露台の扉と窓の錠戸を閉ざしていた。古びた塀には風を失った鶯が彫金のように凝然（じつ）としていた。

夢の中に突然あらわれるあの都会、人の住まない奇怪な死都のような、錯雑した美しい、静寂をきわめたあの都会、それを私は幼年時代に、よく夏の寝苦しい夜の夢に見たことを思い出した。都会は塔のように重畳とそそり立っていた。その背景の新鮮な夏空の色と雲の色も同じであった。私は自分が今、眠りながらそれを見ているのではないかと疑った。²¹⁾

唐突に差し挟まれたこの文章の中にあるのは突如みずからの前に立ち現れた環境に向けられた赫突たる「好奇心」であり、その「幼年時代」を「夏の夜の夢」と同一線上に捉える甘やかな幼子めいた記憶である。思い返してみると、その幼年時代に、「猫の喰べ残した鼠は、/湿った枯葉の山にある。」と書き、「其の上に、/枯葉の落ち合ふ音は、/——灰いろの挽歌のやうだ。」²²⁾と書いた12歳の平岡公威の、おどろおどろしい露悪的なまでの表象界と寒々しい悲劇めいた心象風景は、いま、ブラジルの見知らぬ街に佇み沸き起こる旅の興趣に苛まれつつ全身でリオの街との交感を喜んでいる27歳の三島によって見事に乗り越えられたのだ。

このとき痛切な悲哀の念が私を襲った。それもまた夢の中の悲哀に似ていて、説明しがたい、しかも痛切で純粋な悲哀なのである。この現実の瞬間の印象が、帰国ののちには夢の中の印象と等質のものとなること、なぜなら記憶はすべて等質だから、夢の中の記憶も現実の記憶と等質のものでしかないこと、その記憶の瞬間において、私の観念はまた何度でもリオを訪れリオに存在するかも知れないが、私の肉体は同時に地上の二点を占めることはできないこと、(傍点三島)もはや死者が私の中に住むようにしてリオは私の中に住むにすぎまいが、もう一度現実にリオを訪れても、この最初の瞬間は二度と甦らぬであろうということ(以下略)、²³⁾

こうして三島は「荘子の譬は、転身の可能について語っている。」²⁴⁾という認識に立ち至るのである。「われわれは事実、ある瞬間、胡蝶となるのだ。われわれはさまざまなものになる。輪廻は刻々のうちに行われる。大きな永い輪廻と、小さな刹那々々の輪廻と」三島が本来タナトス(死の欲動)を内包していたのは事実であるだろう。だから三島にとっての「生」はこのようにいったん「死を死んだのち」に訪れる「輪廻」として自覚されていた。死と生との往還。栄華も一炊の夢にすぎないという謡曲「邯鄲」の主題を三島はあれこれと反芻していた。「小さな輪廻と大きな輪廻とは、お互いを映している鏡影のようなものである。ひとりわれわれの意識が、われわれをあらゆる転身の危険から護り、空間にとじこめられた肉体の存在を思い出させてくれるのである。」そして「さもなければわれわれは二度と人間に戻らないで、その瞬間から胡蝶になってしまうことであろう。……私は人間の肉体に立戻った。」²⁵⁾三島が旅先のリオでこの街との交感を喜び、この旅で初めて異国にあることの狂熱を自覚しながら、ここで「輪廻」という不可知なものではなく「人間の肉体」を回復したことは、旅のもたらした再生であり、彼の存在にとっての幸いであったと私は思う。旅人にはよくあることだが、彼の意識はどこかへ飛んでいた。タナトスを内包した三島にはそれは輪廻という「死と生の往還」として理會されたはずだが、彼は「胡蝶」にならずに「人間の肉体」を回復した。

それはたまたま通りかかったあるポルトガル人の家族のおかげであった。「三十四五の母親と、可愛らしい三人の娘と、その末娘の手を引いている黒人のアマ……が、その賑やかなお喋りをもって、私の意識をよび戻してくれたのである。」²⁶⁾

たまさかの出会いがある種の「救い」をもたらすのは、まったく旅の効用の一つであった。このとき三島の精神はリオの空を一闪してまさに息を吹き返した。このあたりから再生が旅行記「アポロの杯」の大きな主題となってくる。

それにしても、と私は思う。なぜ三島は、アメリカで感じることの無かった異国にあることの狂熱を、こりリオに来るなりこうまではっきりと感じたのであろうか。街を見ては「リオはふしぎなほど完全な都会である。」と書き、電車を見ては「リオの市内電車は郷愁的な形をしている。」と観察する。たまたま散策した辺りは「美しいプラサ・パリスの花壇のほとり」であって、「小鳥や馬や象や花籠や巣箱や駱駝の形に刈られていた」庭樹に三島は目を留め、「子供たちに伍して映画館の行列に加わった。」なぜなら「ここでも私は自分の幼年時代に出会った」からである。夢中になってリオの街角を彷徨いながら三島は(と言うより言葉の純粋な意味で27歳の若い平岡公威は)幸福な思いに包まれている。心地よいリオの夜風にくすぐられながら公威は(と、あえてこう綴るが)映画館の行列にまじる。そこでは「短編や漫画にまじって、連続活劇の一卷が上演されていたが、これこそ幼年時代の私の憧れの全部であった」から。

そして、

それは荒唐無稽な冒険の物語で、別の天体の上の奇妙な王国、若い英雄、清らかなその恋人、嫉妬にかられる王女、奸臣と忠臣、眠り薬、地下牢、火竜の出現などからでっち上げられたものである。

私は子供たちの間にまじって、子供たちと一緒に笑った。²⁷⁾

6. 笑う三島

サンフランシスコで「クォ・ヴァディス」(マーヴィン・ルロイ監督)のような重い史劇を観、ニューヨークでは黒澤明の(その時点での)最高傑作である「羅生門」を鑑賞しながらただの一言も批評めいた言葉を残さなかった三島がここリオでは人気作家の袂を脱いで「子供たちと一緒に笑」っている。これはいったいどうしたことか? 何が作家に起きたのだろうか? 何が? それは赤紙を送られていったんは兵隊に取られる覚悟をかため、お国のため天皇のためにアメリカ合州国と戦う運命をみずからに言い聞かせたはずの公威が、「青二才の軍医」の手心でその日のうちに、——入隊検査の直後に、——帰郷を命ぜられてドッと安堵したあの時の思い、その思いがあったからこそ初めて敵国アメリカの土を踏んで「構えて」しまった—その「構え」が、いま解き放たれたからに他ならない。その時の強ばりが三島の人生の端々で顔を出し彼の人生の決断と行動を決定していく。そしてそこに三島の生と死の相剋、エロスとタナトスのせめぎ合いの秘密もあった。そう私は理會するのだが、書かれたことではなく書かれなかったことにこそ読み取られるべき真実があると、いま私は、三島を書く者として考えたいと思う。だからなのである。北米紀行と題された文章の中からうかがわれる体温の低さ、自身を取り巻く環境への冷淡さと、太平洋の裏庭として形だけは第二次大戦に参戦しながらも、その心理的距離から徴兵忌避者のコンプレックスを三島に感じさせなかったブラジルとでは、旅人として味わう開放感も大きな開きがあったのだ。

「閉じた人」三島はこうして「開かれた」。三島の耳には「近づいてくる太鼓の音と歌声」が響いていた。謝肉祭(カルナヴァル)である。「太鼓と鑊鉞(にようはち)と呼笛(よびこ)の単純な音楽が歌声にまじっていよいよ近づいた。曲はおそらくサンバである。」まさしく旅人の耳に響く音楽を、三島は心地よく聴いていた。

こうして三島はリオを、ブラジルを生きた。それは作家にとってどれほど嬉しかったことだろう。彼の精神はどれほど解き放たれ、どれほどかなたを飛翔したことだろう。一人で異国を旅したことのある者ならだれもが覚えのあるあの言いようのない、自由に心が飛び回るあの思いを三島も味わっていた。このあたりからである、三島が夜の縁日をうろつく少年のような好奇心で異国の街路を闊歩し、アパートの二階を見上げ、モザイクの歩道を面白がり、「エレガんな女たち」や「たたんだビーチ・パラソルを抱えて駆けてゆく裸の子供たち」に暖かな視線を向け始めるのは。

すでに書いたように三島の旅に道連れがいなかった訳ではない。朝日新聞の特派員がつかず離れず付きそっていた。異国に暮らす邦人らとの交流もたえずあった。だが異国をゆく三島の視線はこの人らの不在の時にこそ自由にあたりをためつすがめつし、自在な感興を作家の内面にもたらすのである。旅において、ただひとりあることの効用であろう。

入隊検査で「肺湿潤と誤診」されて即日帰郷を命じられた昭和20年2月10日から7年目の、昭和27年2月13日付の川端康成宛書簡一

南米へ来ると、ブラジル人の呑気さ加減がすっかり気に入りました。こんなに気のいい連中はなく、在留邦人たちにしても、何しろ何億といふ金をもつてゐる人はざらですから、皆大きな顔をしてゐて気持がよく、ハワイや米国西海岸の卑屈な一世二世とは比べものになりません。第一教養もあり、日本に一番ちかいホノルルの連中よりずっと日本のことを知つてゐます。²⁸⁾

ここにあるのは、アメリカでは意識することもなく傷ついていた三島の自意識が見事なまでに回復している事実、これである。三島はこの後、ブラジルをぐるりと周り、再び訪れたりリオデジャネイロで謝肉祭を体験して陶酔するが、ホノルルやサンフランシスコで感じた自意識の傷つきと、リオで得たその再生ほどこの旅行を作家にとって意味あるものにした体験もなかっただろう。川端康成へ宛てて手紙を書いてから10日後の2月23日、三島は書いている。

私は四晩の内三晩を、二晩はナイト・クラブ「ハイライフ」で、最後の晩はヨット・クラブの舞踏会で踊り明かしたが、別段白人に生まれかわりたかったためではない。カルナヴァルの陶酔は、これをただ眺めようとする人の目にはいくばくの値打もないからである。その結果、私は正直に自分が陶酔したことを告白したい。²⁹⁾

7. 自意識と陶酔

このとき得たカタルシスが三島をしてギリシアの太陽を受けとめてイタリアでは作家がルネサンス美術へ目を見開かせる触媒となった。よほどこのカルナヴァルの陶酔が気に入ったのだろうが三島はサンバの舞踏を歌舞伎の花道とひとしなみに論じ、³⁰⁾ このときの経験を「快楽のあとの目ざめ」「あのルバイヤットに歌われている「死」の如きもの」と讃えている。

「右手に経典、左手に酒杯」で知られるルバイヤット（ルバイヤート）は中世イスラム世界における死と生を主題とした11世紀ペルシアの詩人ウマル・ハイヤームの四行詩集のこと。三島がカルナヴァルを見て「死」を象徴するハイヤームの詩を連想し、併せてその精神の中に「群衆」と「死」と「踊り（芸能）」が整然と連続してあるものとして意識しているあたりは面白い。いま三島について書いている私は、後年彼がみずからの死を加速させるきっかけとなった私兵「楯の会」は、演出家として数多の役者を自在に操り、ひとつのカタルシスを創造しかつそれ眺めて悦に入る彼の嗜好、その「職業経験」が別の組織に所を変えただけではなかったかと想像する者だ。本来作家の中にあつたタナトスが、カルナヴァルという生の爆発の最中にひょっと顔を覗かせて、一気に「死」を連想するあたり、この推測もあながち間違つてはいないのではないかと改めて意を強くする。死に裏打ちされた生、生の向こう側に垣間見える死、そこに人間三島の哀しみがあつた。

そしてそのエロスとタナトスが、この旅の最中、イタリアで、彼をあの有名な絵画に出会わせることになるのである。すなわち「仮面の告白」でも著者の性の目覚めをつかさどる重要なモチーフとされたグイド・レーニ作「聖セバステイアンの殉教」図に。この絵については、いずれ詳述するつもりだが、これは一部の論者によってそう主張されているように、同性愛者の守護聖人などではない。

三島は昭和23年11月2日付の川端康成宛書簡で「本当に腰を据えた仕事をしたいと思つてをります。」と書いている。「仮面の告白」という仮題で、初めての自伝小説を書きたく、ボオドレエルの「死刑囚にして死刑執行人」といふ二重の決心で、自己解剖をいたしまして、自分が信じたと信じ、又読者の目にも私が信じてゐるとみえた美神を絞殺して、なほその上に美神がよみがへ

るかどうかを試したいと存じます。』³¹⁾ この「仮面の告白」は「自分が信じた美神を絞殺する」という口吻から、また自己を神話化しようと目論む三島一流の操作も手伝って、そこに書かれた事象はすべて「真実」であると主張する声が、なお一部の論者のあいだにはある。相当の批評家の中にもなおそう信じる向きがないではない。が、ガイド・レーニ作「聖セバスティアン」図の実相と、三島が「これ」と主張する「聖セバスティアン」図の幻像と、また「仮面の告白」に書かれたこの絵の有り様とは、どれもまちまちであって、それだけでも三島の言の不確かさと言うか、あえて言えば彼独特の虚言癖（＝大言壮語癖）を感じさせないではおれない題材なのだと考えられる。

三島は「ヨット・クラブのカルナヴァル」を楽しんだ後、つと立ち寄った「ヨット・ハーバア」にのぞむ庭の椰子のかけで、女同士のある痴話喧嘩を目撃する。金髪女と栗毛の女が「髭を生やした好い年配の大男」を取り合って、つかみあい罵りあっている。この喧嘩は「太った黒衣の中年婦人」が「仲裁役を買って出」て、その機転のおかげでようやく矛を取める。その場から連れていかれる女ふたりを満足げに眺めやるやこの婦人は「みんなの注目を浴びながら胸に十字を切って」その場を後にした。三島はこの一部始終を観察した上でこう書いた、「この土地の人には、それは本当の喧嘩を見る喜びに他ならないが、私にとっては、むしろ伊太利喜劇の一齣をみるたのしみであった」と。³²⁾

いよいよヨーロッパへ向かう日がやって来た。

* * *

ここで本論の主旨からはやや逸れるが、三島もその世界の住人であった「言葉」の意味について、批評家小林秀雄の定義を引きながらざっと考察しておく。これは本稿の筆者がそれをどう考えているかについて触れるものであり、ひいては私の三島論とも響いてくる筈だから。

8. 小林秀雄の言う言葉の意味—私的概観

私は、パリへは何度か行ったことがある。長年アメリカを行き来し、職業的に英文のテキストに触れて、文芸翻訳などを生業としてきた私が初めてその目で見、その空気をふかぶかと吸って、広い世界がアメリカ以外にもあるのだなとあらためて感じさせてくれた最初の街が、パリだった。

日本の大学でフランス語を教える講師の知人が餞別代わりに彼の書いた文法書をくれた。それをばらばらひろい読みし、フランス語は入りやすく出やすいと言った、私の大学時代に教師から聞かされたことばがふと思い出された。つまりフランス語は割合に簡単な外国語だと言うのである。その教師はさらにドイツ語は入りやすく出やすい、英語は入りやすく出にくい、ロシア語は入りやすく出にくいと言った。この話を聞かせてくれたこの教師はソ連大使館とも関わりのあるロシア語の専門家だったが、当時ロシア語の初級学習者であった私の語学に対するほんやりとした不安にこのことばはスッと応えてくれて、いまだに折に触れて思い出す。

ところで批評家の小林秀雄は本居宣長の「姿ハ偽セガタク、意ハ似セ易シ」ということばを引いて、「言葉は真似し難いが、意味は真似し易いと言ふのである」と書いた。「普通の意見とは逆のやうで、普通なら、口真似はやさしいが、心は知り難いと言ふところだろう」と。ここで言葉と言うのは「古歌」のことで、つまりは万葉集のことである。

ある人が宣長に言った、「近頃世のオ子どもが古を学ぶと称して歌をよんでゐるが、そのよみ出すところを見れば、なるほど姿詞は古歌に似てゐるが、心は俗に近く、古とは大違ひであり、誰

にでも一見して似せ物とわかる、笑止な事である」³³⁾と。その人は宣長に当てつけてこう言ったそうだが、宣長はそれに応えて、「試みに、私のよんだ万葉風の歌を、万葉集の中に、ひそかに交へて置いたら、君にはこれを弁する事が出来まい」。そう反駁した。「これが予の歌、これが万葉の歌と言つて見せれば、必ず予が歌を似せ物と言はん」と。そして「姿は似せ難く、意は似せ易し」という、いま引いたことばに巡るのである。この話はその後ひろびろと範囲を広げて、西洋のデモクラシイにまで話はおよぶのだが、それはともかく、小林の考えるこのエピソードの要諦はこうである、「そんな事を豪さうに言ふのなら、本当の事を言つてやらう、言葉こそ第一なのだ、意は二の次である」と。

この話はわれわれ外国語の専門家にとっても実に含蓄に富んだもので、よく味読し玩味すべき内容を含んでいる。宣長の言う言葉、すなわち「万葉の歌の調べ」は、これを宣長の時代のひとが万葉に似せて歌おうが、歌うまいが、それが読む人に古の気分を与えようが、与えまいが、「君の眼前にあるのは、全く類似した感動を君に経験させてゐる二つの言葉の姿だけではないか」。「言葉こそ第一である」と、小林秀雄は本居宣長の「本当の事」を彼に成り代わってこう代弁したのである。

古の万葉の歌の調べと、宣長のよんだ万葉風の歌。どちらも感動を君に経験させたという点では二つの（別々の）言葉にすぎない。さて私がごく私流にこの話を解釈するとういうことである。つまり言葉は相手の耳をつかまえてこれを開かせることが出来ればもうこっちのものである、その「意」（本来言わんとした内容）などは二の次なのだ。なぜなら「言葉こそ第一」なのだから。とこう考えると所謂外国語恐怖などはこれできれいさっぱり拭い去られるのではないか。

異国の地にあつて、言葉が不確かな者どうしの意思を疎通させるゆいいつの手段は、まさに小林の言う「言葉」である。そこに万葉集と外国語の差はないと思われる。

三島は初めて見るヨーロッパにあつて、どのような言葉への思いを抱いたのだろうか。作家はこのことについて「アポロの杯」ではいっさい触れていない。若い小説家三島の胸に浮かんだ米欧の言葉とは、果たして――

以上余談であつた。

9. ヨーロッパにて

さて1952年3月3日、三島はスイスのジュネーブへ入り、チューリッヒを經由してパリに入った。パリの土を踏んで三島がまず向かった先は地元のサーカスだった。パリ有数のサーカス団、ル・シルク・メドラノで、フェリーニの映画にも取りあげられた馬による曲芸を見て、そのアクロバチックな技の数々に目を見張った。よほどこの曲芸が強い印象を残したのだろうか、人と馬によるアクロバットを見て三島は「肉体の危険」と「精神の危険」という二項の対立を思い浮かべている。肉体の危険に人はたびたびその身をさらすが、それと同じように精神の危険に出くわすこともしょっちゅうである。「そのときわれわれは曲芸師のようにかくも平衡に忠実であろうか」。もし「曲芸師が綱から落ち」るように「われわれが自ら精神の平衡を失」ったら、それは目に見える出来事ではないだけに「危険は多くかつ（結果は）重大」³⁴⁾であるだろう。

続けて三島は、

曲芸師は肉体の平衡を極限まで追いつめて見せる。しかしかれらはそのすれすれの限界を知っており、そこでかれらは引返して来て、微笑を含んで観衆の喝采に答えるのである。かれらは決して人間を踏み越えない。しかしわれわれの精神は、曲芸師同様の危険を冒しながら、それと知らずにやすやすと人間を踏み越えている場合があるかもしれない。

と、論じた上で—

思惟が人間を超えるかどうかは、困難な問題である。超えうるという仮定が宗教をつくり、哲学を生んだのであったが、宗教家や哲学者は正気の埒内にある限り曲芸師の生活智をわれしらず保っているのかもしれない。もし平衡が破られたとき実は失墜がすでに起こっており、精神は曲馬の円い舞台に落ちて、すでに息絶えているかもしれないが、そののち肉体が永く生きつづけるままに、人々は彼の死を信じないにちがいない。³⁵⁾

私は精神医学的な意味でこの用語を使っているのではないが、この描写から窺われるのは三島の精神が分裂していたという事実、これであろう—三島はこの日からほぼ7年前、兵庫県の富岡工廠で「青二才の軍医」に同情されて旧軍への入隊を拒絶され即日帰郷を命ぜられた。幼少のころは、よく知られた話であるが、実母・倭文重から無理矢理引き離されて祖母・なつの手で育てられた。覚悟をきめたはずの戦場の死を免れ、幼い頃には母と祖母との間で引き裂かれていた三島の、度を過ぎたまでの他者洞察、他人を隅々まで観察し理解しないではおれない性向は、おそらくここにその淵源があるだろう。みずからを苛んでいた自分が二つに引き裂かれているという恐怖。ここで平衡を取らなければ、その母と祖母のいずれをも傷つけてしまうという思い。本稿はあくまで1970年11月25日に起きた「三島事件」の心的機序を追究することが主眼であるので、三島の精神において想像されるこうした分裂に今は深入りはしない。が、旅先で外の世界にフォーカスせず、演劇や曲馬などを見て「肉体の危険」と「精神の危険」という観念が湧き起こってくる三島の精神世界の、その二項対立が、彼の世界観の中枢をなしてひいては彼の「生」と「死」を決定づけることになった、そのメカニズムを理會しておくことは有益だろう。このことは指摘しておく。三島はパリで、あくまで芸能にその関心をふり向ける。心が外の世界にフォーカスしていないからである。三島は周知の通り英語のかかなりの使い手であった。だが「アポロの杯」のどこを読んでも、三島が外国語で苦勞したという話はいっさい出てこない。異国でまず目に入るはずの人の姿も、大通りの賑わいも、路地裏の暗闇も、異国の言葉が飛び交うカフェも、宗教建築もレストランも、作家の目にはけっして映らない。心がそれを見ていないからである。異国ではまずおのれを護るようにして「閉じて」しまう作家の心性が、ここからも窺うことができるのだ。

いま引いたとおり三島は右の二項対立を受けてこう書いた。「思惟が人間を超えるかどうかは、困難な問題である」と。「超えうるという仮定が宗教をつくり、哲学を生んだのであったが、宗教家や哲学者は正気の埒内にある限り曲芸師の生活智をわれしらず保っているのかもしれない。もし平衡が破られたとき実は失墜がすでに起こっており、精神は曲馬の円い舞台に落ちて、すでに息絶えているかもしれないが、そののち肉体が永く生きつづけるままに、人々は彼の死を信じないにちがいない。」³⁶⁾ こうしてパリは、三島にとって、肉体と精神の平衡がきわどく保たれたサーカスとしてまず体験された。これはきわめて興味深いことである。

10. 心身の平衡

私は、大通りや路地裏ではなくサーカスを、宗教建築や異国趣味のカフェではなく、鼻先にゴム鞆を乗せて同僚とキャッチボールをする海驢（あしか）や「組合わせた十五の椅子を、口で支えてみせる男」をまずは面白いと感じた作家の、さながらポッと出の観光客めいた物見遊山ぶりをとやかく言っているわけではない。そうではなく、曲芸を見て肉体と精神の平衡を思い、海驢の柔軟な訓練された肉体を見て、「危険はわれわれの精神をして平衡へ赴かしめる」と書く作家の、敗戦から7年を経た心の有り様、内面の不如意とそのきしみについて言っているのだ。

三島は明らかにこの旅で生を希求しこれをむさぼっている。これは三島を書き手としての私の勘だが、ホノルルからサンフランシスコを経てブラジルへ至り、いまパリの土を踏んだこの世界旅行は、作家にとってみずからの肉体と精神のきわどい平衡を自覚し、その「平衡を保ちつづけることが、精神の真の機能」「精神が真に存在するという証明」³⁷⁾ という認識を得た、その意味でおそらく初めての自己確認の旅であったと言ってよい。——すなわち精神と肉体の平衡の大切さを旅先で強く自覚せざるを得ないほど、三島はいま、生を希求していたのだと。

だからこう言ってよいだろう。三島にとって生きるとは心身の平衡にあった、と。そしてこの平衡を求める心の傾きが、言い方を変えれば、どうあっても生きる側に踏みとどまっていたという心中の欲望（と言ってよいと思う）が、この後三島をしてギリシアの太陽を見、イタリアのルネッサンスを再発見させるきっかけとなったのだ、と。本稿でたびたび引用される三島初の旅行記が「アポロの杯」という書名を与えられたのも、これが理由である。

もう一つ引用する。

肉体と精神とは、やはり男と女のようにちがっている。肉体はわれわれの身を護り、もし精神の異常な影響がなければ、進んで危険へ赴くものではない。肉体はわれわれを病菌や怪我から護り、これらに一度冒されれば、抗毒素や痛みや発熱でもって、警戒と抵抗を怠らない。しかし精神は自ら進んで病気や危険に赴く場合があるのだ。というのは、精神は時としてその存在理由を示さねばならぬ必要から、危機を招いてみせる必要に迫られる場合があり、さもないと、われわれの精神は頑強に、おのれの存在を信じようとしなないかもしれないのである。³⁸⁾

精神の危機は精神の「存在理由」を示すために必要だと三島は主張している。ここからはっきりと窺われるのは三島がおそらくは頻繁に「精神の危機」に見舞われていたという事実であるだろう。その危機を合理化し統合する術を、作家はこの時点では、まだ持っていなかった。それを求める永い旅に三島は赴き、三島はついには「行動」という観念にたどり着くのだが、今は先を急がないようにしよう。

ワルツやルンバを踊る馬や陽気なクラウン（ピエロ）たちが演じる幕間狂言を楽しんだ後、三島はパリを後にして、ロンドンの人となった。

11. 精神の錬磨

さて、パリは何度か訪れたことがあると先に書いた。パリを訪れたことのある人なら、あの独特の退嬰的な雰囲気は感じたことがあるだろう。誰も彼もがそっぽを向いて、好き勝手にめいめいの時間をむさぼりながら、それでいて誰も彼もが幸福感に満ちあふれ、結局は自由な、退廃の空気を思う存分に味わって、次なる快楽を求めてメトロの駅へ、角のカフェへ、公園へ、吸い寄せられていく、世にも稀な、中心を欠いたような混乱の時間を経験して、陶然とした覚えが。旅先にあつて、まだ街角の意味も判らないままにこわばった精神が、その混乱の最中に一気にほぐされて、目の前に開けるパリの下町や、有名人が集ったというカフェや、レストランや、公園や、大作家が大小説に描いた一角を我が靴で踏みつけて、マレ地区の隠れ家や不穏な曖昧屋をおそろおそろ横目に過ぎ、大寺院がそびえ立つ丘からこの古い町並みを見下ろして、やっとの思いで歩き疲れた身体を引きずるようにしてメトロの階段を下りてまた上がる。カルチェラタンの町を背中に背負ってぐるとあたりを見回す—そのときに感じた絶対的な解放感。圧倒的な自由感。世界と自分とが対等に存在し、その二つをさまたげるものは何ひとつ存在せず、少なくともいまの自分のこの精神の高揚を上回る人間の感情は、どこにも、ひとつも、ないという唯一にして無二の実存の感覚。すべてが完全に、自由に、自分の前に開かれているという放埒な研ぎ澄まされた思い。その四方八方に広がって輝く精神の錬磨と高揚は旅人が町と出会う最も幸運な一瞬であるだろう。町と出会い、人と出会うというこの幸福を、しかし三島はパリで——どこであれ——覚えることはなかった。三島は書いている。「私は巴里が好きではなかった。」と。「巴里滞在を一か月半に及ぼしめたあの盗難事件ばかりではなく、巴里では私の心身を疲れさせる瑣事が次々と起こった」と。そしてついにはこう書いた、「一刻も早く私は巴里を遁れたかった。」³⁹⁾

そして1952年4月20日の日曜日、三島はパリにこう捨て台詞を残してロンドンの人となる。「忌まわしい巴里を遁れた喜びのために、(ロンドンの)郊外住宅の見事なローンや、小公園の池の反映や、日本のそれとまがうなつかしい褐色の光沢を帯びた葉と鄙びた紅い花をたわわにつけた山桜は、この上もなく美しく見えた。」⁴⁰⁾

ロンドンの街は三島に強い印象を与えたのだろうか。否。そうではない。滞在わずか4日、コヴェント・ガーデン帝室歌劇場でベンジャミン・ブリットン Benjamin Britten の歌劇「ビリー・バッド」(ハーマン・メルヴィル原作)を、フェニックス劇場でシェークスピアの喜劇「からさわぎ」を、英国アカデミー賞作品賞を前年に受賞したばかりのフランス映画の佳品「輪舞」(マックス・オヒュルス監督)を鑑賞した他は、作家はバスを使ってギルドフォードへ小旅行に向いたばかりであった。

そして三島はギリシアへ入る。

12. 太陽に乾杯

「希臘は私の眷恋の地である」「今日も私はつきざる酩酊の中にいる」⁴¹⁾ 悠久の時を経て、今まさに廃墟となりながら、人類の歴史の不可思議な塩梅によって永遠の生命を与えられたあの王城アクロポリスを前にして三島は、「今、私は希臘にいる。私は無上の幸に酔っている」とその酩酊ぶりを素直な筆で書いている。実は「アポロの杯」——本稿が絶えず参照しているこの不思議な旅行記——は、ここギリシアに至って、ようやく紀行文の体裁を取り始めると言って、言い過ぎでは

ないだろう。なぜならそれは三島が「開かれた」からである。それまで劇場をはしごし、流行の映画をひやかし、路地もカフェも女も（これについては諸説あるが）、食事や酒もほぼ目もくれなかった三島がいま、日没に沈むギリシアの山々を凝然と眺め、「黄金にかがやく希臘の胃のような夕雲」を見て、「希臘」とつぶやく。そして花々にも等しい絢爛な比喻を織り交ぜながら懸命に旅にあることの幸福を語り出すのである。それも世界周遊の旅に出て4カ月目、ようやくここギリシアまで足を伸ばして初めて。どうしてだろうか。

ホノルルへ向かうウィルソン大統領の船上で日系の老婦人に皮肉な視線を向け、ニューヨークでは黒澤の名画をほぼ無視し、リオデジャネイロでようやく祭り気分に入るも、パリでもロンドンでも旅人になり得なかった。その三島がここギリシアではあられもなく旅にあることの幸福を語っている。「眷恋の地」などと言う言葉まで駆使して彼の地への恋心をあらわにする。感動を口にする。それはどうしてだろうか？

どうして？ どうしてかと言えば、一度は滅びて廃墟となったアクロポリス—ギリシアそのものが、つまりはギリシアの「死体」が時の風雪に洗われて気がついてみると輝かしい太陽の光をいっぱい浴びて現代に甦っている、その再生のイメージ、「転生」の実例をわれと我が目で見てそれが三島の琴線に触れたのだと、ここまで三島を書いてきた私はほぼ絶対の確信をもってそう考えている。

いつの頃からか自らを「死すべき存在」と幻視していた。これまで自ら死の側に立って自らの死に言及した文章をそれこそ数多く発表してきた。しかしこの世界周遊旅行の最中、三島はギリシアの「死体」を見て、その上に広がる大きな青い天蓋に包まれて確かに「再生」した。だからこそ、

「太陽に乾杯」一なるほど。

けだし付けも付けたりというべき書名ではないか。

13. おわりに

私は、本稿において、生来三島には「死」への傾きがあったことを指摘した。そして「アポロの杯」の旅の最中、リオデジャネイロでは旅にあることの陶酔を、ギリシアでは「輪廻転生」という観念を経てではあったものの「生」の強い欲動をそれぞれ感じたことを、三島の心の起伏の問題として、指摘した。幼年の平岡公威が心の裡で「死」に囚われていたことは、本稿にも引用された12歳のときの詩「寂秋」からも窺える。この通り、三島には「死」と「生」を往還する心の傾きがあった。

だが考えてみて欲しい。およそ日常生活を営むわれわれにあって、「死」と「生」の行ったり来たりを経験せざるを得ない瞬間など、日々どれほどの機会を訪れるものであろうか。

三島はこの意味で、三島由紀夫になる以前の幼い平岡公威の頃から、ある種の悲劇性を帯びた人格として、自身の「終わり」を意識しないではおれない心性に囚われていたと言ってよいだろう。

だがその三島にも、大らかに陽の光を浴び、旅のフィエスタに酔い、生きてあることの実存を思い切り味わった瞬間、瞬間があった。本稿は、その三島の裡に存在した「生」の欲動を、それを作家に与えてくれた旅の記憶に焦点を当てて解剖した、三島由紀夫の光の側面を巡る論考である。今後、1970年11月25日に発生した出来事の、当事者としての心のメカニズムを解明していくにあたって重要なモチーフが多々含まれていると、三島を書く者としての私は、強い確信をもって考えている。

前作で「事件」の概要と「青二才の軍医」の存在に迫った以上、本稿は当然のように書かれなくてはならなかった。いまだ熟し切っていない部分もあろうとは思いますが、取りあえず公にして、読者の叱正・ご批判に本稿を委ねたいと思う。

注

- 1) 三島由紀夫「アポロの杯」(新潮文庫) 8.
- 2) 同書, 8.
- 3) 同書, 13.
- 4) 同書, 13.
- 5) 同書, 14.
- 6) 同書, 18.
- 7) 同書, 20.
- 8) 同書, 21.
- 9) 同書, 23.
- 10) 同書, 23-24.
- 11) 同書, 26.
- 12) 同書, 26.
- 13) 同書, 39.
- 14) 「アポロの杯」という書名はギリシアの星座から取ったと三島本人が言っている。それによると、三島はこの本の扉の裏に、「ある日アポローンは使はしめの鴉にこの杯をわたして水を汲ませにやつた。」と、英文学者で天文学にも造形が深かった野尻抱影から聞いた話を紹介している。そして「怠惰で気の多い鴉は、道すがら見た無花果の樹の下で、その実の熟して落ちるまで待つたのち、水蛇(ヒドラ)つかんで飛びかへり、「この蛇がゐたので遅くなりました」と嘘言を奏した。その報いを以て鴉は水蛇と杯と共に星に変へられ、杯を目前にしながら、永遠の渇に苦しめられてゐるのである。」と三島はその由来を書くが、本稿で明らかにしたように、この説明はいかにも後付けの理屈と言うべきである。
- 15) Demuth, Charles. (1883年11月8日～1935年10月23日) ペンシルヴェニア州ランカスター生まれ。アメリカの水彩画家。対象を精密に眺め無機質な画風で描く所謂プレシジョンニズムの創始者として名高い。
- 16) 三島が見て感動したというDemuthのThe Figure 5 in Goldについては、別掲の写真を参照されたい。
- 17) アイリッシュは当時の即興演奏について書いている。「クラリネットの悲しげな音色を、合図に、狂気の演奏が始まった。／つづく二時間は、ダンテの描く地獄そののけであった。これがおわったあとも、実際にあったこととはとても信じられないだろう、と思われた。それはてんで音楽ではなかった。音楽はもっと快いものはずだ。それは、かれらの影がうつしだす魔の走馬燈であった。影は黒々と浮かびあがり、四方の壁の天井までふくれあがって揺らめいた。」(稲葉明雄訳「幻の女」早川書房214-215) 名手稲葉明雄にしては詰まらない訳だが、それはともかく、三島がこの音の興奮を味わわなかったのは残念であった。
- 18) 三島, 前掲書, 47.
- 19) 同書, 45.
- 20) 同書, 44.
- 21) 同書, 48.
- 22) 東京国際大学論叢に2016年発表した論文「三島事件の心的機序の研究——「仮面の告白」の虚偽を中心に——」37-39を参照のこと。
- 23) 三島, 前掲書, 48-49
- 24) 同書, 49.
- 25) 同書, 49.
- 26) 同書, 51-52.
- 27) 同書, 51-52.

- 28) 川端康成 三島由紀夫 「往復書簡」70.
- 29) 三島, 前掲書, 84.
- 30) 三島によると「われわれのすぐ目の前を, 登場人物たちがわれわれの存在に毫も気づかすにとおりすぎてゆくところ」(同書, 85-86)にこれら二つの芸能の類似はあると言う.
- 31) 川端康成 三島由紀夫, 前掲書, 52.
- 32) 三島由紀夫「アポロの杯」88.
- 33) 日本文学全集42 小林秀雄集(筑摩書房)426.
- 34) 三島, 前掲書, 94.
- 35) 同書, 94.
- 36) 同書, 94.
- 37) 同書, 97.
- 38) 同書, 96-97.
- 39) 同書, 102.
- 40) 同書, 103.
- 41) 同書, 108, 112.

引用文献(引用順)

- 三島由紀夫「アポロの杯」(新潮文庫, 昭和57年).
川端康成 三島由紀夫「往復書簡」(新潮社, 1997年).
小林秀雄「小林秀雄集 日本文学全集42」(筑摩書房, 昭和45年).
安藤武「三島由紀夫「日録」」(未知谷, 1996年).
三島由紀夫「決定版三島由紀夫全集 第42巻 年譜・書誌」(新潮社, 2005年).

参考文献(あいうえお順)

- いいだ・もも「三島由紀夫 その死とその世界」都市出版社, 1970年.
石原慎太郎「石原慎太郎対話集 酒盃と真剣」参玄社, 1973年.
石原慎太郎「三島由紀夫の日蝕」新潮社, 1991年.
猪瀬直樹「ペルソナ 三島由紀夫伝」文藝春秋, 1995年.
大谷敬二郎「二・二六事件 流血の四日間」図書出版, 1973年.
加藤周一他「日本人の死生観」上下 岩波新書, 1977年.
梶谷哲男「パトグラフィ双書⑦三島由紀夫 芸術と病理」金剛出版新社, 昭和46年.
軽部茂則「インパール ある従軍医の手記」徳間書店, 1979年.
佐渡谷重信「三島由紀夫における西洋」東京書籍, 昭和56年.
司馬遼太郎「世に棲む日々」文春文庫, 2003年.
澁澤龍彦「三島由紀夫おぼえがき」中公文庫, 1986年.
水津謙二「三島由紀夫の悲劇 病跡学的考察」都市出版社, 1971年.
杉原祐介・剛介「三島由紀夫と自衛隊 秘められた友情と信頼」並木書房, 1997年.
杉山隆男「兵士に告ぐ」小学館文庫, 2014年.
杉山隆男「兵士に聞け」新潮文庫, 2013年.
杉山隆男「『兵士』になれなかった三島由紀夫」小学館文庫, 2010年.
鈴木亜繪美「火群のゆくへ 元楯の会会員たちの心の軌跡」田村 司監修, 柏艸舎, 2005年.
戦時下の小田原地方を記録する会編「市民が語る小田原地方の戦争」, 2000年.
徳岡孝夫「五衰の人 三島由紀夫私記」文春文庫, 2015年.
中村彰彦「烈士と呼ばれる男」文藝春秋, 2003年.
日本学生新聞社編, 「回想の三島由紀夫」行政通信社, 1971年.
野坂昭如「赫奕たる逆光」文藝春秋, 昭和62年.
林 房雄, 三島由紀夫「対話・日本人論」夏目書房, 1966年.

- 福島次郎「三島由紀夫——剣と寒紅」文藝春秋，平成10年。
藤井治夫「自衛隊クーデター戦略」三一書房，1974年。
松本清張「昭和史発掘 9」文藝春秋，1978年。
松本徹編著「年表作家読本 三島由紀夫」河出書房新社，1990年。
松藤竹二郎「三島由紀夫 残された手帳」毎日ワンス，2007年。
持丸 博，佐藤松男「三島由紀夫・福田恒存 たった一度の対決」文藝春秋，2010年。
三島由紀夫，東大全学共闘会議駒場共闘焚祭委員会（代表 木村 修）「討論 三島由紀夫VS.全共闘〈美と共同体と東大闘争〉」新潮社，1969年。
三島由紀夫「真夏の死——自選短編集——」新潮文庫，昭和45年。
三島由紀夫「若きサムライのために」日本教文社，1969年。
三島由紀夫「三島由紀夫語録」鷹書房，1975年。
三島由紀夫「金閣寺」新潮文庫，2003年。
三島由紀夫「荒野より」中央公論社，昭和42年。
三島由紀夫「癡王のテラス」中央公論社，1969年。
宮崎正弘「三島由紀夫『以後』」並木書房，1999年。
宮崎正弘「三島由紀夫の現場」並木書房，2006年。
村上建夫「君たちには分からない 『楯の会』 で見た三島由紀夫」新潮社，2011年。
山崎正夫「三島由紀夫における男色と天皇制」グラフィック社，1978年。
山本舜勝「自衛隊『影の部隊』——三島由紀夫を殺した真実の告白」講談社，2001年。
ラディゲ，レイモン「ドルジェル伯の舞踏会・肉体の悪魔」江口 清訳，三笠文庫，1952年。
「三島由紀夫研究③三島由紀夫・仮面の告白」鼎書房，2006年。
「三島由紀夫研究⑥三島由紀夫・金閣寺」鼎書房，2008年。

* 発行年は，引用文献・参考文献とも，奥付の表記をそのまま使用した。



研究ノート

大学野球の期分けにおける一般的準備期のランニング トレーニングが試合期の大学生投手の実戦状況下 パフォーマンスに与える影響

赤 池 行 平

The Effect of Pre-Season Running Training for Game Performance of University Baseball Pitcher

AKAIKE, Kohei

Abstract

This paper provides useful information for university baseball players and coaches as well as amateur baseball players. Almost all amateur baseball teams in Japan make time for running training during baseball pitchers' practice. There are few evidence-based guidelines for running training, so this research will provide some underlying principles for pre-season running training programs for pitchers.

This study involved three groups. The first group contained the members of a university baseball team whose running training included middle distance running, which aimed to improve the subjects' lactate thresholds, and short sprints, which were designed to improve their sprinting ability (the MD1 group; study period: from December 2012 to June 2014). The second group contained the members of a university team whose running training included wind sprinting, which aimed to improve their running form (the WS group; study period: from June 2014 to December 2015). The last group contained the members of a university baseball team whose running training involved larger amounts of middle distance running and short sprints than the MD1 group (the MD2 group; study period: from December 2015 to June 2016).

The MD2 group performed the short sprints fastest. However, there were no differences in agility or and lactic acid tolerance among the groups.

As for the pitching results obtained during the official university baseball tournament, the pitchers who did extremely well in the tournament tended to be from groups MD1 and MD2. So this study suggests that pitching ability is based on high potential and training involving programs targeting the lactate threshold, short sprinting ability. We conclude that pre-season running training for university baseball pitchers must include exercises aimed at improving maximum speed and effort as well as middle distance running and short sprints.

Key-word: Running training for university baseball pitcher, Pre-season running training, Lactate Threshold Training, Short sprint training, Wind-Sprint Training

目 次

- I. 緒言
- II. 目的
- III. 方法
 - 1. 大学野球の年間スケジュール
 - 2. 投手陣のランニングプログラム
 - 3. MD期のランニングプログラム
 - 4. WS期の目的
 - 5. 検証
- IV. 結果
 - 1. PTの比較
 - 2. 公式戦の成績
- V. 考察
- VI. 結論

I. 緒 言

あらゆるスポーツ競技において、体力強化の基本としてランニングは欠かせないトレーニングとして認識されている。ただ単に長い距離を走り続けるだけでなく、1,500 m程度の中距離走を数セット行う、あるいは100 mの短距離ダッシュを繰り返し走るなど、トレーニングとしてのランニングには多くの方法がある。また、アスリートの体力レベルによって、それが疲労度の高いトレーニングなのか、あるいは試合前の調整レベルのトレーニングなのかが変わってくるため、万人に当てはまる明確な基準はない。しかし、過去に一流と言われた多くのアスリートが「走ること」の重要性を説いていることを考えると、ランニングトレーニングに関する研究を行うことは、アスリートのパフォーマンス向上に利益をもたらすことができると考えられる。

野球はその競技特性から、運動継続のためのエネルギー供給機構はフォスファゲン系（以下ATP-CP系）・乳酸系に大部分を依存する。^{1), 6)}特に投手は他のポジションとは違い、試合では爆発的な筋パワー発揮を何十回、時には百回以上も繰り返す必要がある。単に投げるという動作は爆発的な筋パワーを必要とする動作であり、有酸素系代謝機構に負荷はあまりかからない。またパワーは「力×速度」で示されることから、その側面だけを考えてウエイトトレーニングで力発揮能力を高めることが不可欠な要素と考えられがちである。しかし、過去にプロ野球で活躍した選手達は、投手のトレーニングにおいて重要なこととして「走ること」を第一に挙げている。プ

口野球経験者だけでなく、アマチュアの指導者や選手もそれを認識しており、レベルの高い野球チームのランニングトレーニングの内容は、量も質も非常に高いレベルにあるようである。³⁾

競技スポーツとしての野球を、選手・指導者として合計17年間（選手7年間、指導者10年間）携わり、競技の第一線にいた経験を顧みても、しっかりランニングをやっているチームの投手陣はレベルが高かった。また、投手力のいいチームは野球関係者から決まって、「よく走ってる」という評価をされていた。その一方で、一時期活躍していても故障等で成績が落ちてきた場合には、周囲の評価は「走り込んでいないから」に変わった。野手の経験しかない指導者も現場に立った時は、「投手は走れなくてはだめだ」というアドバイスをしているようである。また、投球練習と筋力トレーニングだけでピッチャーとして成功した選手は、現に見当たらない。しかし150 g弱のボールを投げるために、なぜ走らなくてはならないのか。

この理由として次のようなことが考えられる。その一つは、投手に求められる技能の難易度が高いことである。130 km/h ~ 140 km/hの速度のボールを狙ったところに正確に投げる技術を習得することは、一朝一夕で習得できるものではなく、しかも投げる球種はストレートだけでなく変化球も必要になる。例えば、カーブを投げるときはコッキングからボールリリース時まで投球腕の外旋を維持するように意識するなど、変化球の種類によっては、人間の体の構造上、自然ではない動作が強いられるものもある。しかも、それを何十回と繰り返さなくてはならず、さらにそれを試合のたびに実行出来るだけの回復力も求められる。このため、投手がランニングを重視し、多くのランニング量をこなすことで、ATP-CP系・乳酸系だけでなく有酸素系代謝機構にも負荷をかけ、高い回復力を獲得することができるものと考えられる。^{3), 5)}

もう一つの理由として、宮川（2007）による報告がある。⁵⁾ すなわち、ランニングをすることによって「ポジショニング（体肢の位置を正確に決める能力）」、「グレーディング（筋の出力の強さの調整能力）」、「タイミング（筋の出力時刻の調整能力）」を自然に獲得でき、それが投球動作のバランスの向上に貢献できるということである。⁵⁾ このことから、投球動作は他のスポーツ種目と同様に、片脚支持の局面が長く走る動作に近い部分があることや、投手は利き腕で投げる動作を繰り返すため、左右で負荷がかかる部位が異なり、それが蓄積することが故障につながるという考えに基づき、投球動作で偏った負荷をかけた身体のバランスを整え、故障を防ぐことも、投手がランニングを必要とする理由として考えられる。⁴⁾

Ⅱ. 目 的

本研究は、野球の練習における投手陣のトレーニング種目の一つである「ランニング」に焦点を当てている。競技スポーツのパフォーマンス向上のためのトレーニングに関する研究が進み、多くの効果的なトレーニング方法に関する情報が誰でも簡単に入手できる現在でも、依然として投手のトレーニングでは、ランニングが一番重要とされている。⁷⁾

しかし投手の練習で、どれだけの距離を走れば良いのか、どのような内容のランニングを実施すれば良いのかなどに関する、明確な指針を与える国内の研究は現在のところ存在せず、競技成績（実績）を残した人の経験則に従っているのが実情である。しかし、米国の大学野球を対象にしたものには、Colemanによる投手のコンディショニングプログラムを提案したものがあり、その中に代謝系トレーニングとしてランニングプログラムが紹介されている。¹⁾ 日本国内では、書店に置かれている投手の指導書はあっても、投手のランニングに特化して具体的に言及しているものは少ない。

本研究では、「投手の練習におけるランニングトレーニングの内容と、試合における投球パフォーマンスの関係」という観点で考察していく。しかしランニングの内容だけが、直接的にそのチームの投手力を左右するわけではなく、投手が試合で勝利に貢献するためには、直球も変化球もコントロールよく投球し、余計な四死球を与えず、なおかつ判断良く守備も行うことができ、盗塁を簡単に与えないように牽制球も上手くなければならぬ。このため、投手の練習内容は、ただ投げるだけではなく、単純なものでは、ゴロ捕球からの正確な送球練習、牽制球を投げる練習、セットポジションからクイックモーションの練習などが必要となる。また、試合状況や打者のタイプによってどのように配球するのかなど、実戦練習の中でしか習得できないものもある。以上のことから、選手として実績を残した指導者の教え方や、著者自身が感じた経験を、科学的に分析した結果と比較検証してみることは、今後の投手陣の練習に対して一つの裏付けや方向性をもたらすと考えられ、本研究を行うに至った。

Ⅲ. 方 法

埼玉県私立T大学硬式野球部の投手を対象にした。同大学野球部の練習で実施された投手陣のランニングプログラムが、部内で定期的に行われるフィジカルテスト（以下PT）の計測結果に与えた影響を調べる。さらに、ランニングプログラムがPTで表された身体能力に影響を与え、それが公式戦での投手成績に何らかの影響を及ぼす可能性を考察する。

1. 大学野球の年間スケジュール

大学野球の公式戦は、春期・秋期の年2回行われる。各地区の大学野球連盟によって開催方法や時期は多少異なるが、多くの場合は春期が4月から5月、秋期が9月から10月のそれぞれ約2か月間である。総当たりによるリーグ戦方式か、負けたら終わりのトーナメント方式かも連盟によって異なる。大学の授業があるため、試合は週末か平日の決められた曜日に行われる。公式戦の準備期にあたる練習期間は、春期が前年の11月下旬から始まりリーグ戦開始前の3月上旬まで、秋期が6月から8月がそれに該当する。この期間中でも3月と8月は、ほぼ毎日練習試合が組まれるため、準備期の中でも専門的準備期として、実戦練習に焦点を当てる時期となる。体力強化や基本技術に焦点を当てられる一般的準備期としては、春期が前年の12月から翌年の2月、秋期が6月から7月である。表1に大学野球での期分けの例を示した。

2. 投手陣のランニングプログラム

同大学硬式野球部投手陣の一般的準備期におけるランニングプログラムは、下記1)～3)のように内容を変え、それに基づいて選手群を分けた。

表1 大学野球における期分けの例

12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	
一般的準備期			専門的準備期	春期公式戦（リーグ戦・全国大会等）		秋期準備期	
7月	8月	9月	10月	11月			
一般的準備期	専門的準備期	秋期公式戦（リーグ戦・全国大会等）					

1) 中距離系種目と短距離系種目を組み合わせた期間

2012年12月から2014年6月は、期間中に3回の公式戦（2013年春期，2013年秋期，2014年春期）が行われたが、各公式戦の一般的準備期においては1日のプログラムを、1,500 m～3,000 mの中距離走と、30 mから200 m程度の短距離走、または400 m～500 mの耐乳酸性能力向上のプログラムなどを組み合わせて、合計距離が約3,000 mになるようにした。各種目とも選手の走力別にタイム設定をして一定の強度を保ち、選手によって強度が落ちないように配慮した。ランニング内容は中距離系と短距離系であったため、期の名前をMiddle & Dash 1期とした（以下MD1期）。MD1期に実施されたPTに参加した被験者を以下MD1群とする。

2) 快調走のみを実施した期間

2014年6月から2015年12月は、公式戦の一般的準備期において快調走（Wind Sprint，以下WS）を、疲労が蓄積しない量の範囲内で行った。100 m～200 mの距離のWSをタイム設定無しで毎日実施し、週に1回は3,000 m走を、余力を残して走る方法で実施した。全力で動作する局面は、投手陣の守備練習に限定した。この期間の公式戦は2014年秋期，2015年春期，2015年秋期の3シーズンで、WSを主に実施したため、期の名前をWS期とした（以下，WS期）。WS期に実施されたPTに参加した被験者をWS群とした。

3) 中距離系種目と短距離系種目を組み合わせ、量を増やした期間

2015年12月から2016年6月は、公式戦（2016年春期）の一般的準備期において、1日のプログラムを、1,500 m～3,000 mの中距離走に、30 mから200 m程度の短距離走、または400 m～500 mの耐乳酸性能力向上のプログラムなどを組み合わせて実施した。MD1期よりも1日当たりのランニング量は多く、約4,000 mを行うように計画した。各種目とも、選手の能力別にタイムを設定し、強度が落ちないように配慮した。MD1期との違いは、期間が短く約半年ということと、ランニング量が増えたということである。MD1期のランニング内容を復活させた理由は、「4. WS期の目的」で後述する。MD1期の内容に量を増やした形で実施したため、期の名前をMiddle & Dash 2群とした（以下MD2期）。MD2期に実施されたPTに参加した被験者を以下MD2群とする。

上記3群の選手全てに本研究の主旨を説明し、ランニングトレーニングからPTの結果、そして公式戦の成績も研究対象とする旨、了解を得た。

MD1期とMD2期で行ったトレーニング種目は以下の通りである。この中にはColemanの文献を参考に考案したトレーニング種目や、著者の経験から考えたもの、他チームから取り入れた種目など様々である。¹⁾ また、これらの種目名は独自に考案したものであり、中には指導現場で、単に言いやすいという理由でつけたため、意味のない名前もある。各種目の距離はT大学硬式野球部専用球場での概算距離であり、他の球場では必ずしも当てはまらない。ランニングプログラムは以下のメニューの中から選んで作成し、毎日の投手陣の練習で行われた。

- a) ポールtoポール（以下PP）：右翼と左翼のポール間をフェンス沿いに走行するダッシュ（約180 m）
- b) ポールtoセンター（以下PC）：右翼または左翼ポールからセンターバックスクリーンの真ん中までを、フェンス沿いに走行するダッシュ。（約90 m）
- c) ジャングル：PC後、ジョグでスタート地点まで戻り、指示されたエクササイズを行う。エクササイズ後に即PCを再スタートする。これを10回行う。（約900 m）
- d) ハーフシャトル：PC往復に、さらにポールから照明（右中間または左中間）の往復ダッシュを行う。（1回あたり約270 m）
- e) 照明・センター・照明・ポール10/8/6/4（以下LCLP 10/8/6/4）：右翼ポールをスタートして右

中間照明灯前まで10回ダッシュする。その後、PCを8回走る。その後、右翼ポールから左中間照明灯前まで6回走る。最後にPPを4回走る。スタートまで戻る時は、全て歩く。(約2,700 m)

- f) 6/6/6 : PCを走り、スタート時から1分後に2回目を走る(この方法は現場では1分PCと呼ぶ。以下1分PC)。これを6回行う。次にPPを走り、スタート時から2分経過後に2回目を走る。(この方法を現場では2分PPと呼ぶ。以下2分PP)。これを6回行う。その後、再度1分PCを6回行う。計18回の走行を、指定された休憩時間を守り全力で走る。(約2,160 m)
- g) 30/20/10ダッシュ : 30 mダッシュしてスタートに戻り、20 mダッシュして戻る。さらに10 mダッシュして、これを1回とする。名前は「三十、二十、十ダッシュ」と呼ぶ。(1回あたり60 m)
- h) 30 mスパイクダッシュ : 土の上をスパイク着用下でダッシュ。(1回30 m)
- i) 超短ダッシュ : 15 m程度の距離を最大努力でダッシュする。(1回15 m)
- j) 球場外周5周 (以下G5) : 球場外周555 mを5周。(約2,775 m)
- k) 球場外周3周 (以下G3) : 球場外周555 mを3周。(約1,665 m)
- l) 球場外周1周 (以下G1) : 球場外周555 mを1周。(約555 m)
- m) 球場外周10周 (以下G10) : 球場外周555 mを10周。(約5,550 m)
- n) 乳酸ダッシュ : 10 kgのバッグを担いでスクワットを30回行い、その後即G1を走る。これを、休憩を入れずに3～5回行う。回数は状況により決める。
- o) フルシャトル : 右翼ポールからPP往復、左中間照明前往復、PC往復、右中間照明前往復。これを、休憩を挟まずに最大努力で走行する。(1回約900 m)

MD1期では、上記のメニューからプログラムを組み、1日当たりの走行距離が3,000 mを超えるように計画をした。MD2期では量を増やす目的で、1日当たりの走行距離が4,000 mになるように計画をした。種目によってはタイム設定が難しいものもあった。そのような種目では、その選手が全力で走っているのかを監視するように努めた。それは、ジャングル、LCLP、666など、フェンス沿いで走るメニューのため、人数が多くなると選手ごとのタイム計測が困難であったためである。

一方、WS期に実施したプログラムはPPとPCを全力で走らず、各個人の最大速度の80%程度でフォームを崩さないように走るものとした(PPでのWSを以下WSPP、PCでのWSをWSPCとする)。実施回数は日によって変えたが、WSPPとWSPCの合計で15回～20回になるように計画した。

投手陣の練習は、大きく分けて「投球練習」、「守備練習」、「ランニング練習」、「筋力強化運動」の4項目である。筋力強化運動や、投球練習、守備練習などの内容は時期により多少の変化はある。しかし大幅な方針の変更や練習時間の増減は、本研究期間中は無かった。ただし、これらの要素が選手のコンディションに影響を与えるのも事実である。

※本研究では投手の「ランニング練習」に焦点を当てているが、それ以外の3要素も完全に無視できないものであるため、本研究の分析結果から導かれるもののみで判断することが困難であることは、この研究における限界と考えている。

3. MD期のランニングプログラム

MD1期のランニングプログラムを組む時は、短距離系種目と中距離系種目を合わせて、1日当たりの平均走行距離が約3,000～3,500 mとなるようにした。またMD2期では、1日当たりの平均

走行距離を約4,000 mになるようにした。短距離系種目は、休憩時間をどれだけとるかで目的が変わってくるため、休憩を短くして走行本数を多くすれば乳酸性代謝機構に負荷がかかり、完全休息で走行本数を少なくすればATP-CP系機構がエネルギー供給のメインになり、最大速度向上を図るトレーニングになる。Ⅲ. 方法の章の2. 投手陣のランニングプログラムで紹介した様々なトレーニング種目の中から、日によって組み合わせを変えながらプログラムを作成し選手に提供した。その際の考え方を以下に記す。

大学野球は週末の土曜日と日曜日に試合になることが多い。日曜日にカードの勝敗が決すると、翌月曜日は練習が休日になる。火曜日から練習を再開し、次のカードがある土曜日までは練習が4日間あることになる。その場合、例として休日明けの火曜日は有酸素性代謝、あるいは乳酸性代謝機構に負荷をかけ、休んだ身体を起こす。水曜日にはシャトルランを行い下肢筋群に刺激を与え、100 m～200 m程度の短距離走も行う。木曜日にはさらに短い距離、100 m以下のダッシュを反復して身体の高め、試合前日の金曜日には試合前に行うランニングプログラムと20 m程度の初期加速局面に焦点を当てた種目を行う。このような公式戦期間中のランニングプログラム作成の考え方の原則に従い、MD1期とMD2期の一般的準備期においても、各日の焦点を絞ったランニングプログラムを作成するようにした。

4. WS期の目的

MD1期の次にあたる期としてWS期を導入した目的は以下の通りである。同大学野球部ではウォーミングアップにおいて、基本的な運動の正しい動作作りの種目は行うが、MD1期の投手陣のランニングの時間には、ランニングフォームの具体的な指導は行わなかった。そのMD1期のランニングプログラムは、まず設定タイム以内で走ることが優先され、選手はそのタイムを切ることに集中をする。そのような状況下ではランニングフォームよりも、いかに速く走るかに選手は集中することになり、動作改善に至らないのではないかとという疑念を抱いた投手担当コーチが、投球動作とランニングフォームは似ている要素が多く、走動作改善が投球動作改善につながるという考えを提唱し、それに基づいたうえでの変更であった。⁴⁾ そのため、WS期のランニングは最大努力で走るプログラムを無くし、全力で走る状況は守備練習のゴロ捕球の場面か、投手コーチが特別に指示した時のみであった。

しかし、WS期に入り公式戦を経ていくうちに、試合での数値で表される絶対的な評価ではなく、感覚から「投手陣の質が落ちてきている」と感じ始めた。野球界の言葉で表現すると、「真っすぐが来ない」、「変化球の切れ、制球ともレベルが低い」、「一時的に良くなっても、その状態が続かない」、「精神的に切れやすい」という感じである。このため、根本的な目的であった「走動作改善から投球動作改善」に向かっている様子が感じられなかった。

そのような低調な状態が続いたため、2015年秋の公式戦終了後にランニング内容を再度MD1期の方法に戻し、量もMD1期よりも増やした。このため、毎日のランニングプログラムにタイム設定をし（選手の能力を考慮し個々に設定）、日々漸進的に強度を高めていった。このような段階を経て、タイム設定をして実施したMD1期の走行量を超える、1日平均約4,000 mの走行量をMD2期に設定した。

5. 検証

同大学野球部では定期的（半年に1回）にPTを実施している。PT実施の対象者は全部員ではなく、公式戦メンバー候補を監督以下コーチ陣が話し合い、毎回選出している。また本研究の対象

者は、選出された選手のうち、ポジションが投手の選手のみとした。走力測定では30 mダッシュ（短距離走速度）、T-テスト（敏捷性）、25ヤードシャトルラン（耐乳酸性能力）の3種目を行い、これらの測定結果を基に、MD1期のランニングプログラムを実施した選手（MD1群）とWS期のランニングプログラムを実施した選手（WS群）、さらにMD2期のランニングプログラムを行った選手（MD2群）の3群間でタイムに差があるのかどうかを調べた。PTは2013年12月、2014年12月、2015年12月、2016年7月にそれぞれ実施した。PTは2013年7月、2014年7月、2015年7月にも予定されていたが、天候等の理由により延期できず、実施を中止した。2015年12月は、翌年の春期公式戦の一般的準備期にあたるが、PT実施時はMD2期のランニングトレーニングを行う前だったため、WS期の測定として扱う。これらPT実施時期と被験者3群を表2に示す。そして分析には、測定3種目（30 mダッシュ、T-テスト、25ヤードシャトルラン）で、それぞれ一元配置分散分析法による検定を行い、帰無仮説の棄却性を調べた。その結果、帰無仮説が棄却されて、いずれかの群間に有意な差があると判断された場合は、多重比較法を用いた。多重比較法では、3通りある2群間の組み合わせで、群間が等分散であると仮定された場合はFisher'sPLSD法を用いること、群間が等分散ではないと仮定された場合はDunnett法を用いることとして、どの群間の組み合わせに有意な差があるか調べた。分析にはIBM SPSS Statistics Version 23を使用した。

ここでPTの3種目の測定方法を以下に記す。

1) 30 mダッシュ

30 mダッシュのレイアウトを図1に示す。個々の選手の音に対する反応力の優劣という要素を排除し、走速度の要素に特化するために、測定者に被験者の動き出しでストップウォッチをスタートさせ、直線距離30 m先に置いたホームベースを踏んだ瞬間までの時間を計測させた。疾走後、疲労が完全に抜けた後に再度試行し、2回の試走を100分の1秒まで計測し、その2回の平均値の100分の1秒の値を切り捨てたものを結果として採用した。被験者のスタート姿勢は、進行方向に対して左を向いた姿勢で、野球の盗塁をする時と同じ形に統一した。

表2 ランニングプログラム3群のPT実施時期

	MD1群	MD1群	WS群	WS群	WS群	WS群	MD2群
PT実施時	2013年7月	2013年12月	2014年7月	2014年12月	2015年7月	2015年12月	2016年7月
	※中止		※中止		※中止		

PT：フィジカルテスト

MD1群：中距離系と短距離系を組み合わせ、1日平均約3,000 mのプログラムを実施した被験者群

WS群：最大努力の80%程度の速度で行うウィンドスプリントを、1日平均約2,000 mのプログラムを実施した被験者群

MD2群：中距離系と短距離系を組み合わせ、1日平均約4,000 mのプログラムを実施した被験者群

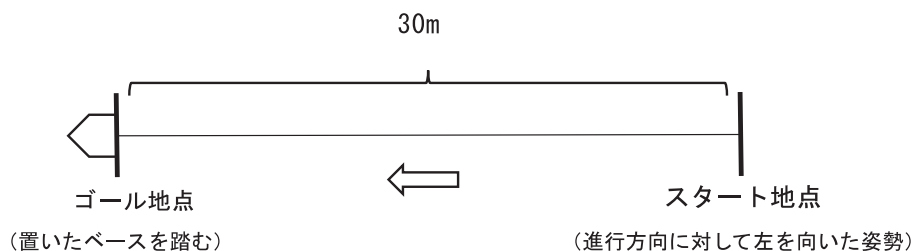


図1 30 mダッシュのレイアウト

2) T-テスト

T-テストはTの字にレイアウトされた走路を、規定の方法で動き、そのタイムを計測し敏捷性の能力を測定する、一般的に広く認知されている方法である。²⁾ T-テストのレイアウトを図2に示す。被験者は、測定者のスタートの合図でポイントBに向かって走り足元のコーンを左手で触る。続いてシャッフル（進行方向に対し横向きになり、足を交差させずにステップする方法）でポイントCに向かいコーンを右手で触る。このとき顔は正面を向けたままで、足は交差させてはならない。続いてシャッフルでポイントDに向かい足元のコーンを左手で触る。そしてシャッフルでポイントBまで戻りコーンを右手で触ってから、バックペダル（進行方向に対し後ろ向きに走る方法）でスタート地点Aまで戻る。疾走後、疲労が完全に抜けた後に再度試行する。2回の試走を100分の1秒まで計測し、その2回の平均値の100分の1秒の値を切り捨てたものを結果として採用した。

3) 25ヤードシャトルラン

25ヤードシャトルランは、対乳酸性能力を測定するための方法として広く認知されている方法である。²⁾ 25ヤードシャトルランのレイアウトを図3に示す。被験者は測定者の合図でスタートし、前方25ヤード（22.86 m）の切り返し地点のコーンめがけてダッシュをする。コーンを触れたら切り返し、スタート地点のコーンめがけて走る。コーンは左右どちらの手で触れても良い。これを6回往復する。スタートとゴール以外は必ずコーンに触れる。この種目は疲労度が高いため1回のみ実施し、100分の1秒の値を切り捨てたものを結果として採用した。

上記のFTの3種目の成績だけでなく、公式戦における同大学の投手の成績も比較検討の対象とした。所属連盟の公式戦では、優秀な公式成績を収めた投手に対して「最優秀投手」、「最優秀防御率」、「最多勝利」、「ベストナイン投手」の4つのタイトルがある。このうち「最優秀投手」と「ベ

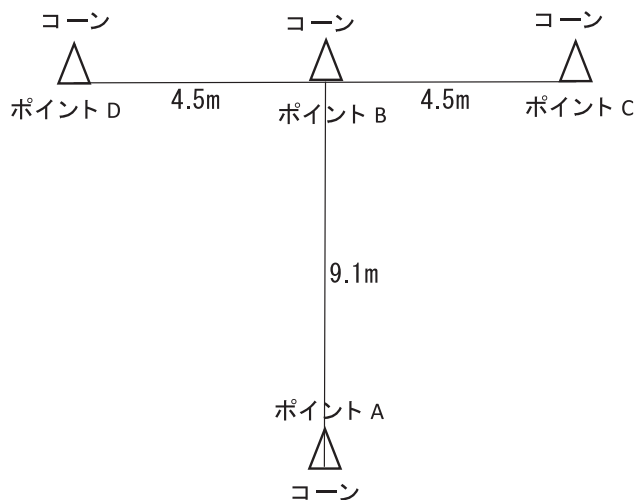


図2 T-テストのレイアウト

Tテスト：Tの字にレイアウトしたコースを移動する測定
 ポイントA：スタート、ゴール地点
 ポイントB：直進走から右方向への切り返し地点
 ポイントC：シャッフルの切り返し地点
 ポイントD：シャッフルの切り返し地点

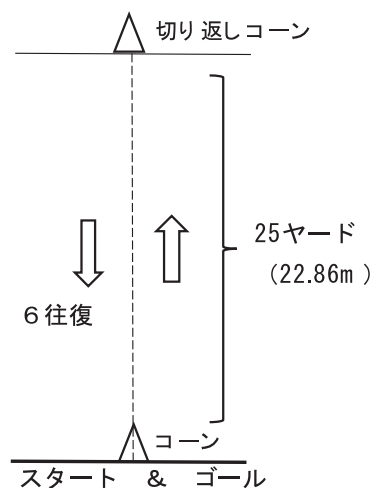


図3 25ヤードシャトルランのレイアウト

ストナイン投手」は数値に表れない選考者の主観に左右されるので、本研究の検討対象から除外した。最も防御率が優れた投手に与えられる「最優秀防御率」と、最も多くの勝ち星を挙げた投手に与えられる「最多勝利」の2つのタイトルを、本研究の検討対象とした。このようにMD1期(3シーズン)とWS期(3シーズン)、そしてMD2期(1シーズン)に開催された公式戦での、同大学野球部投手陣のタイトル獲得状況を比較した。

さらにタイトル獲得状況だけではなく、公式戦で「規定投球回数」に到達したT大学野球部の投手の人数も比較検討の対象に加えた。大学野球では、同大学が所属する連盟のように、2戦先勝の勝ち点制を採用する連盟が多い。同一カードで2勝した側に勝ち点1が与えられ、その勝ち点の多いチームが優勝するというシステムである。カード第1戦ではチームで1番手のエースを出し、翌日のカード第2戦で第2エースを出す。もしどちらかの試合を落として1勝1敗になったときに、カード第3戦に3番手投手を先発させることは稀である。多くのチームはカード第3戦に、休養が中1日であろうと1番手のエースを先発させてくる。各大学は、先発できる投手をまずは2人揃えることに腐心している。3人目、4人目も出てくればそれに越したことはないが、「疲労したエースよりも高いパフォーマンスを発揮できる3番手投手」は、システム上なかなか育ってこない。上述した現場の事情から、規定投球回数到達を本研究での指標にした。それは部内で指導者から信頼があり、かつその信頼に応えたという証拠だからである。(各連盟で規定投球回数の設定は違うが、同大学の所属連盟は27イニングである。)

多くの野球チームにおいて、特に一般的準備期においては、投手の練習は単調でそれほど多くのバリエーションはない。練習試合が多くなる専門的準備期の練習でも、投手は登板予定日にあわせて練習強度を変えるので、場合によっては一般的準備期と同レベルの強度のランニングをこなす日もある。ランニングは代謝系身体能力に直接的に影響を与えると考えられることから、代謝系身体能力を測定するPTの結果が変われば、投手の試合でのパフォーマンスに何らかの影響を及ぼすことが考えられる。投手の能力には多くの要素が絡むため、ランニング→身体能力向上→投手能力と単純に繋がるものではないが、ランニングトレーニングは一つの重要な要素と考えられる。

IV. 結果

1. PTの比較

MD1期とWS期、さらにMD2期で実施されたPTの結果を分析した。

1) 30 mダッシュの比較

30 mダッシュ(短距離走速度)の一元配置分散分析では $P = 0.001$ (有意確率5%)となり、3群間のうち、ある組み合わせで有意差が有るという結果になった。さらに多重比較を行った結果では、WS群 - MD2群($P = 0.000$, 有意確率5%)と、MD1群 - MD2群($P = 0.004$, 有意確率5%)の2つの組み合わせに有意差が有ることが判明した。30 mダッシュの分析結果を図4に示す。

2) T-テストの比較

T-テスト(敏捷性)の一元配置分散分析では、 $P = 0.120$ (有意確率5%)となり、3群間のどの組み合わせにも有意差は無いと判断された。T-テストの分析結果を図5に示す。

3) 25ヤードシャトルランの比較

25ヤードシャトルラン(耐乳酸性能力)の一元配置分散分析では、 $P = 0.136$ (有意確率5%)となり、3群間のどの組み合わせにも有意差は無いと判断された。25ヤードシャトルランの分析結果

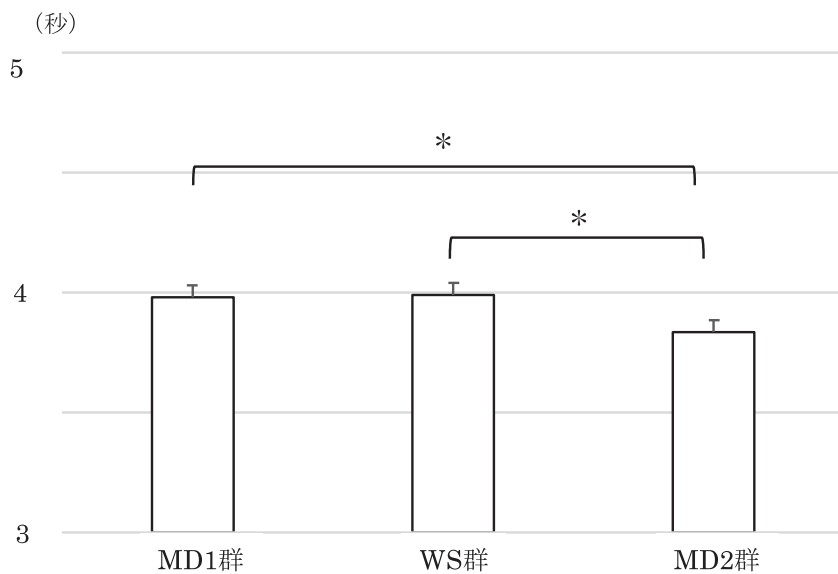


図4 30 m ダッシュの平均値 (平均値+標準誤差)

MD1 群：中距離走と短距離走群, Middle & Dash, MD1 期の被験者群

WS 群：ウィンドスプリント群, Wind Sprint, WS 期の被験者群

MD2 群：中距離走と短距離走群 (多量), Middle & Dash, MD2 期の被験者群

* P < 0.05

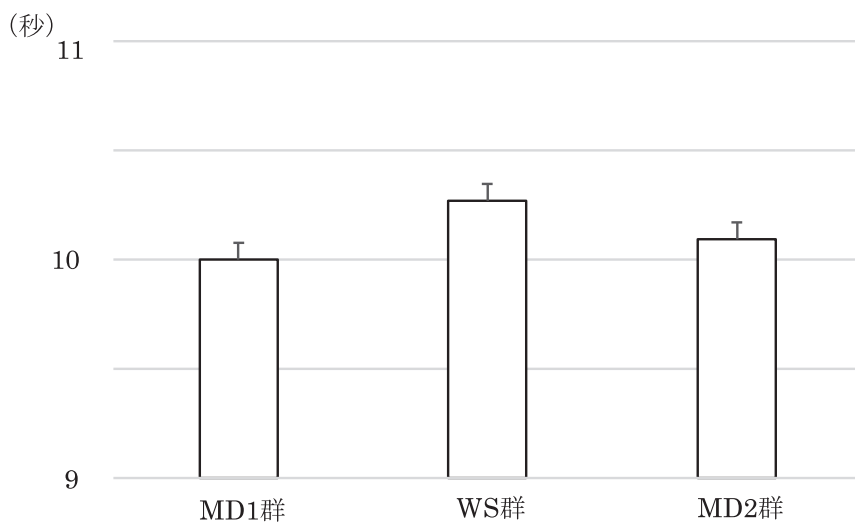


図5 T-テストの平均値 (平均値+標準誤差)

MD1 群：中距離走と短距離走群, Middle & Dash, MD1 期の被験者群

WS 群：ウィンドスプリント群, Wind Sprint, WS 期の被験者群

MD2 群：中距離走と短距離走群 (多量), Middle & Dash, MD2 期の被験者群

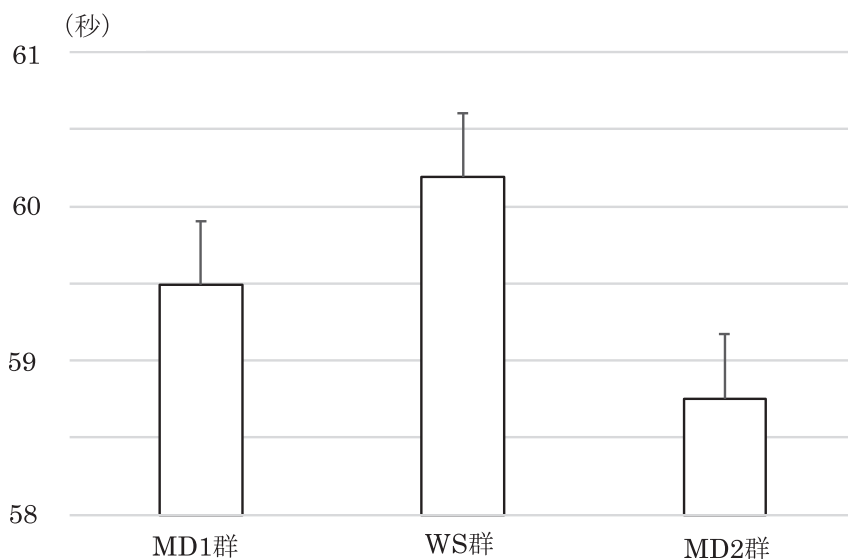


図6 25ヤードシャトルの平均値 (平均値+標準誤差)

MD1群：中距離走と短距離走群, Middle & Dash, MD1期の被験者群

WS群：ウインドスプリント群, Wind Sprint, WS期の被験者群

MD2群：中距離走と短距離走群 (多量), Middle & Dash, MD2期の被験者群

を図6に示す。

2. 公式戦の成績

2013年春から2016年春までの、公式戦でのタイトル獲得状況と規定投球回数達成人数を表3に示した。この表から、MD1期とMD2期の投手陣から、公式戦で活躍出来た投手が出ているように見受けられる。※印の2015年春は、規定投球回数到達は2名であるが、うち1名は入学直後の1年生が公式戦終盤に投球回数調整のための登板で達成したものであり、2015年春は実質1名という状況であった。

V. 考察

PTの数値を統計的に分析した結果、短距離走速度 (30 mダッシュ) において、MD2群が他の2群よりも差が有り、能力が高かった。MD2期に行ったランニングトレーニングは、中距離系の種目も多く、1日当たりの平均走行距離も4,000 mを超えるようにプログラムを組んだこともあり (表4)、短距離走速度に有意差が出るのは予想していなかった。耐乳酸性能力を示す25ヤードシャトルランの結果では、3群間で平均値を比べるとMD2群の速度が一番高かった。MD1期とMD2期のランニングトレーニングは、特にATP-CP系、乳酸系の2つの代謝系に十分に負荷をかけるようにプログラムを考えたものであり、さらにMD2期には量も増やしたことでランニングの質も向上し、短距離走速度向上に繋がったと考えられる。大学生野球選手の身体能力は発展途上段階にあるため、中距離系ランニングの量を増やしたことによってランニング効率が改善され、それが短距離走速度向上に効果をもたらし、その改善された短距離走速度が、瞬発的な力発揮を必要とする投

球動作にプラスに作用した可能性もある。またMD1期とMD2期では、週に1日は必ず有酸素性代謝に負荷をかける長距離ランニングも取り入れていた。すなわち、短距離走速度に表れる瞬発力・パワー系能力の高さと、有酸素性代謝に負荷をかけたランニングにより持久力も鍛えられた結果が、規定投球回数に達した投手の人数にも反映したと考えられる。表3に示した公式戦での投手成績はそれを表している。このことから、MD1期、MD2期のように、中距離系・短距離系種目を、強度を高く保つためにタイム設定をし、なおかつ量もこなせる体力が備われば、試合で良い成績を上げる投手が出てくる可能性は高いと考えられる。

タイム設定をした中距離系種目と短距離系種目を合わせて、1日あたりの走行距離を約3,000 mとしたMD1期のランニングは、プロ野球で実績を上げた指導者から提供されたアドバイスを参考にしたプログラムである。宮川（2007）によれば、陸上短距離のトップクラスの選手は追い込みの時期には4,000 mを超える量を走っている。⁵⁾ このため、競技は違ってもハイレベルの練習量をこなすということも念頭に置き、MD2期に4,000 mを超える量を実施した。また、先述した「タイム設定に迫られてフォームに焦点が置けない」という懸念も、「走り込み」の積み重ねが質への向上につながるという考え方を前提に計画すれば、マイナス要素は少なくなると考えられている。⁵⁾ また、短距離系種目で乳酸性代謝機構に負荷をかけるプログラムは心理面においても強さが求められ、それを集団でこなすことは、強い連帯感が生まれチームの一体感にもつながる。その一方で、乳酸性代謝機構に負荷をかけるランニングは、疲労が蓄積しやすく、回復を軽視するとオー

表3 公式戦のタイトル獲得状況と規定投球回数達成人数

	2013春	2013秋	2014春	2014秋	2015春	2015秋	2016春
最優秀防御率	○						○
最多勝利	○		○				○
規定回数到達(人)	2	2	1	1	2※	1	2
	MD1期			WS期			MD2期

○：タイトル獲得

MD1期：中距離系と短距離系を組み合わせ、1日平均約3,000 mのプログラムを実施した期間

WS期：最大努力の80%程度の速度で行うウィンドスプリントを、1日平均約2,000 mのプログラムを実施した期間

MD2期：中距離系と短距離系を組み合わせ、1日平均約4,000 mのプログラムを実施した期間

表4 各公式戦準備期におけるランニングトレーニングの走行距離

		1日当たり平均距離(m/日)	総走行距離(m)
MD1期	2013年春準備期	3,330.3	223,135
	2013年秋準備期	3,789.2	155,360
	2014年春準備期	3,265.0	228,550
WS期	2014年秋準備期	2,568.6	95,040
	2015年春準備期	2,655.7	204,495
	2015年秋準備期	2,836.6	130,485
MD2期	2016年春準備期	4,107.4	345,024

MD1期：中距離系と短距離系を組み合わせ、1日平均約3,000 mのプログラムを実施した期間

WS期：最大努力の80%程度の速度で行うウィンドスプリントを、1日平均約2,000 mのプログラムを実施した期間

MD2期：中距離系と短距離系を組み合わせ、1日平均約4,000 mのプログラムを実施した期間

パートレーニングに陥るリスクが高いため、どのタイミングで強度を落とすのかは、指導者が日々選手を観察して調整する必要がある。

本研究における3群間のPTの結果の分析と、各期での公式戦での投手成績は、単純に結びつけることは出来ないが、WS期間中に感じた、「投手陣の質が落ちてきたような気がする」という感覚は、見当違いでは無かったようである。このため、実戦練習に入る専門的準備期の前の段階、一般的準備期にどれだけ追い込んで量を追求していけるかがその後の競技パフォーマンスに影響を与えると考えられる。こうやれば必ず良くなるといった理想的な方法は無いが、Colemanが投手のコンディショニングに関する著書で述べていることを参考にして、本研究から導かれた結果から考えられることは、「トレーニングの特異性は、使わなければ駄目になる、が基本である。経験上、短距離選手はジョギングではスピードを維持できず、砲丸投げ選手はサーキットトレーニングではパワーを維持できない。同様に投手の走行速度、敏捷性、耐乳酸性能力は、80%で余力を残して走るランニングでは維持できない。投手は、その身体能力を維持・向上させるためには、適切な方法で全力を発揮する練習を行わなくてはならない。」¹⁾という事である。

上記のとおり考察を進めてきたが、ランニングだけが投手のパフォーマンスの決定要素ではない。ランニング以外の練習・トレーニングをいかに行うかも重要な要素である。だが本研究で進めてきた考察が、経験則だけに頼ってきた投手のランニングに関して、裏付けのある方向性を示すきっかけになると考えている。今後、さらに多くの要素を研究し、野球の投手のレベル向上のためのトレーニング方法が確立されていくことを期待する。

VI. 結 論

大学生投手の一般的準備期におけるランニングトレーニングに関する本研究により、以下のことが明らかになった。

1. 大学生投手に提供する一般的準備期のランニングプログラムは、最大速度の80%程度で行うWSよりも、短距離系種目と中距離系種目を組み合わせ、タイム設定をして強度を一定に保って実施する方が、選手の能力を最大限に発揮させる効果が高い。
2. 一般的準備期には、中距離走と短距離走の種目を組み合わせ、量も多いランニングプログラムを実施することが、試合での投手のパフォーマンス向上につながる可能性がある。

参考文献

- 1) Coleman A. Eugene (2011) Training the Power Pitcher, *Strength & Conditioning Journal, Volume 18, Number 7*, pp. 41-51, NSCA-Japan, Tokyo.
- 2) Harman Everett, Garhammer John, Pandorf Clay (2004) 選択したテストの実施、スコアの記録、解釈、第2版ストレングストレーニング&コンディショニング, pp. 321-351, (旬)ブックハウスHD, 東京.
- 3) 石橋秀幸 (2008) 野球体をつくる!, pp. 66-67, pp. 182-183, 西東社, 東京.
- 4) 垣野多鶴 (2007) 野球能力値をUPするトレーニング, pp. 104-105, 池田書店, 東京.
- 5) 宮川千秋 (2007) 走り込みで技術・戦術の習熟を, 月刊トレーニングジャーナル2007年8月号, pp. 17-21, (旬)ブックハウスHD, 東京.
- 6) 山内 武 (2014) 持久力向上トレーニングの理論とプログラム作成, トレーニング指導者テキスト実践編, pp. 69, 日本トレーニング指導者協会編, 大修館書店, 東京.
- 7) 安田昌玄 (2005) ベースボールトレーニングバイブル, pp. 4-18, 日刊スポーツ出版社, 東京.

研究ノート

短距離スプリントドリルが大学生野球選手の 短距離走速度向上に与える効果

赤 池 行 平

The Effect of Sprint Drills for Improving Short Sprinting Ability of University Baseball Players

AKAIKE, Kohei

Abstract

The ability to generate speed during short sprints is one of the most important abilities for baseball players. The purpose of this study was to investigate the utility of two exercise drills for improving the short sprinting abilities of university baseball players. The first exercise was the “Wall Drill” (WD), which is widely used to improve the movement of sprinters during the acceleration phase. The other exercise was based on the Stretch-Shortening Cycle Movement theory named “SSC-Drill” (SSC) and aimed to improve step frequency and length in the starting phase. There were 3 groups of subjects, the Normal Training group1 (NT1, n = 17), the Normal Training group2 (NT2, n = 21), and the Wind sprint & SSC-drill group (WS, n = 13). The WS group was the only group that was scheduled to perform both exercises. They performed a 30-meter dash at maximum effort. The mean improvements in the 30-meter dash times of each group were compared. The data were analyzed via analysis of variance to determine the significance of the differences among the 3 groups. There were no differences among the 3 groups, so there was no evidence that WS Group had an effect on the subjects’ sprinting ability. In conclusion, there were no evidence of the effects from sprint drills. Although those sprint drills had been adopted widely among the track & field athletes of short sprints, more optimal exercise and drills should be existed and we should developed good exercise for baseball players. More detailed investigations will be expected to determine the optimal method for improving the sprinting speed of baseball players.

Key-word: Improve the short sprinting abilities of university baseball players, Sprint training, Wall Drill, Stretch-Shortening-Cycle Movements, Traditional running training for baseball

目 次

- I. 緒言
- II. 目的
- III. 方法
 - 1. 被験者
 - 2. 介入ドリル
 - 3. 伝統的な野球のランニングトレーニング
 - 4. 検証
- IV. 結果
- V. 考察
- VI. 結論

I. 緒 言

野球は「投げる」、「打つ」、「走る」、「捕る」、「跳ぶ」、「滑る」など、様々なスポーツ競技の中でも多くの運動能力を必要とされる競技である。速く走ることができる、打球を遠くに飛ばすことができる、速い球を投げることができるという能力は、野球という競技において有利に働く。¹⁰⁾しかし試合で活躍できる選手全てが、それらの能力を高いレベルで有しているかと言うと必ずしもそうではない。打撃練習で外野スタンドまで打球を飛ばす能力があっても、投手として150 km/hを超える投球速度を出すことができても、また単に短距離ダッシュが速いというだけでは、野球の試合で素晴らしい成績を残すための保証にはならない。過去には野球経験のない、陸上短距離の五輪元日本代表選手が日本プロ野球（以下NPB）の球団と契約をしたが、期待されたほどの活躍をする事は出来なかった例がある。

野球という競技は、「規則に従って打者が各塁を回り、本塁まで生還した得点人数が多い方が勝つ」というゲームである。攻撃側は出塁した走者をいかに本塁に還し得点するか、守備側はいかに走者を先の塁に進ませず得点させないかを考える。単純な打球の飛ばし合いである「ホームラン競争」や、投球速度を競い合う「スピードガンコンテスト」とは違う。NPBに限らず、社会人、大学、高校野球においても、「ずば抜けて速い球を投げる」投手や、「ずば抜けて打球の飛距離が出る」打者、あるいは「ずば抜けて速く走ることができる」選手でも、試合に出ることができない者は多い。そのような選手は、「本塁に生還した得点人数を競う」ゲームで、自分の能力を活かす方法を理解していないということになる。

しかし、速い球を投げる能力、遠くに打球を飛ばす能力、速く走る能力は、野球の試合で勝利するために、有利に働く要素であることに疑いの余地はない。¹⁰⁾ NPBのドラフト会議でも、各チームのスカウトはそのような能力を持つアマチュア選手を、自チームの将来のためにリストアップする傾向がある。投球速度の速い球は打者が打つ際の判断時間を短くさせ、打球を遠くに飛ばす選手は一人で多くの得点を上げる確率を高める。速く走ることができる選手は、一つでも先の塁に進み本塁に生還して得点する確率を高める。捕球技術に優れている内野手が、訓練の成果として短距離ダッシュのスピードが向上したとすれば、彼は以前までは届かなかった打球を捕球する

ことが出来るようになり、相手の得点機会を減らすことが可能になる。野球の試合で勝利するためには、それらの運動能力を高いレベルで有している選手を、試合で機能させる訓練が必要になる。

本研究では、野球に必要とされる上述の運動能力のうち、「短距離を速く走る」ことに特化して考察をする。野球では「投球速度、コントロールを含めた投球技術を高める」、「正確に打つ精度を高める」、「正確に捕球する技術を高める」ための練習に多くの時間が費やされ、「短距離を速く走る」ための練習に焦点が置かれることは少ない。また、打球を「捕る」練習には短距離をダッシュする状況が含まれるため、「捕る」反復練習が野球に必要な敏捷性を高めることにつながると考えられている。しかし、短い場合では5 m程度から、最長では100 mを超える距離を速く走り抜けることが必要になる野球で、スプリント能力向上の基本的な考え方を習得することは選手としての能力を高めることに繋がる。

今から四半世紀前、東京六大学野球リーグの慶應義塾大学野球部で、長年にわたり指揮を執ってきた前田祐吉は記事の中で以下のように述べている。「野球は攻守がはっきり別になる競技だから、チーム力を100ポイントとして、これを攻守に平等に割り振れば、それぞれ50ポイントになる。そして、攻撃の50ポイントを打力と走塁の技術を含めた走者の走力に分けると、いろいろな議論があるが、打力40、走力10あたりに落ち着くようである。しかし走力とは走塁の力に限られるわけではなく、選手の一般的な走力は、守備面では守備範囲として、打撃では内野安打の数などに影響を持つ。単純に100ポイント中の10ポイントではなく、選手の走力はそれ以上に、はるかに大切な要素である。⁶⁾」前田は、まだ野球が五輪で正式種目に採用される以前の時代から、日本の野球界に慣例のように広まっていた「野球は投手力を含めた守りから」といった考え方に異を唱え、「相手より多く得点した方が勝つ」という発想を標榜していた。学生野球のチーム作りにおいて守備面を重視するのか、攻撃面を重視するのかは本研究の範疇ではないので議論はしないが、攻撃面重視の前田氏も走力は攻撃面だけでなく、野球のあらゆる側面に有利に働くということを認め、その重要性を説いていた。その後、1992年のバルセロナ五輪で野球が正式種目として採用され、ワールドベースボールクラシック（WBC）などの国際大会も次第に多く開催されるようになると、野球場の広さ自体も公認野球規則に則ったものによって変わった。公認野球規則には、「本塁よりフェアグラウンドにあるフェンス、スタンドまたはプレイの妨げになる施設までの距離は250フィート（76.199メートル）以上を必要とするが、両翼は320フィート（97.534メートル）以上、中堅は400フィート（121.918メートル）以上あることが優先して望まれる」と記されている。米国をはじめ外国の野球場は概ねこの規格が望む広さになっていたのに対し、野球が五輪で正式種目に採用される以前の日本では、NPB球団の本拠地球場も地方の公営球場も、本塁から両翼までが90メートル前後、中堅までが115～120メートルの広さが大多数であった。しかし、広い野球場が増えるにつれ、選手の走力の重要性も高まってきた。なぜなら、打撃面のパワーに劣る日本人が広い野球場で活躍するには、守備面においては打球に対して素早く追いつくことと、攻撃面では一つでも先の塁に進むことが、それまでよりも強く求められるようになったからである。これらのことから、プロ・アマチュア野球を問わず、優勝を狙えるチームには必ず走力の高い選手が複数在籍している。そして、このように走力が重視される傾向は、今後さらに強まっていくと考えられる。

野球における走力に関して、羽鳥（1978）⁵⁾は「野球における走力はスタート、走速度、走塁法（コーナリング）で決まる」と述べている。真っ直ぐな直線を走る場面もあるが、コーナリングの技術を駆使し曲線を描きながら走る場面、またはストップ&ゴーを繰り返す場面もあるというこ

とである。このため、様々な走動作局面を想定して練習することが求められるが、アジリティー（敏捷性）やクイックネス（切り返しの速さ）を向上するための土台としても、直線ダッシュのスピードを高めることは必要不可欠である。⁴⁾ 指導現場でも、塁間（27.432 m）の距離を想定した30 mダッシュのタイムが、選手の走力として評価されることが多い。⁹⁾ また、米国プロフットボールリーグ（NFL）でランニングバックのポジションをこなす選手たちの多くは、相手のディフェンスを出し抜く、高いアジリティーやクイックネス能力を身につけているが、直線を走らせても100 mを10秒台前半で走り抜けることができる。即ち、陸上競技の日本選手権であれば、予選を通過できるだけのスピードが、彼らの運動能力の根幹を成している。このように、多くのスポーツ競技では、完全な直線を走る場面は多くないが、様々な局面での敏捷性の土台には、直線を速く走る能力は不可欠だと考えられる。本研究では、様々なカテゴリーの野球選手の中から、特に大学生選手を対象にして短距離走速度向上のためのトレーニングを実施し、その効果を検証する。

Ⅱ. 目的

様々なスポーツ競技において、「走行速度が高い」ことは重要な要素である。緒言で述べた通り、野球では得点を取ることと防ぐこと両方において、速く走る能力の向上は必要不可欠である。¹⁰⁾

野球の試合において、選手は塁間距離を直線的に走る局面、前方・後方・回転系の走動作局面、ヒットを打ったときや盗塁をするときの停止やスタートを行う局面など、様々な走動作局面がある。例えば、スタート時の構えは進行方向に対して横を向いている状況が多く、陸上短距離選手のスタートのように進行方向に正対する局面はほとんど無い。また、試合中のほとんどの局面で、最大速度（約31 m～60 mの間）に達することはない。²⁾ ほとんどの動作局面が最大速度に達する以前にプレーが終わることになる。最大速度に達するとすれば、三塁打を打った時に二塁を駆け抜けた後の局面であるが、これは直線走行ではないが60 mを超える距離を走る状況である。しかし、このような状況は野球の試合において頻繁には起こらない。多くは、外野手が打球を追う局面、内野手がゴロを捕球して送球するまでの間、さらに塁間の走動作であり、30 m以下の距離で行われる。これは短距離走の一般的な分類において初期加速局面（0～10 m）および加速局面（0～30 m）に相当する。^{3, 7, 8)} これらのことを考えると、野球における短距離走トレーニングは、直線速度の最大化よりも、初期加速局面および加速局面の速度向上に焦点を当てて実施されるべきであると考えられる。²⁾ これらのことを踏まえ、本研究では30 mの距離での走行速度向上に焦点を当て、大学生の野手を対象に、理論的に裏付けられたトレーニング方法を一定期間実施し、その効果を探る。その方法とは、短距離を速く走ることに最も特化した陸上競技の短距離種目において、実際に採用されているウォールドリル（Wall Drill, 以下WD）という方法と、瞬発力を高めるための伸長-短縮サイクル理論（Stretch-Shortening Cycle, 以下SSC）に基づくトレーニング方法の一つである「プライオメトリクス」を応用した方法の二つである。^{2, 11)} この方法の詳細は、「Ⅲ-2. 介入ドリル」の項で述べる。

打撃動作や守備の捕球動作、投動作のメカニズムは多くの研究が行われてきているが、学生野球では、基本的な理論の裏付けに基づいてランニングを指導出来る者が多くない。これは、ボールを扱わないので関心を高めづらく、特に精神的に未熟な若年選手は「走る練習」にはすすんで取り組むたがらない傾向もあるため、指導者も進んで学ぼうとしないことが考えられる。そして、経験則に頼り無計画に訓練させるので効果がなかなか現れず、「素質が占める要素は大きい」と考えてしまう指導者も少なくないようである。その結果、選手がその潜在能力を最大限発揮できる

可能性を低くしてしまっている。

走る速さは絶対的数値に表わされるものであり、見る人の主観によって評価が左右されてしまう事象ではない。例えば、「あまり速く見えない」選手でも、実際に測定して速ければ得点できる可能性は高まり、一方、「速そうに見える選手」でも、数値で表される速度が低ければ、盗塁が決まる可能性は低い。このように、まず数値に表される絶対的な速さを獲得しない限り、野球の試合において勝利に貢献できる可能性を高めることは出来ない。このような現場の状況を打破し、選手の持てる最大限の能力を発揮させるため、野球の練習における効果的な「走る」トレーニング方法に、一つの方向性を与えることを本研究の目的とする。

Ⅲ. 方法

1. 被験者

埼玉県の私立T大学硬式野球部の選手を対象にした。

同大学野球部では、半年ごとに定期的なフィジカルテスト（以下PT）を実施している。野球部の選手のうち本研究の被験者を以下に示す。

- ①非介入群：2009年12月と2010年7月のPTに2回とも参加した選手（野手）17名（Normal Training 1群，以下NT1群）
- ②非介入群：2012年12月と2013年8月のPTに2回とも参加した選手（野手）21名（Normal Training 2群，以下NT2群）
- ③介入群：2015年12月と2016年7月のPTに2回とも参加した選手（野手）13名（Wall-Drill SSC-Drill群，以下WS群）

被験者の身体特性を表1に示す。

NT1群のNTは、通常のプログラムという意味で、Normal Trainingの略記である。選手は1回目のPT（2009年12月）の後、翌年の春期公式戦の一般的準備期から春期公式戦期間を経て、2回目のPT（2010年7月）にいたるまで、^{注1)}練習でのランニングトレーニングとして主に中距離・長距離・短距離系の種目（詳細は「4. 伝統的な野球のランニングトレーニング」で後述）をローテーションで行った。これは学生野球の練習で行われるランニングトレーニングとしては、広く一般的に行われている内容である。野球に直接求められる瞬発力だけでなく、有酸素系代謝と乳酸性代謝に負荷をかけ、心肺機能を高めると同時に、身体の回復能力を高めるという目的であった。

NT2群の選手にも、1回目のPT（2012年12月）後の一般的準備期から翌年の春期公式戦期間を経て、2回目のPT（2013年8月）にいたるまで、NT1群の選手が行っていたプログラムと同じものを実施した。NT2群は、NT1群に所属した選手が全て卒業したあとの群であるので、被験者にはNT1群に属した選手はいなかった。そして、NT1群にも、NT2群にも、走るメカニズムや正しいフォームに関しての指導はほとんど行わなかった。NT1とNT2のコントロール群を2つにした理由

表1 被験者の身体的特性

	NT1群 (n=17)	NT2群 (n=21)	WS群 (n=13)
身長 (cm)	174.1±3.4	173.4±5.3	173.1±4.5
体重(kg)	73.9±9.7	72.6±7.6	71.0±8.8
学年別人数 (人)	4年:3 3年:6 2年:8	4年:3 3年:5 2年:13	4年:5 3年:2 2年:6

は、ほぼ同じ練習内容と指導でも、年代と選手の違によってこの2群間に有意な差があると認められた場合、練習以外の何らかの要素が選手の能力に影響を与えていると考える必要が出てくることと、それが本研究の「介入ドリルの効果検証」という目的から外れてしまうこともあると考えたためである。

WS群の選手に対しては、1回目のPT（2015年12月）の後の一般的準備期から翌年の春期公式戦期間を経て、2回目のPT（2016年7月）にいたるまで、上記2群が行っていたプログラムに加え、スタートダッシュのフォーム習得を目指したWD（「3. 介入ドリル」で後述）と、SSC理論に基づくドリル（「3. 介入ドリル」で後述）を考案し、それを実践した。WS群には、NT2群に所属した選手と完全に入れ替わっていたため、NT2群に所属した選手はいなかった。

以上3群全ての選手に対して、それぞれ2回のPTともこの研究のための計測でもあるということとを事前に伝えた承を得た。

被験者を野手に限定した理由は、投手よりも野手の方が実際のプレーにおいて初期加速力が要求される局面が多いことと、投手と野手では通常の練習内容は大きく異なるため比較するうえで、統一した条件にならないためである。また、3群とも「年代」と「群に所属する選手」は完全に異なり、非介入群の2群のランニング内容は後述する「4. 伝統的な野球のランニングトレーニング」から選んだプログラムであった。介入群であるWS群のランニング内容は後述する「3. 介入ドリル」で、ドリルを実施しない日は「4. 伝統的な～」から選んだプログラムを行った。通常の野球の練習は3群とも同じ方針、内容であり、変化させた時期は無かった。

2. 介入ドリル

WS群に対しては、2回のPTの間の約8か月間にわたり介入ドリルを実施した。実施した内容は、陸上競技短距離種目の練習でも行われるWDと、伸長－短縮サイクル運動（SSC）の理論を応用した短距離ダッシュ（以下SSC）を採用した。^{2,11)} WDは短距離ダッシュのスタート直後の加速局面の改善を図るためのドリルとして広く用いられている。特に静止状態からの加速力を得るためには、大きな力を地面に伝える必要があるが、WDで正しい動作を習得することにより、力を無駄なく効率的に地面に伝えることの習得を目的とした。このWDの中でも基本的な「スタティック」「チェンジ」という種目を混合させた内容の種目を実施した。¹¹⁾ WDの方法は以下の通りである。

身体を傾けて壁に両手をつき、支持脚の踵から頭までが常に一直線になるように体軸を保つ。この状態で、遊脚と支持脚を空中で素早く入れ替えるように動かし、遊脚側の股関節、膝関節と両足首の角度は90°を保つ。この姿勢を基本形とし、「スタティック」は、遊脚と支持脚を入れ替えたなら基本形で静止する。「チェンジ」は、2回入れ替えて静止、3回入れ替えて静止、4回入れ替えて静止、そして合図があるまで連続で速く入れ替えるという方法で行う。動作中は常に体軸の傾きを保ち、支持脚の臀部に力が入っているようにする。さらに、支持脚のトリプルエクステンション（足関節、膝関節、股関節の同時伸展動作）と遊脚のスイングを同調させる。このようにして、基本形の姿勢で遊脚と支持脚の正しい形を保ちながら、指導者の合図によって素早く左右の脚を入れ替える。¹¹⁾ 指導者は様々なリズムで合図をし、動作中は体幹部の傾きが崩れないように、体軸をしっかり保ち、素早い動作で行うように指示をした。「スタティック」は20回入れ替えを1セットとし、計2～3セット行う。「チェンジ」は2回入れ替えを1セット、3回入れ替えを2セット、4回入れ替えを1セット、合図まで連続を1セット、指導者の監督のもとに行った。

SSCは研究によると、筋肉は伸長局面の直後に筋の受動的収縮要素の短縮性ストレッチ（伸長）が増大し、弾性エネルギーが素早く伝達され、同時に短縮による反動を増強させるとされている。¹¹⁾

この理論に基づき、地面に対して大きな短縮性張力を発揮する能力を獲得することを目的としてSSCを採用した。実施したSSCの種目の詳細は以下a.～f.の通りである。

a. スクワットジャンプ・スプリント

進行方向に正面に向いて直立し、パラレルスクワットの姿勢から両脚でジャンプし、片脚で着地した後、接地時間を出来る限り短く、爆発的に約15 mダッシュをする。この種目はSSCの基本であり、正しい着地を習得するために必修の種目である。接地時間を出来るだけ短く、かつ片脚でバランスの良い着地をするためには、対側（右腕と左脚、左腕を右脚）の上下肢運動を行いながら関節を屈曲させることにより、着地の衝撃を和らげるようにする。そして、加速に必要な力発揮のために、強い腕と脚の動きをできるだけ素早く行うようにする。²⁾ 左右各3回、計6回行う。

b. トリプルジャンプ・スプリント

スタートから3歩バウンディングをしたあとに約15 mのダッシュを行う。このバウンディングは、距離を伸ばそうとすると接地時間が長くなり、さらにダッシュ前にハムストリングスに過度の伸長性負荷がかかる。それを防ぐために、距離よりも高さを出すように指示をする。²⁾ 1歩目の脚を変えて左右各3回、計6回行う。

c. ラテラルホップ・スプリント

スキージャンプのアプローチ姿勢を取り、反動をつけず、頭の高さを変えないで、素早く左右へのステップを2往復行う。その直後に約15 mの直線ダッシュを行う。これは回旋加速力の伝達能力を調整する。方向転換の活動は、前方加速を生み出すときの強力な股関節の内旋と外旋が、相乗的に組み合わせられて生じる。その相乗効果の獲得のための種目である。²⁾ この種目は3回行う。

d. リバーススクワット・ジャンプ・スプリント

進行方向に背を向けて直立し、パラレルスクワットの姿勢までかがんだあと、ジャンプしながら180°反転し、片脚で着地したあと素早くスタートし、約15 mのダッシュを行う。スクワットジャンプ・スプリントを後ろ向きで開始して、180°反転のジャンプを行うもの。着地後は素早く爆発的にスタートしなくてはならないが、バランスのとれた安定した着地が重要である。²⁾ 右反転で右脚着地3回、右反転で左足着地3回、左反転で左脚着地3回、左反転で右脚着地3回、計12回行う。

e. プッシュアップスタート・スプリント

腕立て伏せの姿勢から、合図とともに素早くスタートする。距離は約15 m。スタート時の前傾姿勢を覚える目的で行う。²⁾ 1歩目に左右どちらの脚を前に出すかを、毎回変えて行う。右脚2回、左脚2回、計4回。

f. Burpee (人名)・スプリント

選手は直立姿勢から合図とともに素早く腕立て伏せ姿勢をとり、その後両膝を素早く胸部に引き寄せたあと、再度腕立て伏せ姿勢をとり、その後素早く立ち上がる。この一連のバーピーの動きを3回行う。バーピー3回目は、腕立て伏せ姿勢になった瞬間に、腹臥位から膝を引き寄せずに素早くダッシュを行う。²⁾ このダッシュは30 mを6回行う。SSCドリルの最後の種目として、30 mを最後まで速度を緩めることなく走れるように指示する。

上記の介入ドリルは、野球部の練習時間内に、野球の練習の妨げにならず、なおかつ強度を

保って行えるように配慮した。また、WS群の選手がWDとSSCを行うときは、必ずトレーニングコーチが監督をして動作の正確さやタイミングが崩れないように、またダッシュ時は最大努力で行うよう指示を出した。頻度は、導入初期は動作習得のため各練習クール（4～5日間）において1～2回で、それ以外の日は非介入群が行う「4. 伝統的な野球のランニングトレーニング」のメニューから選んで作成したランニングプログラムを行った。3月は練習試合期間、4月からは公式戦期間のため実戦練習が優先されるため、ドリルを予定通り行えない日があることも予想された。WDとSSCは金属製スパイク付きシューズではなく、トレーニング用シューズ着用下で行った。理由としては、WDもSSCも、まずは正しい動作を習得することが重要であり、足への衝撃度が高い金属製スパイク付きシューズよりも疲労を抑えた状態で行うことができると考えたためである。NT1群とNT2群の短距離系種目はスパイク着用下で実施した。

3. 伝統的な野球のランニングトレーニング

非介入群であるNT1群とNT2群が行ったトレーニングは、一般的に学生野球では以前から広く取り入れられている「伝統的な」ランニングトレーニングを行った。具体的には以下のトレーニングメニューに示されたものの中から規則的なローテーション^{注2)}でトレーニングプログラムを組んだ。

a. ベースランニング

打席での打撃動作から各塁にダッシュをする。二塁打、三塁打、ヒットエンドランなど実際のプレーを想定して走る。金属製スパイク付きシューズ着用下で行う。

b. 短距離シャトルラン

20 mから30 mの距離の間を、合図あるいは目印で往復を繰り返す、切り返し動作を最大努力で行う。

c. ポール間走

左右のポール間を外野フェンス沿いにダッシュをする。運動-休息比を設定して強度を変化させる。

d. 塁間走

約30 mの直線のダッシュ。スタート地点まで歩く、ジョグで戻る、立ち止まって休憩するなど、休息形態を変えることにより強度、目的も変わる。

e. 乳酸系代謝ランニング

400 m～500 mの距離（野球場の外周の距離、あるいは野球場内のフェンス沿いを1周）を全力で走る。運動-休息比を変えることによって強度に変化をつける。

f. 長距離ランニング

球場の周りやロードワークを行う。有酸素性代謝機構に負荷をかけるために行う。

NT1群とNT2群の2群には、主に上記のランニングメニューからトレーニングプログラムを組んで実施した。

4. 検証

野球部で定期的に行われているPTの、30 mダッシュを本研究の対象種目とし、結果を本研究のデータとして採用した。30 mダッシュの計測方法を以下に記す。

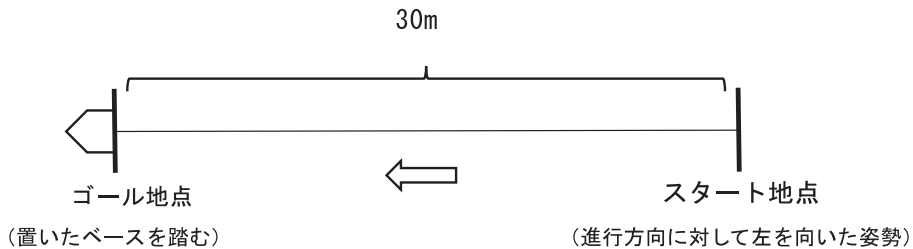


図1 30 m ダッシュのレイアウト

個々の被験者の音に対する反応力の優劣という要素を排除し、走行速度の要素に特化するため、測定者は被験者の動き出しでストップウォッチをスタートさせ、直線距離30 m先に置いたホームベースを踏んだ瞬間迄の時間を計測した。被験者のスタート姿勢は進行方向に対して左を向いた姿勢で、野球の盗塁をする局面と同じ形にした。野球は音に対して反応する状況は少なく、打者は自分が打ったら走り始め、盗塁の場合は投手のモーションを見て反応する。そして選手は駆け抜けるときにはベース上を通過するのではなく、踏むという行為をする。このような実際の野球のプレー状況に近づけるために、上記の方法を採用した。

30 m ダッシュのレイアウトを図1に示す。疾走後の疲労が取れた後に2回目の試走を行い、100分の1秒まで計測、2回の走行結果の平均を算出し100分の1秒の値を切り捨てたものを結果として採用した。^{注3)}

測定環境は、NT1群とNT2群は同大学野球部専用球場のインフィールドエリア（屋外、土）で、測定時には金属製スパイク付きシューズを着用した。WS群は同大学野球部専用屋内練習場の人工芝フィールド上で、測定時は人工芝用のゴム製ポイントシューズを着用した。各群とも、1回目と2回目の測定環境を統一した。^{注4)}

このように計画したPTにおける30 m ダッシュ測定の実績値に、NT1群、NT2群、WS群の3群間で有意な差があるのかどうかについて、一元配置分散分析を用いて検証した。その結果が有意であった場合は、群間が等分散と仮定された場合は多重比較Fisher's PLSD法を用い、等分散ではないと仮定された場合は多重比較Dunnnett法を用いて、どの群間の組み合わせに有意差があるか調べることとした。分析にはIBM SPSS Statistics Version 23を使用した。

IV. 結果

一元配置分散分析（有意水準5%）の結果を図2に示す。分析によると、 P -値 = 0.070となり、有意な差が有る（ $p < 0.05$ ）と言えないが、傾向はうかがえる（ $p < 0.1$ ）ことが認められた。多重比較は分散分析で有意差があった場合に行うものとしたため、行わなかった。このように結果は、介入ドリルの十分な効果があったとは言えないが、多少の効果が認められることが予想されるものとなった。

V. 考察

WS群に実施した介入ドリルには理論的な裏付けがあり、短距離ダッシュの速度を向上させる目的で広く行われているものである。^{2, 11)}しかし、本研究の分析結果では、ドリル介入の効果が十分

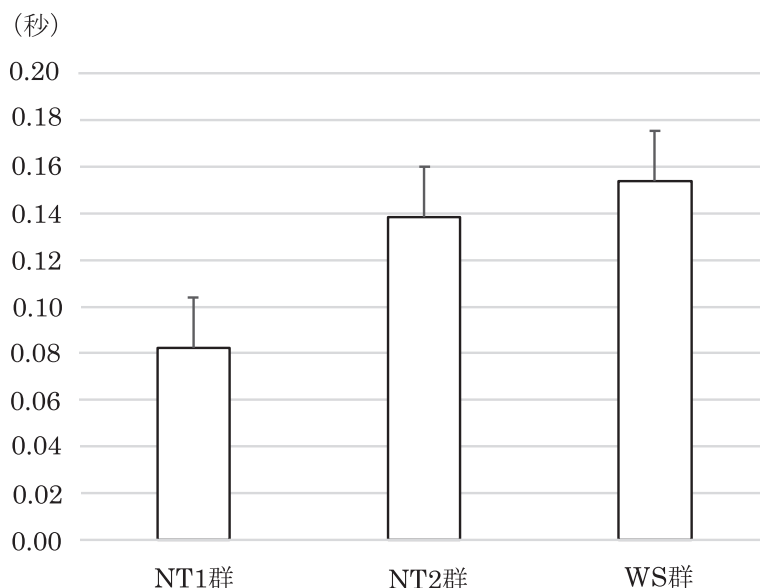


図2 30 m ダッシュの測定値推移の平均値 (平均値+標準誤差)

NT1 群：Normal Training 1 期の被験者群

NT2 群：Normal Training 2 期の被験者群

WS 群：Wall Drill & SSC Drill 期の被験者群

にあったとは言えなかった。本研究の被験者全体をみても、一般的準備期から公式戦期間を経た2回目のPTではタイムが向上した選手が多かったが、中には全く変化しなかった選手や、逆に速度が低くなってしまった選手もいた。このことから、WS群に実施したドリルは、以前から行われている伝統的なトレーニングプログラムと比べても、効果としてはその傾向 ($p < 0.1$) はあるものの、統計学的に有意な差 ($p < 0.05$) は認められなかったということである。

実際に陸上競技短距離種目で取り入れられており、多くの研究によっても効果が実証されている理論を基に作成したドリルであるが、十分な効果が表れなかった要因としては、種目、量、実施頻度、選手の疲労度、さらに野球の競技練習の内容など、様々な要素が考えられる。これは、今後の大学野球選手の短距離走速度向上には、課題を残すことになったが、向上の余地は大きいということでもある。他の競技の練習で取り入れられて効果を上げているとしても、それを野球の練習に導入する際には、果たしてそれが野球選手の走行速度向上に適しているのか、または、野球の練習の中で行うランニングトレーニングとして最適な方法はどのような形式なのかという事に関して、さらなる調査により改善は期待できる。有意な差は認められなかったが、その傾向は予想されるものであったことは、今後の研究において種目、強度、量、頻度、練習中の実施タイミングなど、さらに考慮すれば効果が表れる可能性も少なくない。また、分析では有意な差がなかったという結果は、以前から行われている伝統的なメニューが、実は野球選手には効果があるという可能性も否定できないということである。

このように、様々な観点で課題が残る研究であったが、「速そうに見える」といった、見る者の主観に左右される評価ではなく、絶対的な数値で表される速さを獲得するためには、研究によって立証された理論を理解し、原理・原則に沿ってトレーニングをしていくこととともに、その競技に最適な内容を、様々な角度から検証して導入する必要があると考えられる。

VI. 結 論

大学生野球選手に対して、短距離走速度向上を目的としたドリル介入を行った本研究から、以下のことが明らかになった。

1. 陸上短距離系種目の練習ドリルであるWDとSSCを、大学野球選手に約6か月間実施したが、短距離走速度向上への効果は認められなかったものの、その傾向はうかがえるものであった。
2. 短距離走速度向上に最も特化している、陸上競技短距離種目に取り入れられているトレーニングであっても、野球選手に適した内容にするには、様々な要素を考慮する必要がある。

注

- 注1) 大学野球の公式戦は、春期と秋期の年2回行われる。多くのリーグでは春期が4月と5月、秋期が9月と10月の約2か月間である。公式戦の準備期にあたる練習期間は、春期リーグ戦の準備期が前年の12月から始まり、リーグ戦開始前の3月までであり、秋期リーグ戦の準備期が6月から8月がそれに該当する。この期間中の3月と8月は練習試合期間であり、準備期の中でも「専門的準備期」として、実戦練習に焦点を当てる時期となる。体力強化や基本技術練習に焦点を当てられる「一般的準備期」としては、春期公式戦には前年の12月から翌年の2月、秋期公式戦には6月から7月が、それにあたる。このように、12月から翌年の2月までの計3か月間は、一般的準備期として練習内容をフィジカルトレーニングに重点を置く。しかし、新しいプログラムの習得には時間がかかるため、時間をかけてドリルを習得し、その後、実戦練習が増える専門的準備を経て公式戦期間に入る方法が、ドリル介入の効果を判断するものとして適切であると考えた。反対に、研究対象の測定を1回目が夏期、2回目を冬期にしまうと、フィジカルトレーニングに特化できる一般的準備期は、6月から7月だけになってしまう。その時期には週末に練習試合があり実戦的な練習が優先されるため、冬期の一般的準備期のようにフィジカルトレーニングに重点を置ける状況にならない。その後、8月の専門的準備期は練習試合期間となり、その流れで9月の公式戦期間に入ってしまうため、今回のようなドリル介入を行う効果を図る研究を行うには不都合であると判断した。以上のことから、1回目のPTを冬期、2回目のPTを夏期の順とした。
- 注2) 同大学野球部の練習は、約4～5日行って1日休むというサイクルで行っていた。このため、休日の翌日は、心肺機能を活性化させて休んだ身体を起す目的でF、長距離ランニングを行い、その翌日は乳酸性代謝機構に負荷をかけ、練習クール（約4～5日）の終盤になるにつれて短距離系になっていくという方法を採用した。この方法では、毎週末に公式戦がある同大学野球部のスケジュールに対応しやすい。例えば、月曜日が休日、火曜日が長距離系、水曜日に耐乳酸性能力、木曜日に量が多めの短距離系、金曜日は量の少ない短距離系で調整し、土曜日の試合に臨むという形である。ランニングフォームに関しては、著しく崩れる状況が見られた場合、また速度が著しく遅い選手に対しては指導をしたが、全員に対しては実施しなかった。
- 注3) 測定者は野球部の学生スタッフの中から、各回のPTでそれぞれ違う者が指名され、手動ストップウォッチを使用する。そのため、測定者間の誤差が生じることが考えられる。本来、このPTは各選手同士の競争ではなく、個人の能力向上度を指導者が把握するために実施した。1mに満たない距離差での選手間の勝敗ではなく、トレーニングによる個人の能力の向上度合いが明らかに分かる形で知ることができた。2回測った平均値の10分の1秒の値に表れるような変化であれば、測定者が測定に熟練していない学生だということを考慮しても「変化した」と認めるといふ、指導者間の取り決めであった。ただし、測定者の学生は、普段からグラウンド内で練習のサポートをしている学生コーチを務めている者から選出しており、測定行為自体を全く行ったことがない者を選出はしていない。
- 注4) WS群が屋内練習場で実施したのは、過去に天候によるPTの中止が定期的な体力測定を妨げてきたことがあり、野球部全体の方針として2015年12月以降に行うPTは、屋内練習場を使用することに変更したことが理由である。

参考文献

- 1) Baechle R. Thomas, Earle W. Roger (2010) Anaerobic exercise prescription, *Essentials of Strength Training and Conditioning 3rd ed*, pp. 451-497, (有)ブックハウスHD, 東京.
- 2) Crotin Ryan (2009) Game Speed Training in Baseball, *Strength & Conditioning Journal, Volume16, Number8*, pp.11-23, NSCA-Japan, 東京.
- 3) Delecluse C. (1997) Influence of strength training on sprint running performance, *Sports Medicine*, pp. 147-156, Auckland, NZL.
- 4) 伊藤良彦 (2014) スピード向上トレーニングの理論とプログラム作成, トレーニング指導者テキスト実践編, pp. 78-85, 日本トレーニング指導者協会編著, 東京.
- 5) 羽鳥好夫 (1978) 野球における走塁に関する研究 (第2報): 初心者と熟練者の本塁・2塁間の走塁について, 東京学芸大学紀要, 5, (30), pp. 245-251, 東京.
- 6) 前田祐吉 (1990) 野球定説を見直してみる-③, ベースボールクリニック10月号, pp. 12-16, ベースボールマガジン社, 東京.
- 7) McFarlane B. (1993) A basic and advanced technical model for speed, *Strength and Conditioning Journal, Volume15, Number5*, pp. 57-61, NSCA, CO, USA.
- 8) Murphy A. J, Lockie R. G, Coutts A. J. (2003) Kinematic Determinants of early acceleration in field sports athletes, *Journal of Sports Science and Medicine, Volume2*, pp. 144-150, Bursa, TUR.
- 9) 中山悌一 (2011) プロ野球選手のデータ分析, (有)ブックハウスHD, pp. 169-173, 東京.
- 10) Szymanski D. J, Fredrick G. A. (2001) Baseball(Part II): A periodized speed program, *Strength and Conditioning Journal, Volume23, Number2*, pp. 44-52, NSCA, CO, USA.
- 11) 筒井健裕 (2015) スピードトレーニングの応用理論と実際のスプリント練習法, NSCAジャパン, レベルII講習資料, pp. 14, 東京.

研究ノート

2020年オリンピック・パラリンピック東京大会開催地の住民におけるスポーツ振興に関する要望と期待される効果に関する研究

秋 吉 遼 子
上 代 圭 子

A Study of the Awareness of Sports Promotion and Expected Impact of the Tokyo 2020 Olympics among Residents of a City Serving as a Venue for TOKYO 2020

AKIYOSHI, Ryoko
JODAI, Keiko

Abstract

The purpose of this study was to examine the awareness of sports promotion among residents of Kawagoe city, which is one of the venues for the Tokyo 2020 Olympics and the expected impact from such event. The sample of this study was the participants and spectators in a marathon event in Kawagoe city. The main results of this study were as follows:

- 1) The residents of a venue site for the Tokyo 2020 Olympics expect increased opportunities for daily sport activities such as the holding of various sport events, competitions, and school physical education classes and maintenance of school facilities.
- 2) Most of the residents expect social impacts as the likely result from the Tokyo 2020 Olympics and three out of four are in favor of Tokyo hosting Olympics.
- 3) Residents of other areas outside of Kawagoe city have more expectation of increased park and recreation facilities in Kawagoe city as a result of the Tokyo 2020 Olympics than do the residents of Kawagoe city.

Key words: TOKYO 2020, sports promotion, impact, local residents, Kawagoe city

キーワード：東京2020大会，スポーツ振興，効果，地域住民，川越市

目 次

- I. 緒言
- II. 研究方法
 - 1. 調査対象
 - 2. 調査方法
 - 3. 調査項目
 - 4. 分析方法
- III. 結果と考察
 - 1. サンプルの個人的属性とスポーツ実施頻度
 - 2. スポーツ振興に関する要望
 - 3. イベントへの関わり
 - 4. 東京2020大会開催により期待される効果と支持
- IV. まとめ

I. 緒 言

近年、スポーツ振興に様々な観点から取り組む自治体が急増している。市民参加型のスポーツイベントは全国各地で活発に行われており、スポーツイベントは全国で誘致されている。また、2020年オリンピック・パラリンピック東京大会（以下、「東京2020大会」）開催決定後は、事前キャンプの誘致合戦も白熱している。¹⁰⁾自治体が、スポーツイベントの誘致や東京2020大会の事前キャンプに力を入れている理由は、開催地に経済的効果や社会的効果があり、^{5) 18)}地域活性化につながるのではないかと期待されているからである。埼玉県川越市も例外ではない。川越市では、東京2020大会のゴルフ競技が開催される予定であることから、川越市内の関係団体で構成される「東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会川越市支援委員会」における検討だけでなく、市民の協力を得ながら、地域の活性化に取り組んでいる。⁶⁾

しかし、オリンピックのようなビッグスポーツイベントの開催は、開催地に多くのスポーツツーリストを呼び込むが、良くも悪くも開催地の住民に影響を及ぼすことが実証されている。^{13) 16)}そして、地域のサポートなしに、持続可能なツーリズム産業を発展させることは困難である。²⁾そのため、地域で開催されるスポーツイベントに対する地域住民の態度を明らかにすることは、今後のまちづくりの観点から意義があると考えられる。

内閣府¹²⁾は、東京2020大会の開催で期待される効果として、「スポーツ（障がい者スポーツを含む）の振興」を4割の人が挙げていることを報告しており、スポーツ振興を望む人が一定数いることは明らかになっている。しかし、東京2020大会開催の影響を良くも悪くも受けるであろう開催地の住民が、どのようなスポーツ振興を具体的に望んでいるかは明らかになっていない。そのため、東京2020大会開催に向けて、かつ東京2020大会開催後のスポーツ環境を長期的なスパンで考えていくためには、東京2020大会開催地の住民のニーズを把握することは重要であると考えられる。そこで、本研究の目的は、東京2020大会の競技会場がある川越市の住民におけるスポーツ振興に関する要望と東京2020大会開催の期待される効果を明らかにすることとする。

なお、本研究では、川越市の住民と川越市外の住民で比較することとした。その理由は、川越

市の住民の特徴をより明確にするため、加えて、居住歴やツーリズムへの関与が効果の認知に影響を及ぼすことから、³⁾ ¹⁵⁾ 川越市の住民と川越市外の住民とでは、東京2020大会開催に伴う川越市への期待される効果が異なることが推測されるためである。

Ⅱ. 研究方法

1. 調査対象

調査対象は、川越市で行われている「小江戸川越ハーフマラソン」の参加者、観戦者、ならびに近隣住民である。なお、小江戸川越ハーフマラソンは、毎年、川越市で開催されている。川越市は、埼玉県の中央部よりやや南部にあり、都心から30 kmの首都圏に位置する。35万人を超える人口を有する都市であり、近郊農業、流通業、商工業、観光など、充実した都市機能を有している。⁷⁾ 2015年の入込観光客数は、6,645,000人であり、⁸⁾ 増加の一途を辿っている。その川越市で開催されている小江戸川越ハーフマラソンは、ハーフ、10 km, Fun Run (約4 km) の3種目があり、約1万人が参加している。

2. 調査方法

平成27年11月29日に開催された小江戸川越ハーフマラソンの参加者、観戦者、ならびに近隣住民に対し、直接配布回収による質問紙調査(別紙1)を行った。小江戸川越ハーフマラソンのハーフと10 kmの参加者に対しては、スタートとゴールがある川越水上公園において、Fun Runの参加者に対しては、ゴールの川越市役所南側駐車場において、調査を行った。観戦者と近隣住民に対しては、コースの沿道において調査を行った。調査員は、事前にトレーニングされた14名である。回収数ならびに有効回答数は530票であった。

3. 調査項目

調査項目は、スポーツ実施頻度、スポーツ振興に関する要望、イベントへの関わり、東京2020大会開催により期待される効果、東京2020大会開催の支持、個人的属性である。スポーツ実施頻度とスポーツ振興に関する要望は、文部科学省¹¹⁾の項目を援用した。イベントへの関わりは、Kenyon⁹⁾と山口¹⁹⁾による資料を参考に、川越市のスポーツイベントと川越市のイベント(スポーツ以外)に対して、参加者、観客、及びスタッフ・ボランティアとしての関わりの有無を、東京2020大会においては、参加者、観客、及びスタッフ・ボランティアとして関わることを希望するか否かを問うた。東京2020大会開催により期待される効果については、先行研究²⁾ ⁴⁾を基に、日本で妥当性と信頼性が検証されている18項目(社会的効果5項目、環境的効果4項目、経済的効果3項目、否定的な影響6項目)¹⁾ ¹⁴⁾ ¹⁷⁾から、スポーツ社会学が専門の研究者2名と川越市のオリンピック大会準備室3名の計5名で協議を行い、川越市の状況に見合うよう修正を施した。そして、プレテストを33名に対して実施し、最終的に16項目を設定した(社会的効果5項目、環境的効果4項目、経済的効果3項目、否定的な影響4項目)。東京2020大会開催の支持については、1項目を設定した。東京2020大会開催の期待される効果と支持については、ともにリッカートタイプの5段階尺度(1:「とてもそう思わない」～5:「とてもそう思う」)を用い、等間隔尺度を構成するものとして仮定した。個人的属性は、性別、年齢、居住地、居住歴、職業の5項目を設定した。

4. 分析方法

川越市の住民と川越市外の住民で比較を行うため、 χ^2 検定を行った。本研究における統計的な処理は、SPSS23.0を使用した。

Ⅲ. 結果と考察

1. サンプルの個人的属性とスポーツ実施頻度

サンプルの居住地は、川越市が58.9%、川越市外が41.1%であった。そして、表1は、居住地別のサンプルの個人的属性とスポーツ実施頻度を示している。性別は、川越市の住民は男性が56.5%、女性が43.5%であった。川越市外の住民は男性56.8%、女性が43.2%であった。年代については、川越市の住民は40代（34.0%）が最も多く、次いで30代（20.0%）であった。川越市外の住民は40代（30.7%）が最も多く、次いで20代（24.9%）であった。川越市の住民における川越市の居住歴は、40～49年が2割を超えた。職業は、川越市の住民は会社員（32.3%）が最も多く、次いで自営業（15.2%）であった。川越市外の住民は会社員（60.4%）が圧倒的に多かった。

過去1年間のスポーツ実施頻度について、川越市の住民は「週に1～2日」（31.6%）が最も多く、次いで「月に1～3日」（17.4%）であった。川越市外の住民は「週に1～2日」（37.4%）が最も多く、次いで「月に1～3日」（21.0%）であった。居住地で比較した結果、川越市の住民より川越市外の住民の方が、日常的にスポーツを実施していることが明らかになったが（ $p < .05$ ）、川越市の住民においても、全国調査¹²⁾の結果と比べると、より多く日常的にスポーツを実施している結果となった。これは、マラソンイベントにおいて調査したことに起因していると考えられる。

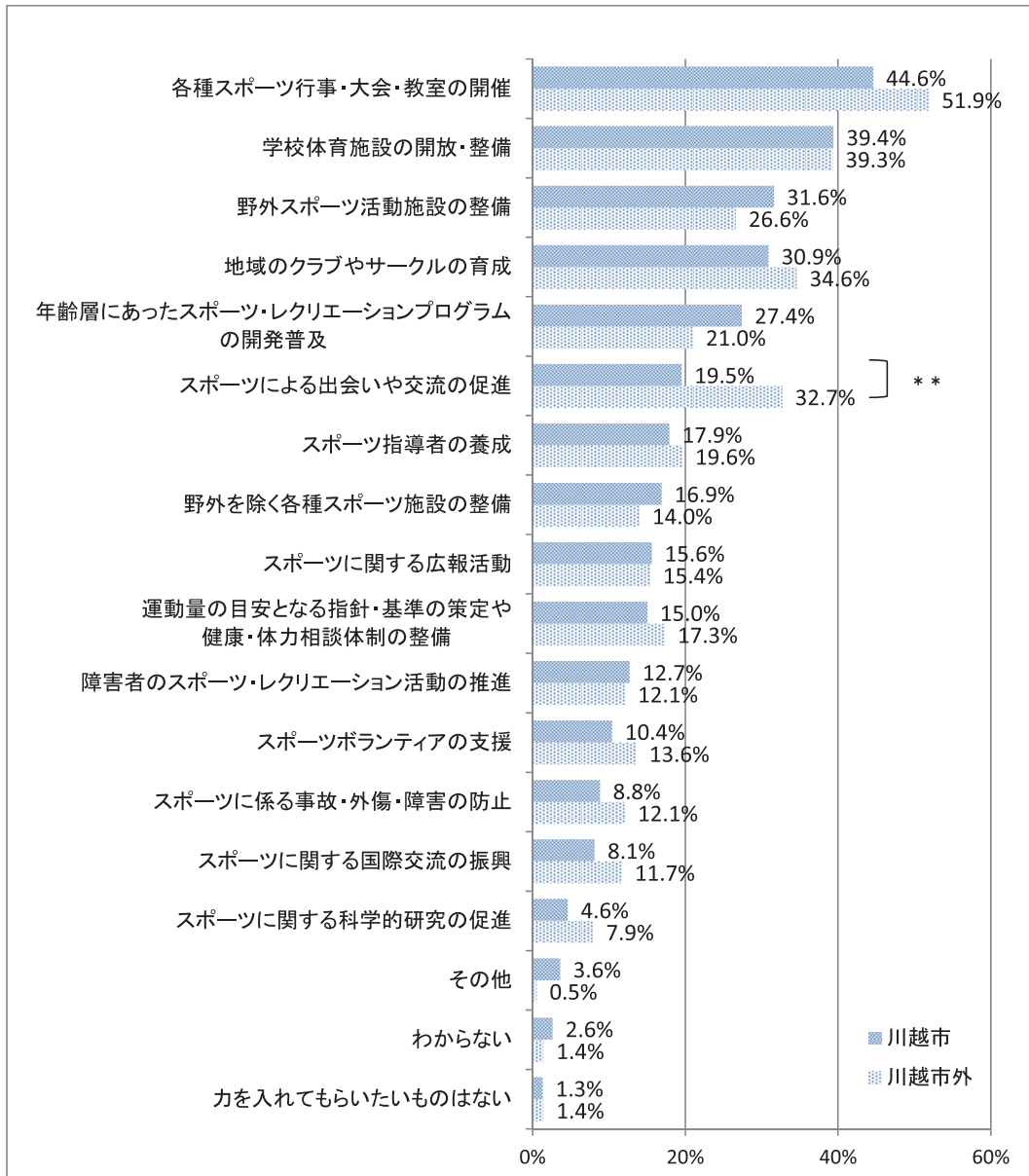
2. スポーツ振興に関する要望

スポーツ振興に関する要望については、「各種スポーツ行事・大会・教室の開催」（川越市44.6%、川越市外51.9%）、「学校体育施設の開放・整備」（川越市39.4%、川越市外39.3%）、「野外スポーツ活動施設の整備」（川越市31.6%、川越市外26.6%）、「地域のクラブやサークルの育成」（川越市30.9%、川越市外34.6%）を要望する人が多い（図1）。この結果は、文部科学省¹¹⁾が行った全国調査よりも、要望する人が多い傾向にある。その理由として、本研究の限界にも関係する

表1 サンプルの個人的属性とスポーツ実施頻度

		川越市		川越市外			川越市		川越市外		
		%	n	%	n		%	n	%	n	
性別	男性	56.5%	147	56.8%	108	職業	会社員	32.3%	98	60.4%	128
	女性	43.5%	113	43.2%	82		公務員	11.6%	35	12.7%	27
年代	10代	3.0%	9	2.9%	6		自営業	15.2%	46	6.1%	13
	20代	9.7%	29	24.9%	51		学生	6.3%	19	6.6%	14
	30代	20.0%	60	22.9%	47		専業主婦	9.9%	30	6.1%	13
	40代	34.0%	102	30.7%	63		パート・アルバイト	13.5%	41	5.2%	11
	50代	9.0%	27	11.2%	23		無職	7.3%	22	0.9%	2
	60代	12.3%	37	6.3%	13		その他	4.0%	12	1.9%	4
	70代以上	12.0%	36	1.0%	2		週に3日以上	14.5%	44	18.7%	40
川越市の居住歴	9年未満	14.8%	44				週に1～2日	31.6%	96	37.4%	80
	10～19年	19.8%	59			月に1～3日	17.4%	53	21.0%	45	
	20～29年	10.1%	30			3ヶ月に1～2日	9.9%	30	7.0%	15	
	30～39年	15.1%	45			年に1～3日	9.9%	30	6.1%	13	
	40～49年	21.8%	65			しなかった	16.8%	51	9.8%	21	
	50年以上	18.4%	55								

* $p < .05$



**p < .01

図1 スポーツ振興に関する要望

が、本調査はマラソンイベントにおいて調査したことから、普段からスポーツを実施し、スポーツ環境と触れ合い、現状を知っている人が多いことが、その原因と考えられる。

また、相対的に川越市の住民より川越市外の住民の方がスポーツ振興に要望があると言えるが、特に「スポーツによる出会いや交流の促進」において有意な差がみられ、川越市の住民より川越市外の住民の方が望んでいることが明らかになった。その理由として、スポーツイベントに参加

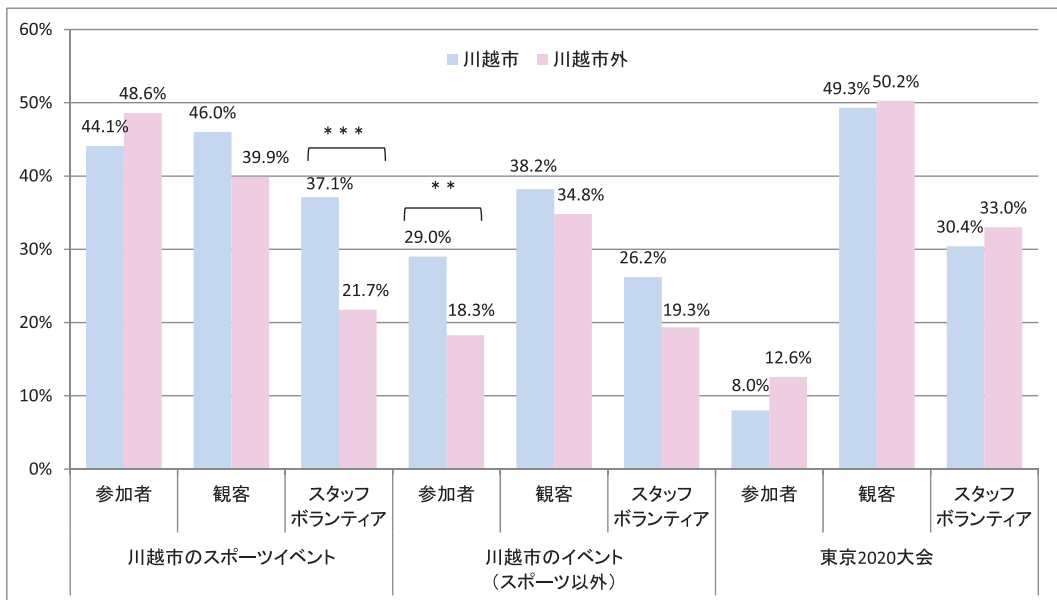
する人は、スポーツをすることに加えて、他者との交流を求めていることから、川越市のスポーツイベントに参加していると予想される。

3. イベントへの関わり

イベントへの関わりについて、過去の川越市のスポーツイベントへの関わり方としては、参加者と観客がスタッフ・ボランティアよりも多い傾向にある(図2)。川越市のイベント(スポーツ以外)への関わり方としては、観客が最も多い。また、東京2020大会への関わり方の希望としては、観客が最も多いことが明らかになった。居住地で比較した結果、川越市外の住民より川越市の住民の方が、川越市のスポーツイベントにおけるスタッフ・ボランティアとして、川越市のイベント(スポーツ以外)における参加者として関わっていることが明らかになった。これは、物理的な距離が影響していると考えられる。

4. 東京2020大会開催により期待される効果と支持

東京2020大会開催により期待される効果に関して、相対的に、社会的効果が最もあると期待している人が多いことがうかがえる(図3)。社会的効果について、「川越市のイメージを向上させるだろう」、「スポーツ観光客と交流することは、川越市外の文化や社会を理解する貴重な経験になるだろう」、及び「川越市の文化的イメージにプラスの影響を与えるだろう」は、7割以上の人が、期待される効果だと認識している。すなわち、東京2020大会の開催は、開催地のイメージ向上につながることを期待している人が特に多いことがわかる。環境的效果については「川越市の公園やレクリエーションの場が増えるだろう」とし、経済的效果については「川越市の住民と中小企業に経済的利益を与えるだろう」が最も効果があると期待されている。否定的な影響は「川越市に交



p < .01 *p < .001

図2 イベントへの関わり



*p < .05

図3 東京2020大会開催により期待される効果と支持

通渋滞、騒音、汚染を生じさせるだろう」が最も影響があると感じている。居住地で比較した結果、川越市の住民より川越市外の住民の方が、「川越市の公園やレクリエーションの場が増えるだろう」と感じていることが明らかになった。すなわち、川越市の住民より川越市外の住民の方が、東京2020大会の開催によって、川越市内にスポーツをすることができる環境が増えると予想しているということである。

東京2020大会開催の支持については、否定的な影響があると感じているものの、開催を支持している人が多いことが明らかになった（川越市76.5%、川越市外81.6%）。しかし、居住地で比較した結果、有意な差はみられなかった。このことから、川越市の住民も川越市外の住民も、東京2020大会の会場のひとつが川越市内にあることに対して、好意的に捉えている人が多いことが明らかになった。

Ⅳ. まとめ

本研究の目的は、東京2020大会の競技会場がある川越市の住民におけるスポーツ振興に関する

要望と東京2020大会開催により期待される効果を明らかにすることである。主な結果は以下の3点である。

1. 東京2020大会の競技会場がある地域の住民は、スポーツ振興の具体的な方策として、各種スポーツ行事・大会・教室の開催や学校体育施設の開放・整備等、日常的なスポーツ活動の機会の増加を望んでいる。
2. 東京2020大会の競技会場がある地域の住民は、東京2020大会開催の効果として、社会的効果に最も期待している傾向にあり、4人に3人が開催を支持している。
3. 東京2020大会の競技会場がある地域の住民より、他の地域の住民の方が、東京2020大会開催により、公園やレクリエーションの場が増えると期待している。

本研究の限界として、マラソンイベントにおいて調査を実施したことから、スポーツや東京2020大会に対して好意的な態度の人がサンプルに多いことが考えられ、一般化できない点がある。しかし、本研究は、以下2点の有益なインプリケーションを与えると考える。

1点目は、東京2020大会の競技会場がある自治体は、東京2020大会の開催のみに力を注ぐのではなく、東京2020大会前後の住民のスポーツ機会の創造も継続的に行っていく必要がある。川越市の住民の4人に3人が東京2020大会の開催を支持しているが、各種スポーツ行事・大会・教室の開催や学校体育施設の開放・整備等、日常的なスポーツ活動の機会の増加を望んでいることも事実である。

2点目は、スポーツイベントを開催する自治体や主催者は、スポーツイベントにおいて参加者同士や地域住民との交流の場を積極的に設けることである。川越市の住民より川越市外の住民の方が「スポーツによる出会いや交流の促進」を望んでいたことが、本研究の結果から明らかになった。交流できるようなプログラムを設けることで、地域外からの参加者等が集まり、地域活性化につながる可能性がある。

謝 辞

平成27年度地（知）の拠点大学における地方創生推進事業地域志向教育研究経費を受けて実施しました。また、川越市政策財政部オリンピック大会準備の担当者の協力を得て、調査を行いました。ここに感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 秋吉遼子・山口泰雄・朴永晔・稲葉慎太郎(2012) スポーツ観光の効果に関する研究——沖縄県名護市のケーススタディ——. 日本体育学会第63回大会体育社会学専門領域発表論文集, 20: 87-92.
- 2) Anderech, K. L. and Vogt, C. A. (2000) The relationship between residents' attitudes toward tourism and tourism development options. *Journal of Travel Research*, 39(1): 27-36.
- 3) Ap, J. (1992) Residents' perception on tourism impacts. *Annals of Tourism Research*, 19(4): 665-690.
- 4) Hritz N. and Ross C. (2010) The perceived impacts of sport tourism: An Urban Host Community Perspective. *Journal of Sport Management*, 24: 119-138.
- 5) 一般財団法人長野経済研究所 (2014) 平成26年度スポーツ政策調査研究（スポーツの経済効果に関する調査研究）調査報告書。
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/sports/detail/_icsFiles/fieldfile/2014/12/08/1353860_1.pdf
- 6) 川越市 (2016a) 第四次川越市総合計画。
<http://www.city.kawagoe.saitama.jp/shisei/seisakushisaku/sogokeikaku/gikisogokeikaku/4thsogo-keikaku.files/ikkatsu.pdf>
- 7) 川越市 (2016b) 川越市役所ホームページ. 川越市のプロフィール.

- <https://www.city.kawagoe.saitama.jp/shisei/shinogaiyoshoukai/kawagoe/220141225.html>
- 8) 川越市 (2016c) 川越市役所ホームページ. 川越市入込観光客数.
<http://www.city.kawagoe.saitama.jp/welcome/kankobenrijoho/kankotokeishiryo/irikomi.files/irekomi27.pdf>
 - 9) Kenyon, G. S. (1969) Sport involvement: A conceptual goal and some consequences thereof. In G. S. Kenyon (Ed.), *Sociology of Sport*. Chicago: The Athletic Institute.
 - 10) 間野義之 (2015) 奇跡の3年2019・2020・2021 ゴールデン・スポーツイヤーズが地方を変える. 徳間書店: 東京.
 - 11) 文部科学省 (2013) 体力・スポーツに関する世論調査.
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa04/sports/1338692.htm
 - 12) 内閣府 (2015) 東京オリンピック・パラリンピックに関する世論調査.
<http://survey.gov-online.go.jp/h27/h27-tokyo/index.html>
 - 13) Ohmann, S., Jones, I., and Wilkes, K. (2006) The perceived social impacts of the 2006 Football World Cup on Munich residents. *Journal of Sport & Tourism*, 11(2): 129-152.
 - 14) 朴永晷・秋吉遼子・稲葉慎太郎・山口志郎・山口泰雄 (2012) スポーツツーリズムによる地域活性化のアクションリサーチ——沖縄県名護市のスポーツ観光のまちづくりを目指して——. *SSFスポーツ政策研究*, 1 (1): 150-159.
 - 15) Pizam, A., Milman, A., and King, B. (1994) The perceptions of tourism employees and their families toward tourism. *Tourism Management*, 15: 53-61.
 - 16) Waitt, G. (2003) Social impacts of the Sydney Olympics. *Annals of Tourism Research*, 30(1): 194-215.
 - 17) 山口志郎・秋吉遼子・山口泰雄 (2015) スポーツツーリズムの社会的効果に関する実証的研究: 沖縄県名護市における地域住民の性別比較. *体育・スポーツ科学*, 24: 19-29.
 - 18) 山口泰雄 (2014) 第10章スポーツツーリズム. 大橋昭一・橋本和也・遠藤英樹・神田孝治編, *観光学ガイドブック——新しい知的領野への旅立ち——*. ナカニシヤ出版: 京都. 212.
 - 19) 山口泰雄編 (1996) *健康・スポーツの社会学*. 建帛社: 東京. 32.

別紙 1

川越市のスポーツに関する調査

本調査は、川越市政策財政部オリンピック大会準備室協力のもと、川越市のスポーツ振興に対するニーズと川越市のスポーツイベントに関する調査を行い、今後の川越市のスポーツ環境に役立てることを目的としています。ご回答いただきました内容は、すべて統計的に処理いたしますので、個人の情報が公開されるようなことは一切ございません。また、他の目的には使用いたしません。お忙しいところ誠に恐縮ですが、本調査の趣旨をご理解いただき、ご協力くださいますようお願い申し上げます。

東京国際大学 上代圭子・秋吉遼子

問1. 過去1年間に、どのくらい運動やスポーツを実施しましたか？ **あてはまる番号1つに○をつけてください。**

- | | |
|---------------------|----------------------|
| 1. 週に3日以上(年151日以上) | 2. 週に1~2日(年51日~150日) |
| 3. 月に1~3日(年12日~50日) | 4. 3か月に1~2日(年4~11日) |
| 5. 年に1~3日 | 6. しなかった |

問2. スポーツをもっと振興させるために、国や県または市町村に今後どのようなことに力を入れてもらいたいと思いますか？ **あてはまる番号すべてに○をつけてください。**

1. 各種スポーツ行事・大会・教室の開催	2. 地域のクラブやサークルの育成
3. スポーツによる出会いや交流の促進	4. スポーツ指導者の養成
5. スポーツに関する広報活動	6. 学校体育施設の開放・整備
7. 野外スポーツ活動施設の整備	8. 野外を除く各種スポーツ施設の整備
9. スポーツに関する国際交流の振興	10. スポーツに関する科学的研究の促進
11. スポーツボランティアの支援	12. 障害者のスポーツ・レクリエーション活動の推進
13. 年齢層にあったスポーツ・レクリエーションプログラムの開発普及	14. 運動量の目安となる指針・基準の策定や健康・体力相談体制の整備
15. スポーツに係る事故・外傷・障害の防止	16. 力を入れてもらいたいものはない
17. わからない	18. その他()

問3. 川越市のスポーツイベントとイベント(スポーツ以外)にかかわったことがありますか？ また、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会にかかわりたいと思いますか？ **①参加者、②観客、③スタッフ・ボランティアの参加形態それぞれについて、あてはまる番号を1つずつ選んでください。**

	①参加者		②観客		③スタッフ・ボランティア	
	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
1)川越市のスポーツイベント	1	2	1	2	1	2
2)川越市のイベント(スポーツ以外)	1	2	1	2	1	2
3)2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会	1	2	1	2	1	2

裏のページへ進んでください

問4. 2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会(以下「東京オリパラ」)のゴルフの会場として、埼玉県川越市にある霞ヶ関カンツリー倶楽部が予定されています。東京オリパラ開催期間は、ゴルフの観戦を主な目的とした観光客が、川越市に大勢来ることが予想されます。川越市にどのような影響を及ぼすと思いますか？ 下記1)～17)のそれぞれについて、あてはまる番号を1つずつ選んでください。

	とても 思わない	そう 思わない	どちら でもない	そう 思う	とても 思う
1)東京オリパラ開催は、川越市のイメージを向上させるだろう	1	2	3	4	5
2)東京オリパラ開催は、川越市の住民の多様な文化活動を促進するだろう	1	2	3	4	5
3)スポーツ観光客と交流することは、川越市外の文化や社会を理解する貴重な経験になるだろう	1	2	3	4	5
4)東京オリパラ開催は、川越市の文化的イメージにプラスの影響を与えるだろう	1	2	3	4	5
5)東京オリパラ開催により、川越市の住民は個人的にプラスの影響を受けるだろう	1	2	3	4	5
6)東京オリパラ開催は、川越市における犯罪率を増加させるだろう	1	2	3	4	5
7)スポーツ観光客の増加により、川越市の住民の生活に支障がでるだろう	1	2	3	4	5
8)東京オリパラ開催により、川越市の公園やレクリエーションの場が増えるだろう	1	2	3	4	5
9)東京オリパラ開催により、川越市の道路と公共施設は高い水準を維持できるだろう	1	2	3	4	5
10)東京オリパラ開催により、川越市の自然環境の保護につながるだろう	1	2	3	4	5
11)東京オリパラ開催により、川越市の景観が良くなるだろう	1	2	3	4	5
12)東京オリパラ開催は、川越市に交通渋滞、騒音、汚染を生じさせるだろう	1	2	3	4	5
13)東京オリパラ開催は、川越市においてさらに雇用を促進するだろう	1	2	3	4	5
14)東京オリパラ開催は、川越市の住民と中小企業に経済的利益を与えるだろう	1	2	3	4	5
15)東京オリパラ開催により、川越市の住民の生活水準は向上するだろう	1	2	3	4	5
16)東京オリパラ開催が原因で、川越市における商品とサービスの値段が高くなるだろう	1	2	3	4	5
17)川越市における東京オリパラ開催を支持する	1	2	3	4	5

問5. あなた自身についておたずねします。

性別	男性・女性	年齢	満()歳
居住地	川越市外 ・ 川越市 → 川越市の居住歴	()年	
職業	1. 会社員 2. 公務員 3. 自営業 4. 学生 5. 専業主婦 6. パート・アルバイト 7. 無職 8. その他()		
現在、定期的に行っているスポーツ(複数選択可)	1. ランニング 2. ウォーキング 3. 水泳 4. 体操 5. 野球 6. サッカー 7. テニス 8. ゴルフ 9. バスケットボール 10. バレーボール 11. ヨガ 12. その他() 13. なし		

以上で質問は終了です。
ご協力いただき、誠にありがとうございました。

執筆 者 紹 介 (掲 載 順)

田部井 潤	人 間 社 会 学 部	教 授	高 等 教 育 論
大 矢 泰 士	人 間 社 会 学 部	教 授	臨 床 心 理 学
麓 正 樹	人 間 社 会 学 部	准 教 授	ス ポ ー ツ 科 学, 応 用 健 康 科 学
安 岡 真	人 間 社 会 学 部	准 教 授	日 本 文 学, ヨ ー ロ ッ パ 語 系 文 学
赤 池 行 平	人 間 社 会 学 部	専 任 講 師	ス ト レ ン グ ス & コ ン デ ィ シ ョ ン ン グ
秋 吉 遼 子	人 間 社 会 学 部	客 員 講 師	ス ポ ー ツ 社 会 学
上 代 圭 子	商 学 部	准 教 授	ス ポ ー ツ 社 会 学

編 集 後 記

『東京国際大学論叢 人間科学・複合領域研究』第2号をお届けします。本号には原著論文4本と研究ノート3本が掲載されました。原著論文は教育、臨床心理学、スポーツ科学、文学と複合領域らしい構成となりました。また、研究ノートは野球技術に関する2本と2020年オリンピック・パラリンピックを題材としたスポーツ社会学の1本です。

論叢は、昨年度(2015年)本学の研究活性化に資するための工夫として領域やメディアを改め、学部の枠を越えて新しく生まれ変わりました。初めての試みとなる昨年度は、碓井先生がお一人で編集を担当されました。昨年度の人間科学・複合領域には多数の投稿があり、領域も多様でした。研究論文として査読を行うことから、大変ご苦労された様子でした。そこで本年度は私も碓井先生と一緒に編集を担当させていただくことになりました。新方式に不慣れなため、碓井先生には色々とお教えいただき、様々な場面で助けていただきました。紙面をお借りしてお礼を申し上げたいと思います。また、査読を快く引き受けていただいた査読者の先生方にもお礼を申し上げます。ありがとうございました。

次年度(2017年)には学部の所属を越えた研究領域ごとのファカルティセミナー(研究会)が企画されます。ファカルティセミナーは、5分野5論叢とリンクしています。これらの改革により、ますます本学の研究活動が活発になることが期待され、活性化した研究の成果発表の場として論叢が利用される事も期待されます。人間科学・複合領域は「人」を中心とした学際的な研究領域です。これまでにも行ってきた日常的な教員間の交流とファカルティセミナーでの交流を通して教員がお互いに刺激し合い、新しい発想や新しい研究の種が人間科学・複合領域に落とされることとなります。私も編集担当として、つぼみを膨らませる場、あるいは花を咲かせる場として論叢が十分に機能するよう整えていきたいと思っています。そして本学教員の研究交流、さらには学外研究者との研究交流から芽が出て花が咲くことを今から楽しみにしています。皆さまもご期待下さい。

(『人間科学・複合領域研究』編集委員 布川清彦)

東京国際大学論叢 人間科学・複合領域研究 第2号 2017(平成29)年3月20日発行
[非売品]

編 集 者	東京国際大学人間科学・複合領域研究論叢編集委員 碓井外幸 東京国際大学人間科学・複合領域研究論叢編集委員 布川清彦
発 行 者	高 橋 宏
発 行 所	〒350-1197 埼玉県川越市の場北1-13-1 TEL (049) 232-1111 FAX (049) 232-4829
印 刷 所	株式会社 東 京 プ レ ス 〒161-0033 東京都新宿区下落合3-12-18 3F

THE JOURNAL OF TOKYO INTERNATIONAL UNIVERSITY

Interdisciplinary Studies

No. 2

Articles

Thinking about the View of University Curriculum:

What Should the Universe Teacher Do? TABELI, Jun

Theoretical Background of the Concept of Identity

and its Problems: An Attempt for Re-examination
from Psychoanalytic Viewpoints OYA, Yasushi

Effect of Voluntary Abdominal Breathing on Stress

Responses Induced by Watching a Movie Clip FUMOTO, Masaki

'A Toast to the Sun'-Yukio Mishima's Desire for

Life: A Study of the Psychological Mechanism of
the 'Mishima Incident' ② YASUOKA, Makoto

Research Note

The Effect of Pre-Season Running Training for

Game Performance of University Baseball Pitcher AKAIKE, Kohei

The Effect of Sprint Drills for Improving Short

Sprinting Ability of University Baseball Players AKAIKE, Kohei

A Study of the Awareness of Sports Promotion

and Expected Impact of the Tokyo 2020 Olympics
among Residents of a City Serving as a Venue for TOKYO 2020 ... AKIYOSHI, Ryoko
JODAI, Keiko

2 0 1 7